秋田城跡歴史資料館年報 2017

秋 田 城 跡

秋 田 市 教 育 委 員 会

秋田城跡歴史資料館年報 2017

秋 田 城 跡

秋 田 市 教 育 委 員 会

序　　文

平成 29 年度の秋田城跡発掘調査は、焼山地区等で３箇所において実施し、奈良時代から平安時代にかけての遺構・遺物が発見されるなど、多くの成果をあげることができました。

第 108 次調査では、焼山地区中央部の城内区画施設の中で、焼土遺構や竪穴建物跡が発見され、9 世紀～10 世紀前葉の当該地の利用について新たな所見を得ることができました。また、第 109 次調査では、焼山地区北西部で、中世後期の材木塀跡と奈良時代・平安時代の道路遺構の一部を発見しました。さらに、第 110 次調査では、政庁西側と焼山地区東部で、城内西大路の検出に努めましたが、発見には至りませんでした。

これらは、史跡の保護・整備・活用を行う上で必要不可欠な情報であり、今後、今回の成果をもとに復元整備を行っていく予定です。また、環境整備事業につきましては、城内東大路の整備を行い、順調に整備事業を推進しております。

このように、秋田城跡の発掘調査と保護管理、環境整備事業が順調に進んでいることは、文化庁および秋田県教育委員会をはじめとする関係機関や環境整備指導委員会委員、そして地元住民の皆様の多大なるご指導・ご協力の賜物と、心より深く感謝申し上げます。

平成 30 年３月

秋田市教育委員会

秋田城跡歴史資料館年報 2017

目　　次

例言・凡例

Ⅰ　調査の計画と実施状況……1
Ⅱ　第 108 次調査報告
　1　調査経過……2
　2　検出遺構と出土遺物……9
　　①Ａ区第Ⅲ層面検出遺構と遺物……9
　　②Ａ区第Ⅳ層面検出遺構と遺物……12
　　③Ｂ区第Ⅳ層面検出遺構……35
　3　基本層序および各層出土遺物……35
Ⅲ　第 109 次調査報告
　1　調査経過……46
　2　検出遺構と出土遺物……46
　　①第Ⅱ層面検出遺構と遺物……46
　　②第Ⅲ層面検出遺構と遺物……51
　　③第Ⅳ・Ⅴ層面検出遺構と遺物……51
　3　基本層序および各層出土遺物……53
Ⅳ　第 110 次調査報告
　1　調査経過……55
　2　基本層序および各層出土遺物……55
Ⅴ　考察
　1　第 108 次調査について……61
　2　第 109 次調査について……66
　3　第 110 次調査について……71
Ⅵ　秋田城跡環境整備事業……74
Ⅶ　秋田城跡保存活用整備事業……75
Ⅷ　秋田城跡現状変更……77
別編　「古代秋田城の築地塀を構成する白色および褐色粘土の互層構造について（その２）」
　今井忠男・西川治・千田恵吾・木崎彰久・栗崎笑・柴田いずみ……78
写真図版……83
報告書抄録……106
秋田城跡歴史資料館要項……107

例　　言

1　本書は、平成29年度に実施した秋田城跡第108～110次発掘調査、秋田城跡環境整備事業、秋田城跡保存活用整備事業、秋田城跡現状変更の記録を収録したものである。

2　本書の編集は神田和彦、児玉駿介、松下秀博、阿部美穂が行った。Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ-２・３を神田和彦、Ⅱ・Ⅴ-１を児玉駿介、Ⅵを松下秀博、Ⅶ・Ⅷを阿部美穂が執筆した。

3　遺物の実測・トレース、遺構図の作成およびトレースは、神田・児玉のほか、整理員等の森泉裕美子、伊藤雅子、宮田美奈子、今野祥子が行った。

4　遺構の写真撮影は神田・児玉、遺物の写真撮影は、神田が行った。

5　本調査で得られた資料は、秋田市で保管している。

6　発掘調査では、以下の方々や関係機関から指導・助言を賜った。記して感謝したい。

新野直吉、岡田茂弘、渡邉定夫、田中哲雄、木村勉、熊田亮介、川畑純、須田良平、吉野武、五島昌也、小松正夫、大橋泰夫、高橋学、五十嵐一治、磯村亨、高橋和成、伊豆俊祐、根岸洋、嶋影壮憲、文化庁記念物課、国立歴史民俗博物館、奈良文化財研究所、宮城県教育委員会、東北歴史博物館、多賀城跡調査研究所、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター

（敬称略・順不同）

凡　　例

遺　物

1　土器の断面を黒く塗りつぶしたのが須恵器である。

2　土器の性格、表面付着物の相違については、下記のスクリーントーンで表現した。

黒色処理　　転用硯　　煤　　漆

3　土器の調整技術や切り離し等の表記は、下記のとおりである。

・回転利用ケズリは、ケズリ調整と記載。ケズリ調整以外の調整はその都度別記。

・ロクロ等広い意味の回転を利用したカキ目調整は、ロクロ利用のカキ目調整と記載。

・切り離し、粘土紐、タタキ痕跡等、成形時痕跡の消滅を目的としない軽度な器面調整痕跡は、軽いナデ調整と記載。成形時痕跡の摩滅を目的とし、痕跡が一部残るものをナデ調整、ほとんど痕跡を残さないものを丁寧なナデ調整と記載。

・底部回転ヘラ切りによる切り離しは、ヘラ切りと記載。底部回転糸切りによる切り離しは、糸切りと記載。底部回転以外の切り離しはその都度別記。

・遺物実測図の縮尺は、瓦は１／４、石器１／２、その他の遺物は１／３とし、それぞれ各図面に縮尺を示した。写真の縮尺は瓦は約１／４、石器は約１／２、その他の遺物は約２／５とした。

方位・測量原点

文章中および図面の方位と方向を示す東西南北は、遺跡全域に設定された発掘基準線に基づく真東、真西、真南、真北を示す。遺跡の測量原点は、外郭範囲内のほぼ中央にあたる政庁正殿東の任意点に埋標されている。その原点から真北を求めた南北基準線を定め、これに直交する東西基準線を定めて、座標軸を設定している。報告においてＥ・Ｗ・Ｓ・Ｎと共に示された数値は、測量原点からの座標上の位置、東西南北の距離を示す。測量原点は世界測地系座標で、Ｘ＝－28,562.592、Ｙ＝－64,607.889である。

Ⅰ　調査の計画と実施状況

平成29年度の秋田城跡発掘調査は、第108～110次調査を実施した（第１図）。

発掘調査事業費は、総事業費（本体額）8,178,000円のうち国庫補助額4,089,000円（50%）、県費補助額742,000円（９%）、市費3,347,000円（41%）である。調査計画は、下記表１のように立案した。

表１　発掘調査計画

調査次数	調 査 地 区	発掘調査面積㎡(坪)	調 査 予 定 期 間
108次	焼山地区南西部	600㎡（181.81）	５月８日～９月30日
109次	焼山地区北西部	200㎡（60.61）	10月１日～10月31日
110次	焼山地区東部・大畑地区西部	100㎡（30.3）	10月２日～10月31日
計		900㎡（272.72）	

発掘調査に伴う現状変更許可申請について、第108・109次調査は平成29年２月16日付け平28城歴第122号で申請し、平成29年３月10日付け28受庁財第４号の1974で許可された。第110次調査は平成29年７月18日付け平29城歴第545号で申請し、平成29年８月28日付け29受庁財第４号の759で許可された。

平成29年度の発掘調査は、焼山地区と政庁西部の３箇所を調査対象とした。いずれの調査も、焼山地区の正報告書の刊行と今後の環境整備のための実態把握を目的として行っている。

第108次調査地は焼山地区南西部にあたり、周辺の調査（第99次調査など）で９世紀第２四半期～第４四半期に造営された城内区画施設跡を検出している。調査地は、この城内区画施設の内側部分であり、城内区画施設の利用実態の把握を目的として行った。調査の結果、焼土遺構群や竪穴建物跡群を検出し、遺構の変遷と区画施設内の利用実態の一部を把握することができた。

第109次調査は焼山地区北西部にあたり、周辺の調査（第106次調査など）で平安・奈良期道路遺構および中世後期の材木塀跡を確認している。調査地は、第106次調査のさらに西の地点である。調査の結果、中世後期の材木塀跡の延長と古代秋田城の城外西大路の一部を発見した。

第110次調査地は焼山地区東部および大畑地区西部（政庁西部）にあたり、倉庫群が多数存在している部分であり、政庁から倉庫群に至る城内西大路が存在する可能性がある。調査は市道を挟んで焼山地区側にＡ区、政庁側にＢ・Ｃ区を設定して行った。調査の結果、焼山地区側のＡ区では古代遺構面は削平を受けており、遺構は遺存していないことが判明した。Ｂ・Ｃ区では政庁を造成した古代整地層を確認した。

平成29年８月19日に第108次調査の現地説明会を開催し、107名の参加があった。平成29年７月28日に文化庁記念物課川畑純技官から指導を受けた。12月21日、多賀城跡調査研究所において須田良平所長、吉野武主任研究員より指導を受けた。

平成29年度の発掘調査実施状況は下記表２のとおりである。

表２　発掘調査実施状況

調査次数	調 査 地 区	発掘調査面積㎡(坪)	調 査 実 施 期 間
108次	焼山地区南西部	534㎡（161.82）	５月９日～９月20日
109次	焼山地区北西部	41㎡（12.42）	９月21日～10月６日
110次	焼山地区東部・大畑地区西部	45㎡（13.64）	10月11日～10月31日
計		620㎡（187.88）	

Ⅱ　第 108 次調査報告

１　調査経過

第 108 次調査は焼山地区南西部を対象に、平成 29 年５月９日から９月 20 日まで調査を実施した。調査面積は 534 ㎡である。

第 108 次調査地は焼山地区南西部にあたり、周辺の調査（第 99 次調査など）で９世紀第２四半期以降に造営された城内施設を囲う方形区画施設が検出されている。調査予定地は、この方形区画施設の主要建物等が存在する可能性が高い場所であった。かつて住宅があったが、平成 27 年度に住宅が解体撤去されたため、調査が可能となった。今後の焼山地区の正報告書刊行のために、この地点の方形区画施設の実態解明が必要であり、調査を行った（第２図）。

これまで周辺の調査では、第 85 次調査（平成 17 年度）・第 96 次調査（平成 22 年度）・第 99 次調査（平成 23 年度）において、９世紀第２四半期以降に焼山地区南西部に造営された区画施設が発見された。削平により南西コーナー部は確認できず、南東コーナー部は未確認であるものの、区画の範囲･城内施設の規模は、最大で東西 60ｍ、南北約 60ｍの方形となる可能性がある。区画施設内における遺構の構成および城内施設の性格については､施設の中心付近と考えられる第 99 次調査地北東部が近現代の削平を受けており、遺構の存在を確認することができなかった。しかし、それ以外の箇所で焼土面を伴い工房と考えられる竪穴建物跡や､複数の焼土面などが検出され､鉄製品や鉄滓、フイゴ羽口が出土することから、鉄製品の生産に関わるという施設の性格・機能の一端が把握された。また、硯や転用硯も出土していることから、実務官衙としての性格・機能を持つ可能性もある。このような区画施設内の実態解明を進める必要があった。

その他、焼山地区では、第 19 次調査（昭和 51 年度）・第 52 次調査（昭和 63 年度）・第 86 次調査（平成 17 年度）第 14 次調査（昭和 49 年度）では南北方向に築地塀と材木塀が確認され、外郭区画施設が発見された。第 19 次・52 次・14 次調査では柱列塀を跨ぐ形で櫓状建物（１間×２間）が１棟ずつ、合計３棟確認されている。また、第 21 次調査（昭和 52 年度）・第 66 次調査（平成８年度）・第 70 次調査（平成９年度）・第 73 次調査（平成 12 年度）では規則的な配置に基づく８世紀第２四半期～９世紀中頃までの掘立柱建物群が確認され、倉庫群である可能性が指摘されている。

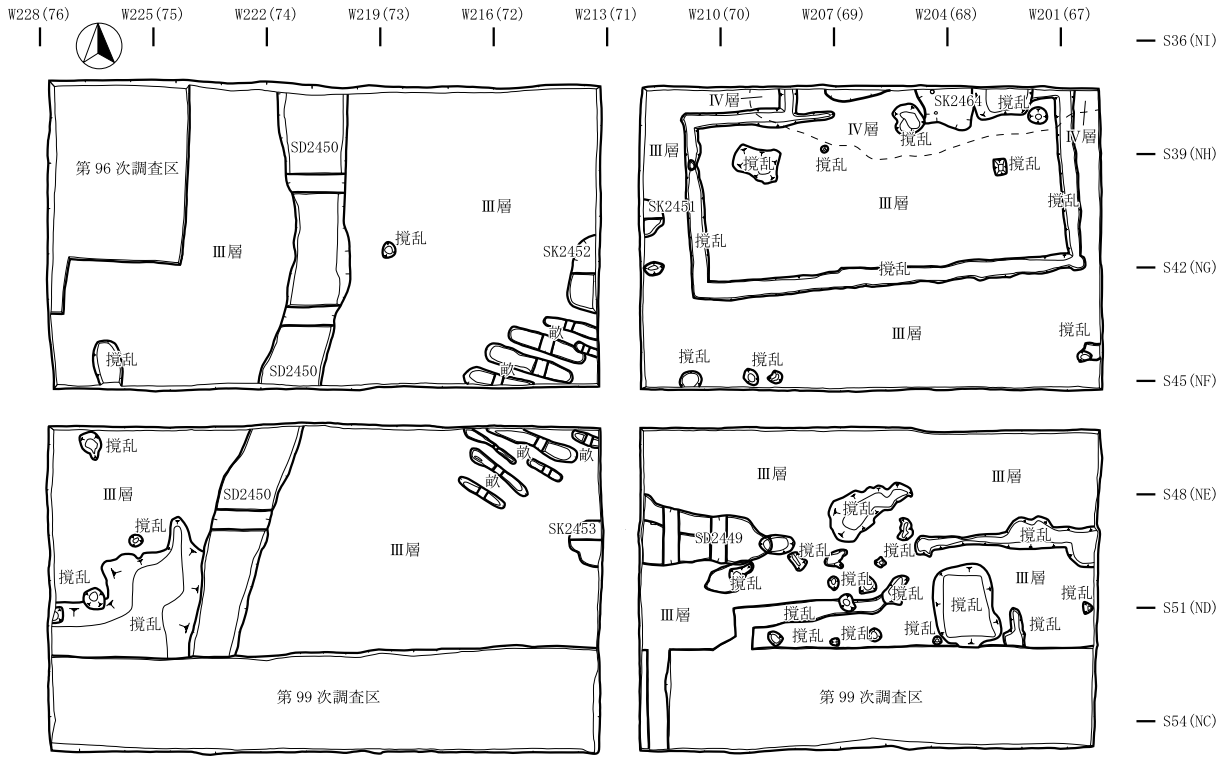
調査は基準杭測量、調査区の設定後、重機による第Ⅰ層表土除去を行った（５月９・10 日）。まずは、Ａ区の調査に着手した。調査区東部は宅地造成によって撹乱されており、手掘りによって除去を行った（５月 18 日～６月７日）。併行して隣接する 96・99 次調査区の埋土を除去した（５月 19 日～５月 30 日）。

その後、Ⅱ層造成土の除去を行った。なおこの段階で、北東部では第Ⅱ・Ⅲ層の堆積が薄く、第Ⅳ層面がすでに検出され、SK2464 が発見されている（５月 18～５月 31 日）。

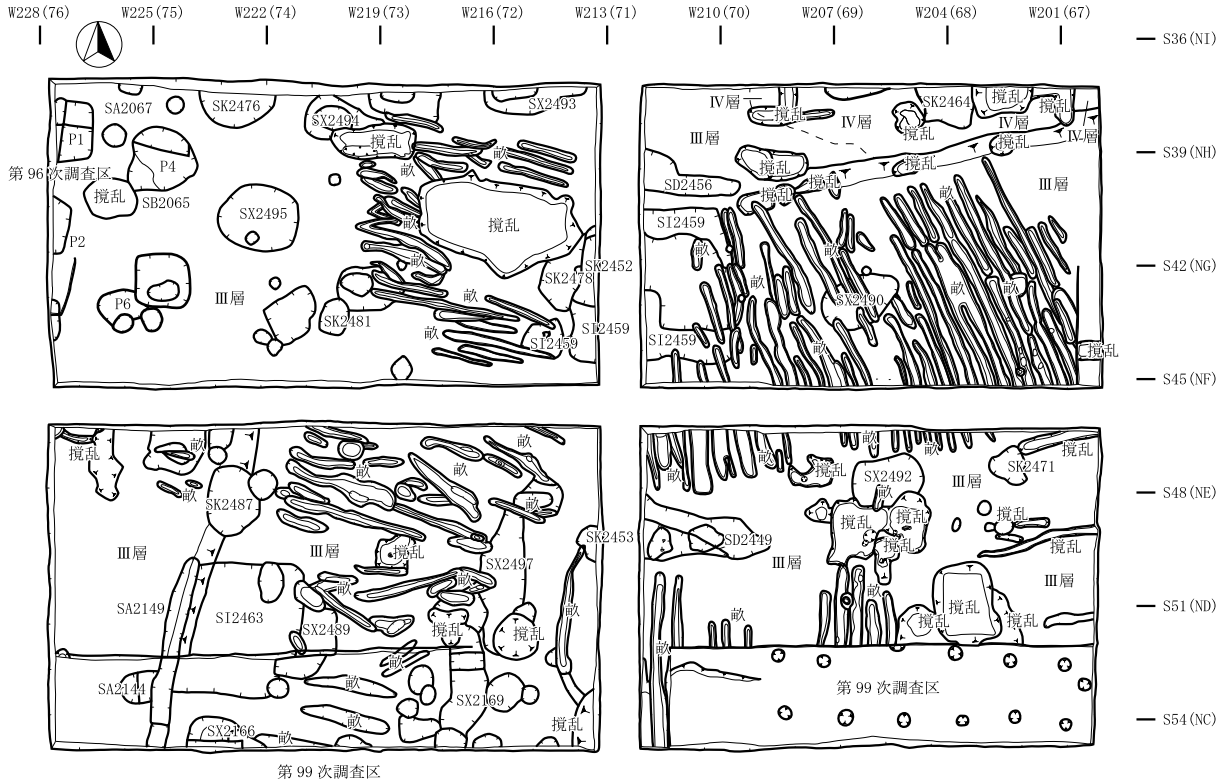
第Ⅱ層の除去後､第Ⅲ層の精査･遺構検出を行った（５月 24 日～６月５日）。第Ⅲ層面において SK2453、SK2451、SD2449、SD2450、畝跡を検出し（６月６日～６月９日）、これらを掘り下げ・半裁と記録化を行った（６月９日～６月 16 日、第３図）。半裁の結果、出土遺物からこれらの遺構は近世以降のものと判断した。

調査地全体の第Ⅲ層を除去していくと、第Ⅲ層下部において、畝跡が多数検出された（６月 19 日～７月 14 日、第４図）。これらの第Ⅲ層下部で検出された畝跡を掘り下げ・記録化を行った（７月 14 日～７月 20 日）。第Ⅲ層は耕作土であり、耕作がくり返されたことにより下層の第Ⅳ層の上部は削平を受けて

第２図　第 108 次調査地周辺地形図



第３図　第 108 次調査地Ⅲ層面検出遺構全体図



第４図　第 108 次調査地Ⅲ層下部検出遺構全体図

0　1:200　5m

ていると判断された。

第Ⅲ層を完全に除去すると、第Ⅳ層の古代整地層が発見された。第Ⅳ層の堆積が薄い部分は、すでに第Ⅴ層の地山飛砂層が露出していた。この第Ⅳ層面の精査を行い、SD2449・SD2450、SK2451～SK2453、SB2065・SB2454、SA2149・SA2455、SD2456～SD2458、SI2459～SI2463、SK2464～SK2489、SX2169、SX2490～SX2497 の検出を行った（７月 20 日～８月２日）。その後、これらの掘り下げ・半裁と記録化を行った（８月２日～９月５日）。また、Ｂ区の第Ⅳ層面で SD2498・SD2499 を検出した（９月１日～９月５日）。なお、SX2169、SX2490～SX2497 の焼土遺構を掘り下げ・半裁した時の埋土は、鍛冶関係の鉄滓や鍛造剥片を検出するために土嚢袋に入れ、保管した。調査終了後、これらの遺構の埋土を乾燥フルイにかけた。フルイのメッシュは、４㎜・２㎜・１㎜を使用し、選別した。その結果、小さな鉄滓および鉄製品の破片は回収できたが、鍛造薄片の発見には至らなかった。

全調査区の記録化の後、機材撤収およびバックホーと人手による埋め戻しを行い調査が終了した（９月７日～９月 20 日）。

なお平成 29 年８月 19 日に第 108 次調査の現地説明会を開催し、107 名の参加があった。７月 28 日、文化庁記念物課川畑純技官から指導を受けた。また、12 月 21 日、多賀城跡調査研究所において須田良平所長、吉野武主任研究員より指導を受けた。

２　検出遺構と出土遺物

調査地からはＡ区で掘立柱建物跡２棟、柱列跡１条、材木列塀跡１条、溝跡５条、竪穴建物跡５軒、土坑 29 基、焼土遺構９基が検出された（第７～33 図）。Ｂ区で溝跡２条が検出された。各遺構は、第Ⅲ・Ⅳ層面で検出されている。第Ⅲ層は近世以降、第Ⅳ層は古代の遺構であると考えられる。以下、遺構が検出された各層ごとに遺構・遺物の記述を行う。

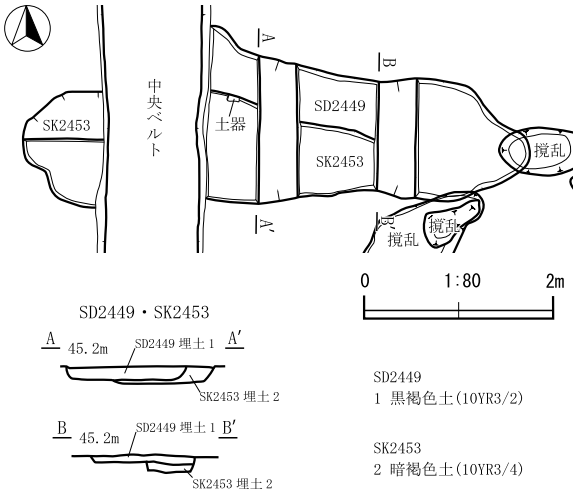
①Ａ区第Ⅲ層面検出遺構と遺物

Ａ区第Ⅲ層面からは、溝跡２条、土坑３基が発見された。

ＳＤ2449 溝跡（第７図）

調査区南東区のⅢ層面で検出された。幅 1.4m、長さ 3.5m以上、深さ 14cm の溝跡で、方位は東西方向である。

SK2453 と重複し、これより新しい。



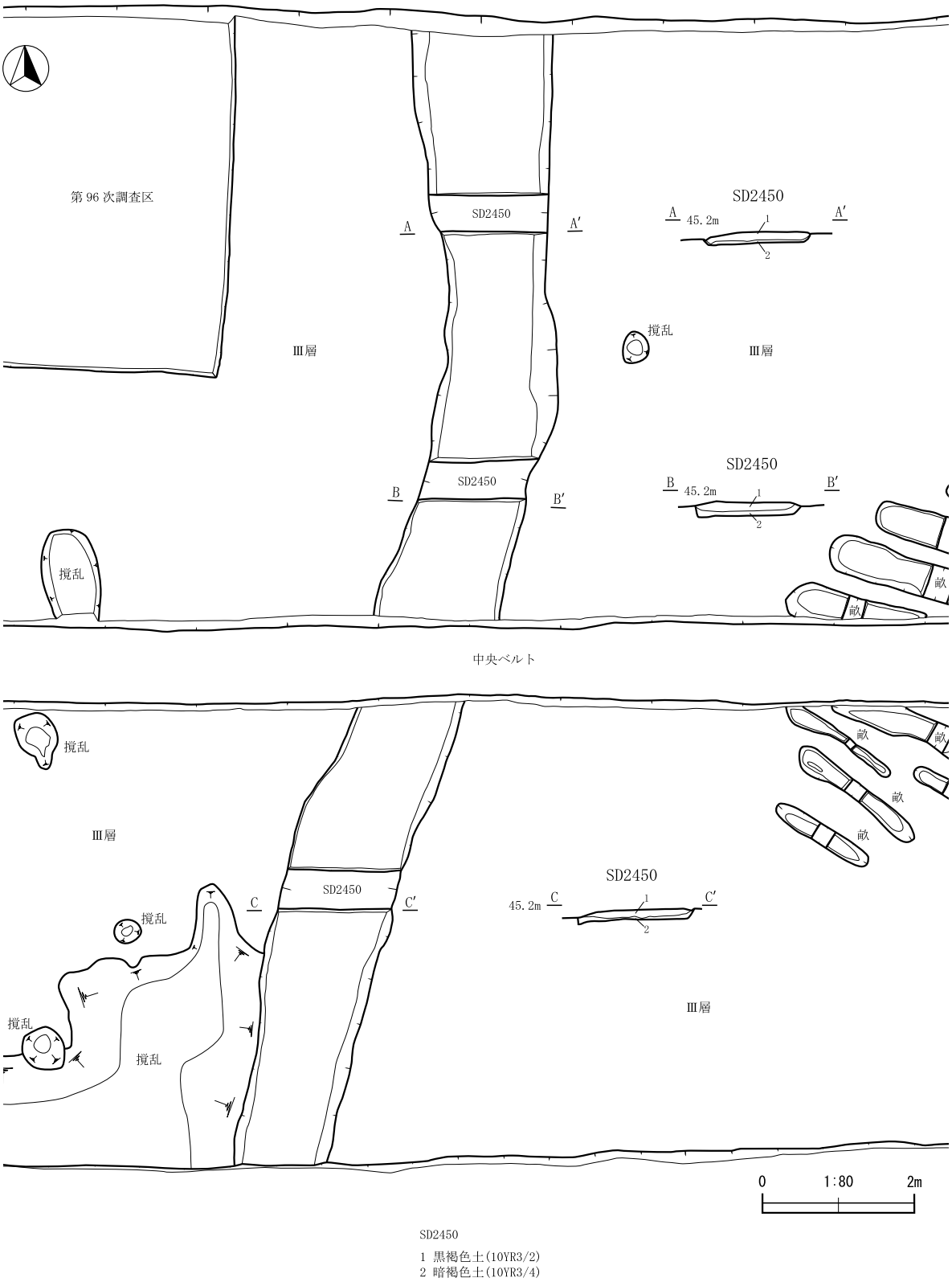
第７図　SD2449 溝跡

ＳＤ2450 溝跡（第８図、図版４）

調査区の西側のⅢ層面で検出された。幅 1.2～1.8m、長さ 15m以上、調査区外の南北へ延びる深さ 15cm の溝跡で、北で東に 14°振れる。

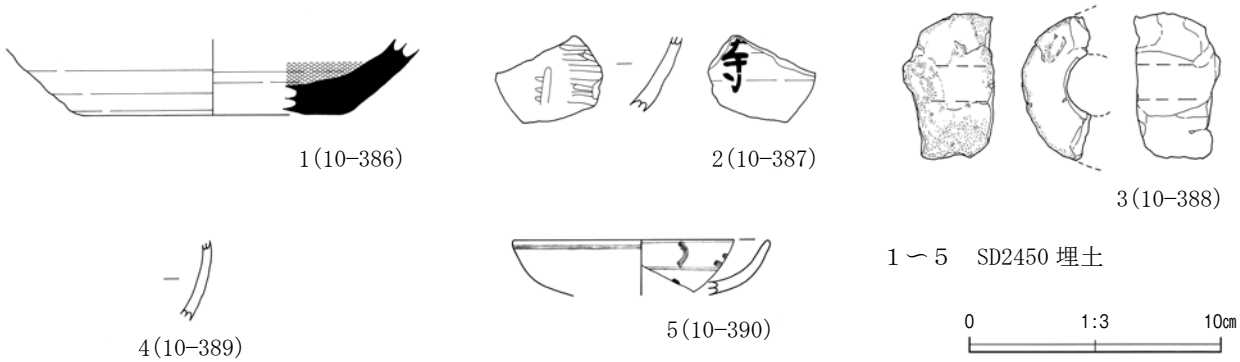
ＳＤ2450 溝跡出土遺物（第９図、図版 14）

須恵器（第９図１）：壺の底部破片で、内面を硯に転用している。底部の切り離しは不明で、底部立ち上が

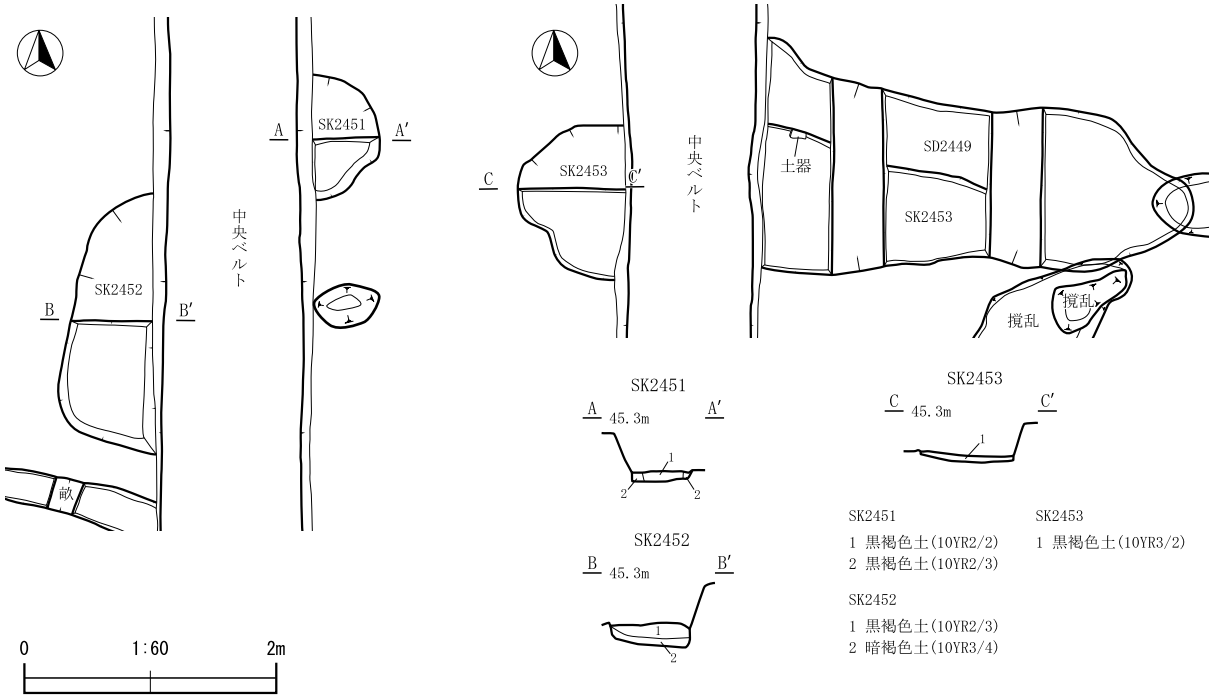


SD2450
1 黒褐色土(10YR3/2)
2 暗褐色土(10YR3/4)

第８図　SD2450 溝跡



第９図　SD2450 溝跡出土遺物



第 10 図　SK2451 ～ SK2453 土坑

り部分にケズリ調整を施す。埋土から出土している。

土師器（第９図２）：坏の体部破片で体部外面「寺」の墨書が見られる。内面に黒色処理とミガキ調整を施す。埋土から出土している。

土製品（第９図３）：フイゴ羽口の破片である。埋土から出土している。

陶器（第９図４）：碗の体部破片で、近世の灰釉陶器である。埋土から出土している。

磁器（第９図５）：肥前系磁器染付皿の口縁部破片で、内面に草花を染付ける。

ＳＫ2451 土坑（第 10 図）

調査区の北東区のⅢ層面で検出された。幅 50cm 以上、長さ 100cm、深さ８cm、円形を呈する。

ＳＫ2452 土坑（第 10 図）

調査区の北西区のⅢ層面で検出された。幅 72cm 以上、長さ 205cm、深さ 20cm、隅丸方形を呈する。

ＳＫ2452 土坑出土遺物（第 11 図、図版 14）

須恵器（第 11 図１）：甕の胴部破片で、内面を硯に転用している。内外面平行の叩き目痕がみられる。

ＳＫ2453 土坑（第 10 図）

調査区の南側のⅢ層面で検出された。幅 1.7m、長さ 4.3m、深さ 18cm、方位は東西方向である。

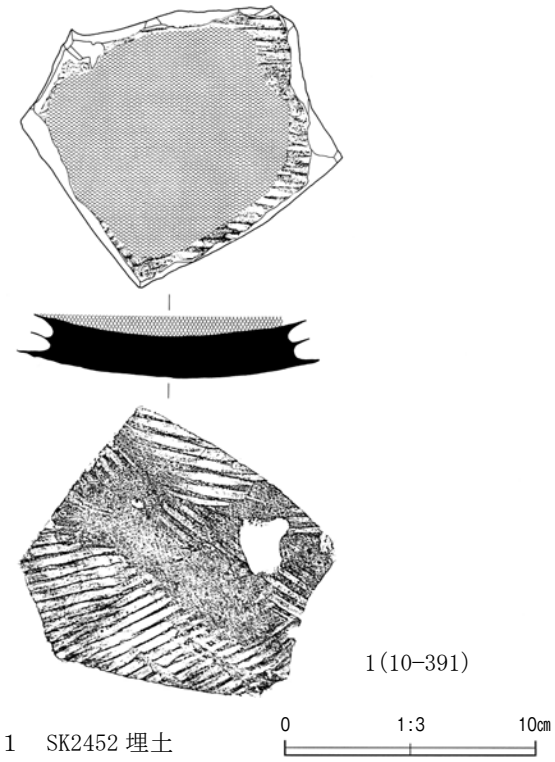
SD2449 と重複し、これより古い。

②Ａ区第Ⅳ層面検出遺構と遺物

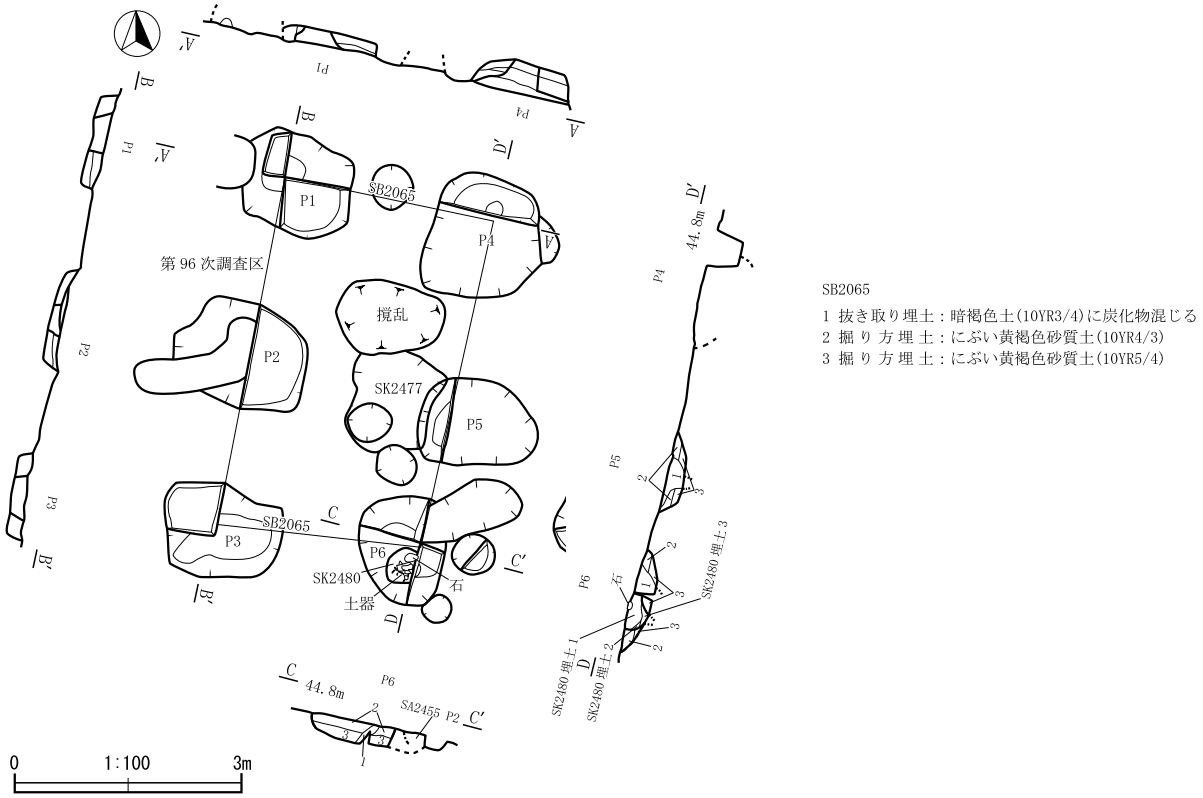
Ａ区第Ⅳ層面からは、掘立柱建物跡２棟、柱列跡１条、材木塀跡１条、溝跡３条、竪穴建物跡５軒、土坑 26 基、焼土遺構９基が発見された。

ＳＢ2065 掘立柱建物跡（第 12 図、図版４）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。南北２間（2.5m＋2.5m）、東西１間（2.7m）、柱掘り方は一辺 1.3m～1.5mの歪んだ方形を呈し、深さ 20cm～45cm である。柱痕跡は直径 18～20cm である。桁行東側柱筋が北で 10°東に振れる。



第 11 図　SK2452 土坑出土遺物



第 12 図　SB2065 掘立柱建物跡

SK2477・SK2480・SA2455 と重複し、SK2477 より新しく、SK2480・SA2455 より古い。

ＳＢ2065 掘立柱建物跡出土遺物（第 14 図、図版 14）

須恵器（第 14 図１）：Ｐ６掘り方埋土出土である。坏の底部破片で、底部の切り離しは不明である。

赤褐色土器（第 14 図２）：Ｐ６抜き取り埋土出土である。坏の口縁部破片である。

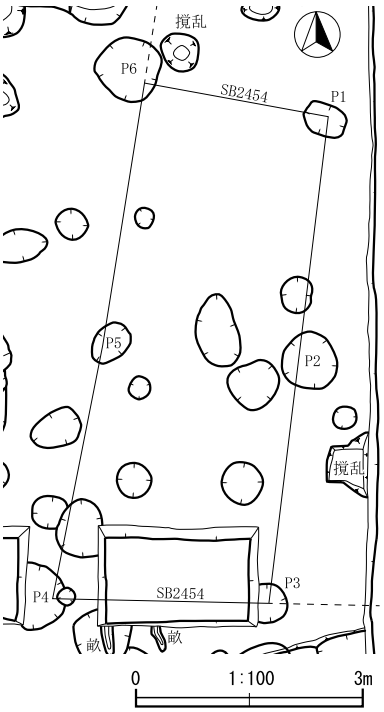
鉄製品（第 14 図３）：Ｐ５抜き取り埋土出土である。鉄鏃で、残存長 66.8㎜、茎部分が欠損している。

ＳＢ2454 掘立柱建物跡（第 13 図、図版５）

調査区の北東区の第Ⅳ層面で検出された。柱掘り方は直径約 20㎝～40㎝ の歪んだ円形を呈し、柱痕跡は未確認である。南北２間以上（3.3ｍ＋3.3ｍ＋…）、東西１間以上（2.6ｍ＋…）である。桁行東側柱筋が北で 10°東に振れる。

ＳＢ2454 掘立柱建物跡出土遺物（第 14 図、図版 14）

鉄製品（第 14 図４）：Ｐ５埋土出土の不明鉄製品である。



第 13 図　SB2454 掘立柱建物跡

ＳＡ2149 材木塀跡（第 15 図、図版５）

調査区の南西区の第Ⅴ層面で検出された、布掘り溝を伴う材木塀跡である。布掘り溝は上幅 50㎝～70㎝、下幅 42㎝～58㎝、深さ３㎝～22㎝、99 次調査確認の分も含め長さ 5.0ｍ以上で、断面形はＵ字状を呈し、直径 20㎝～25㎝ の柱痕跡が伴う。北で東に 13°振れる。

SA2144・SI2463 と重複し、これらより新しい。

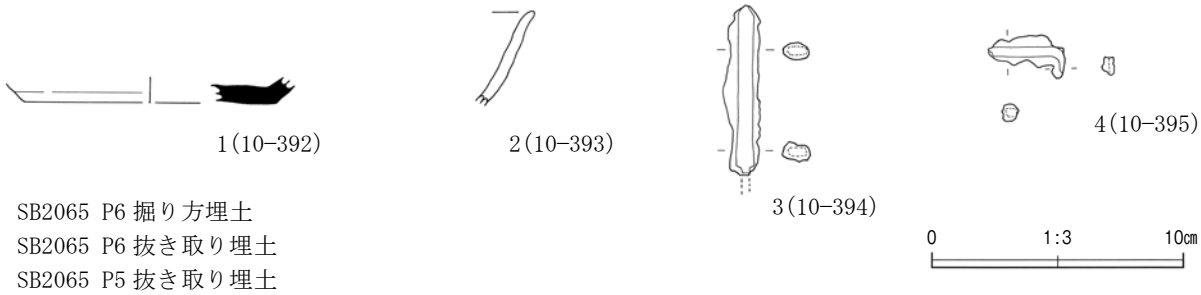
ＳＡ2455 柱列跡（第 15 図、図版５）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。南北２間(1.7ｍ＋1.7ｍ)、柱掘り方は 40～60㎝ の円形を呈し、深さ 16～20㎝ である。柱痕跡直径７～10㎝ で、北で 44°東に振れる。

SB2065 と重複し、これらより新しい。

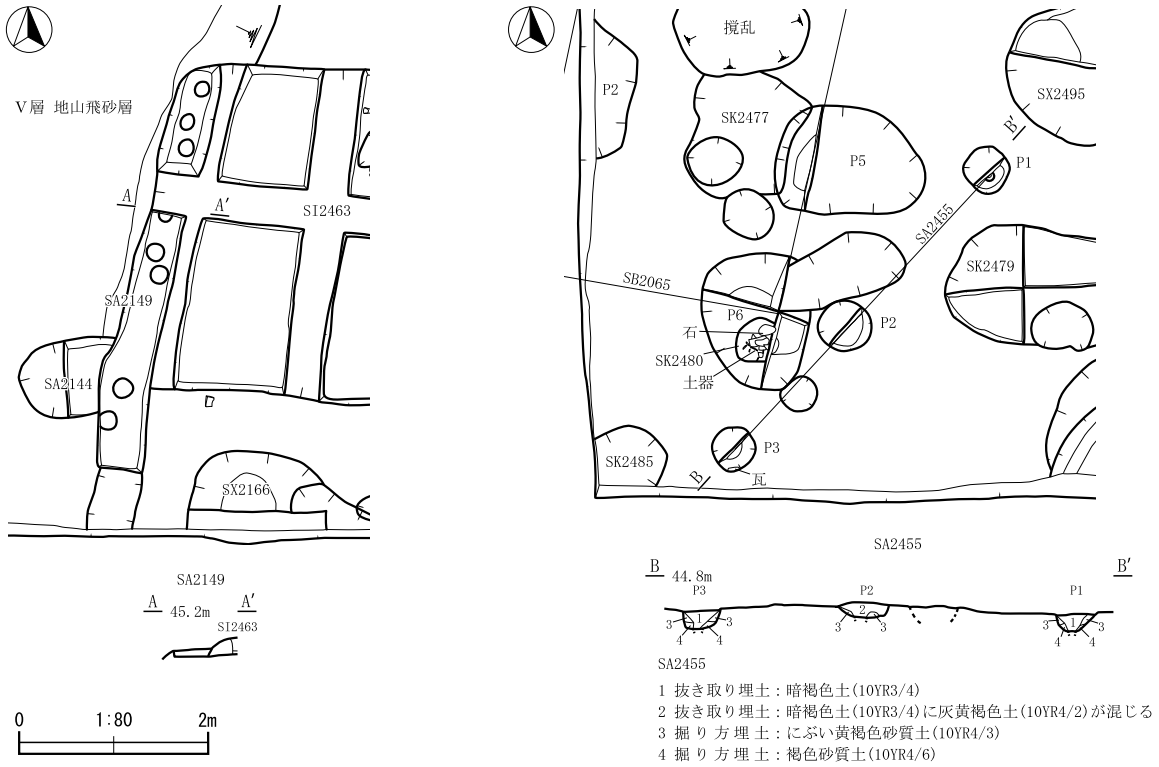
ＳＡ2455 柱列跡出土遺物（第 16 図、図版 14）

土師器（第 16 図１）：甕の口縁部破片で、Ｐ２抜き取り埋土出土である。



1　SB2065 P6 掘り方埋土
2　SB2065 P6 抜き取り埋土
3　SB2065 P5 抜き取り埋土
4　SB2454 P5 埋土

第 14 図　SB2065・SB2454 掘立柱建物跡出土遺物



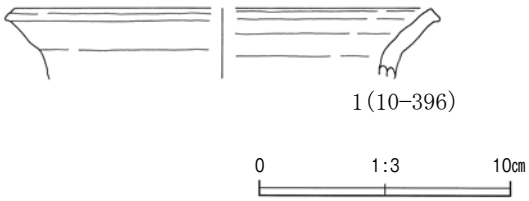
第 15 図　SA2149 材木塀跡、SA2455 柱列跡

ＳＤ2456 溝跡（第 17 図、図版６）

調査区の北東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 40～110cm、長さ 2.5m、深さ 18cm の溝跡で、方位は東西方向である。

ＳＤ2456 溝跡出土遺物（第 18・19 図、図版 14）

赤褐色土器(第 18 図１):坏の口縁部破片である。被熱しており、内外面に煤状炭化物が付着している。



1　SA2455 P2 抜き取り埋土

第 16 図　SA2455 柱列跡出土遺物

瓦（第 19 図１）：丸瓦で、凸面にナデ調整を施し、凹面に布目圧痕がみられる。橙色で軟質、焼成はやや不良である。

ＳＤ2457 溝跡（第 17 図）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 10～90cm、長さ 4.4m以上、深さ 11cm、断面皿状、西で 30°北側に振れる。

SI2462・SD2458・SK2482 と重複し、SI2462 より新しく、SD2458・SK2482 より古い。

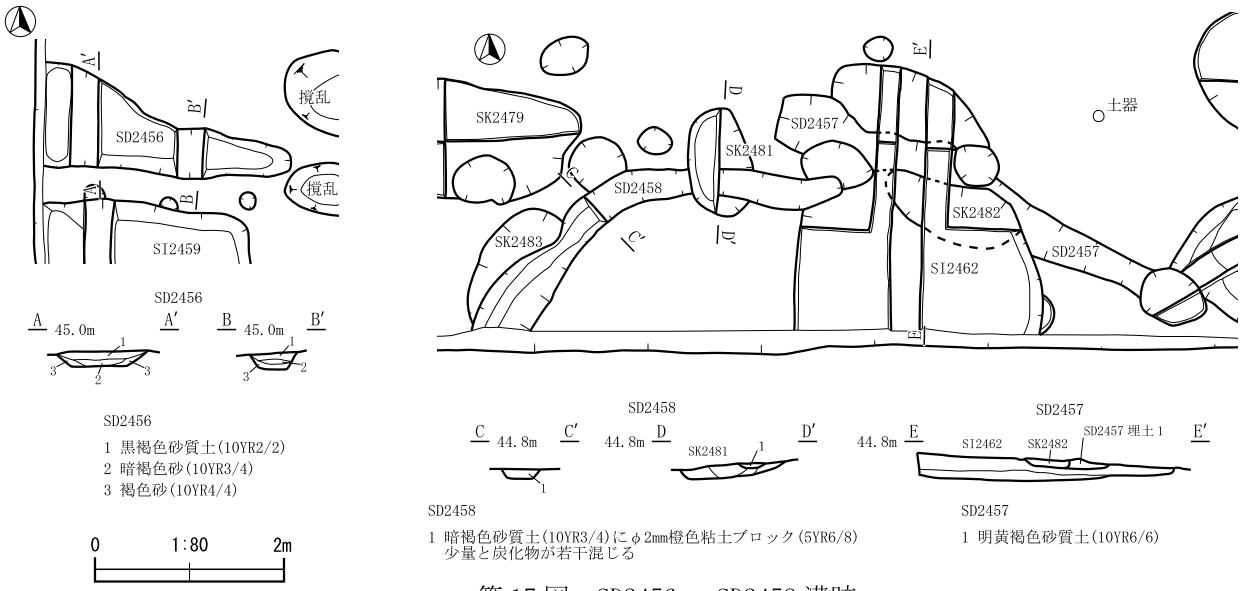
ＳＤ2458 溝跡（第 17 図）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 30～50cm、深さ 10cm の溝跡である。

SD2457・SK2481・SK2483・SI2462 と重複し、これらより新しい。

ＳＤ2458 溝跡出土遺物（第 17 図、図版 14）

鉄製品（第 18 図２）：不明鉄製品である。



第 17 図　SD2456 ～ SD2458 溝跡

ＳＩ2459 竪穴建物跡（第 20 図、図版６）

調査区の北側の第Ⅳ層面で検出された。幅 3.9m 以上、長さ 4.1m、壁高は 15cm で、方形を呈する。方位は真北方向で、南西隅にカマドを確認した。床面と周囲に柱穴が認められる。

SK2484・SK2478 と重複し、SK2484 より新しく、SK2478 より古い。

ＳＩ2459 竪穴建物跡出土遺物

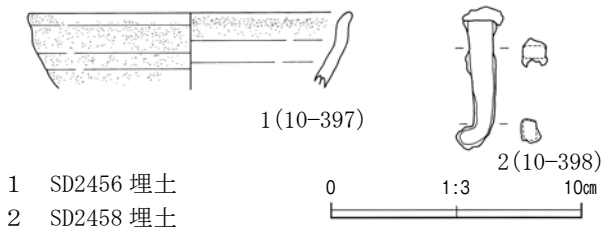
（第 23 図、図版 14・15）

以下はいずれも竪穴建物跡埋土出土である。

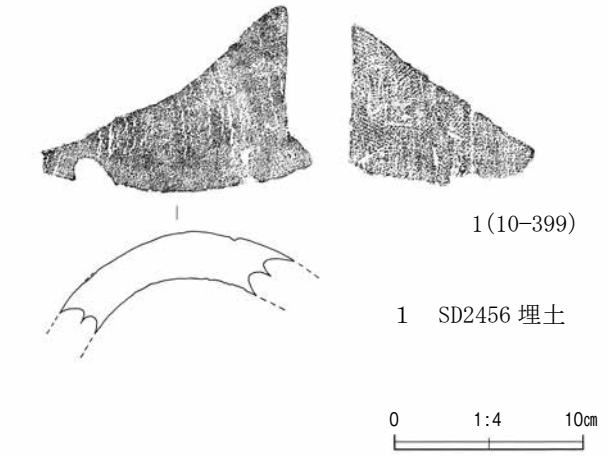
須恵器（第 23 図１）：壺の頸部破片である。

赤褐色土器（第 23 図２～４）：２・３は坏で、いずれも糸切り無調整の坏で完形であり、内外面に煤状炭化物が付着している。４は台付皿である。

以下はいずれもカマドからの出土である。カマド構築土出土のもの（第 23 図５～７、第 24 図１、第 25 図１・２）とカマド埋土出土のもの（第 23 図８）がある。



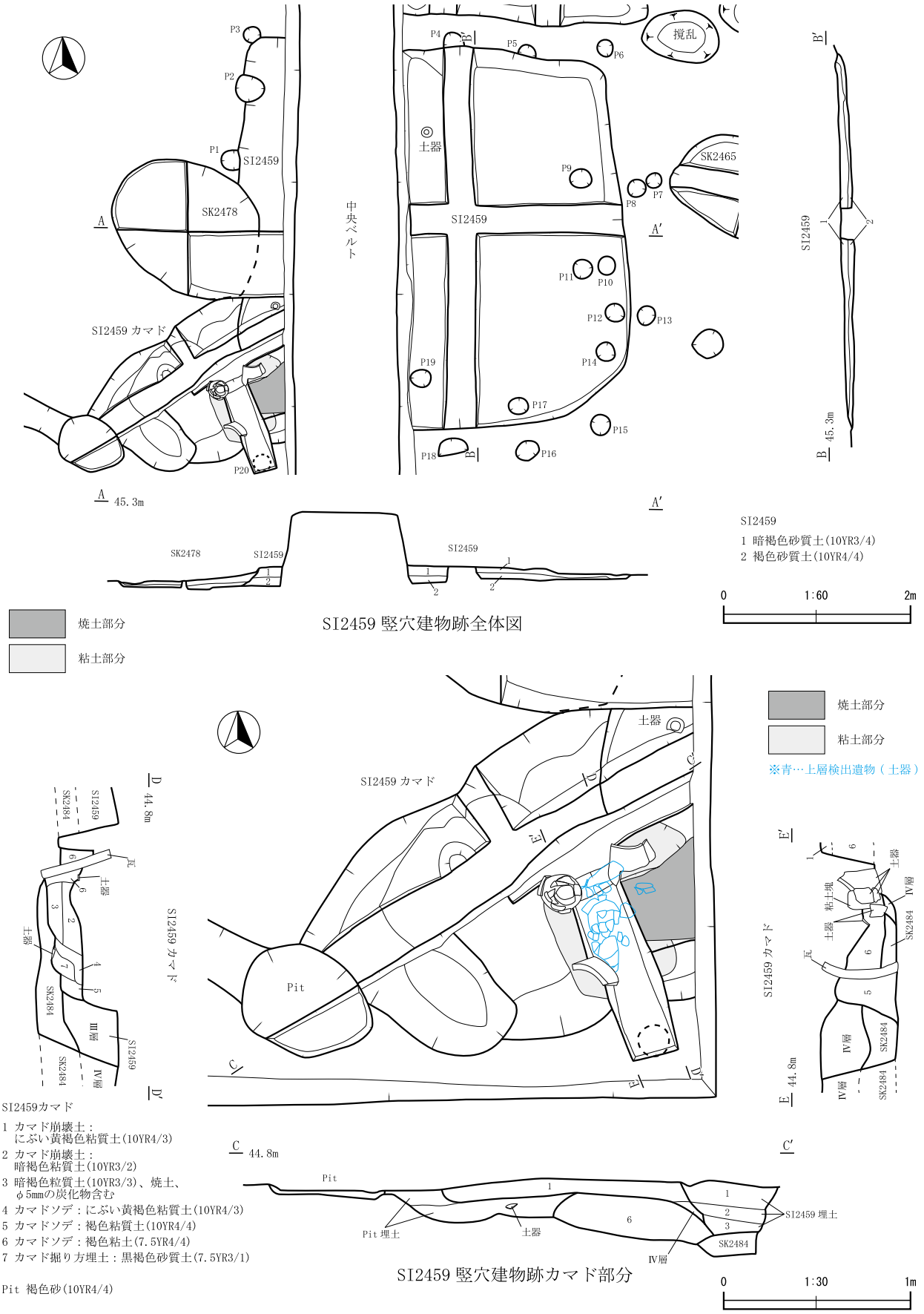
第 18 図　SD2456・SD2458 溝跡出土遺物



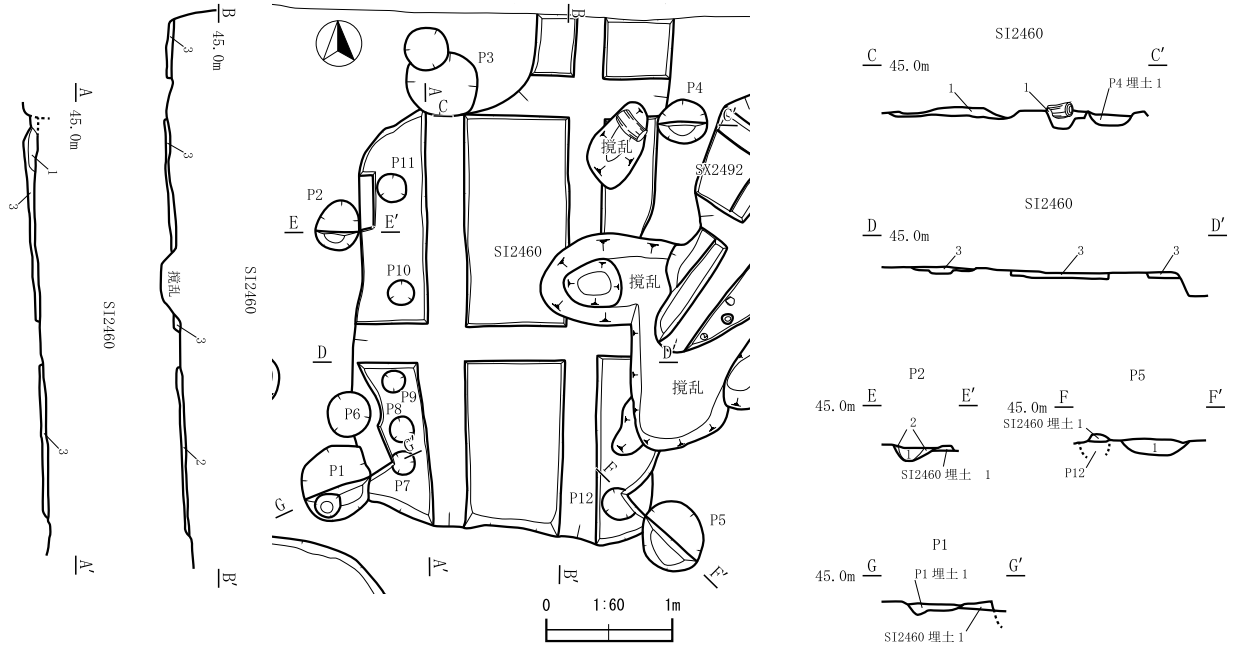
第 19 図　SD2456 溝跡出土瓦

土師器（第 23 図５～７）：第 23 図５～７はいずれも甕で、被熱した粘土塊の周りに破片を貼り付け、カマドの補強材として使用されていた。５は頸部破片で外面に２条の沈線、内面にハケメ調整を施す。６は内面にハケメ調整を施し、底部に木葉痕が観察される。７は体部内外面にハケメ調整を施す。

赤褐色土器（第 23 図８、第 24 図１）：第 23 図８、第 24 図１はいずれも丸底砲弾型長胴甕である。第 23 図８はカマドの埋土から出土した。体部内外面にロクロ利用のカキ目調整を施し、内面体部下半にハケメ調



第 20 図　SI2459 竪穴建物跡



SI2460

1 明褐色粘土(7.5YR5/6)に褐色砂(7.5YR4/6)と炭化物粒(最大3mm)少量が混じる
2 橙色粘土(7.5YR6/8)に暗褐色砂(10YR3/4)と炭化物粒(最大3mm)少量が混じる
3 暗褐色砂(10YR3/4)

P4

1 褐色砂(10YR4/4)

P2

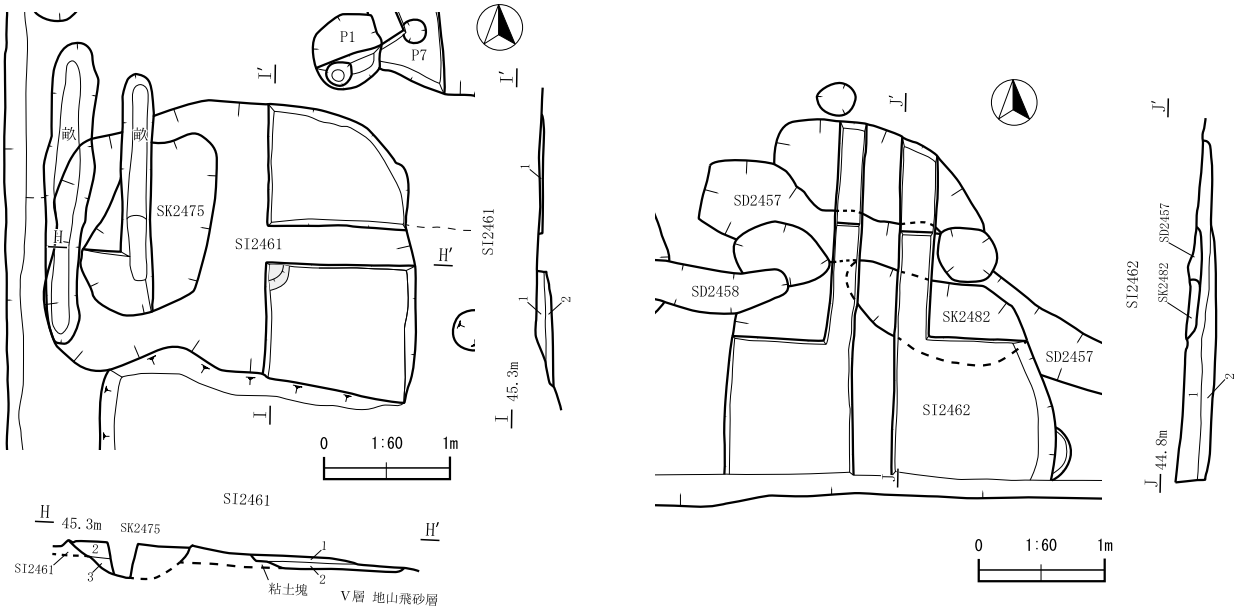
1 暗褐色砂(10YR3/4)
2 にぶい黄褐色砂(10YR4/3)

P1

1 褐色砂(10YR4/4)

P5

1 褐色砂(10YR4/6)



SI2461

1 褐色砂(10YR4/6)にφ1cmの明褐色粘土ブロック(7.5YR5/8)とφ1cmの炭化物粒混じる
2 褐色砂(10YR4/4)

SI2462

1 黒褐色土(10YR3/2)
2 黄褐色砂質土(10YR5/6)に黒褐色土(10YR3/2)

第21図　SI2460～SI2462竪穴建物跡

整を施す。第 24 図１はカマドのソデ部分の補強材として使用されており、外面にケズリ調整と内外面の上半部にロクロ利用のカキ目調整、下半部にハケメ調整を施す。

瓦（第 25 図１・２）：いずれもカマドのソデ部分の補強材として使用されていた。１は一枚作りの平瓦である。凸面には縄目の叩き痕、凹面には布目圧痕がみられる。暗灰色で硬質、焼成は堅緻である。２は平瓦である。凸面は格子目の叩き痕、凹面は布目圧痕がみられる。黄灰色で硬質、焼成は堅緻である。

ＳＩ2460 竪穴建物跡（第 21 図、図版７）

調査区の南東区の第Ⅳ層面で検出された。突出部をもつ長方形を呈し、幅 2.3m、長さは突出部無しで 3.3m、突出部を入れて 4.2m以上、壁高は６㎝である。真北に軸を取る。カマドの有無は不明である。床面と周囲に柱穴様小ピットが認められる。

ＳＩ2460 竪穴建物跡出土遺物（第 24 図、図版 16）

土師器（第 24 図２）：埋土出土である。台付坏の底部破片である。内面を黒色処理し、ミガキ調整を施す。底部に菊花状工具痕がみられる。

赤褐色土器（第 24 図３・４）：いずれも埋土出土である。３は糸切り無調整の坏である。４は平底の小型甕である。糸切り無調整で、底部外面立ち上がり部分にケズリを施す。内外面に煤状炭化物が付着している。いずれも埋土から出土した。

土製品（第 24 図５・６）：いずれも埋土出土である。管状の土錘である。

鉄製品（第 24 図７）：床面直上の出土である。鉄鏃の茎部分である。

ＳＩ2460 竪穴建物跡Ｐ５出土遺物（第 24 図、図版 16）

赤褐色土器（第 24 図８）：埋土出土で、糸切り無調整の坏である。被熱しており、内面に煤状炭化物が付着している。

ＳＩ2461 竪穴建物跡（第 21 図、図版７）

調査区の南東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 1.2m、長さ 1.4m、壁高 12㎝、方形を呈する。方位は真北方向で、カマドの有無は不明である。

SK2475 と重複し、これより古い。

ＳＩ2461 竪穴建物跡出土遺物（第 24 図、図版 16）

須恵器（第 24 図９）：埋土出土で、甕の頸部破片である。内面に平行当て具、外面に平行叩き痕がみられる。

赤褐色土器（第 24 図 10）：埋土出土で、皿の口縁部破片である。外面に煤状炭化物が付着している。

ＳＩ2462 竪穴建物跡（第 21 図、図版７）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 1.3m以上、長さ 1.4m以上、壁高は 22㎝、歪な隅丸長方形を呈する。方位はほぼ真北方向である。

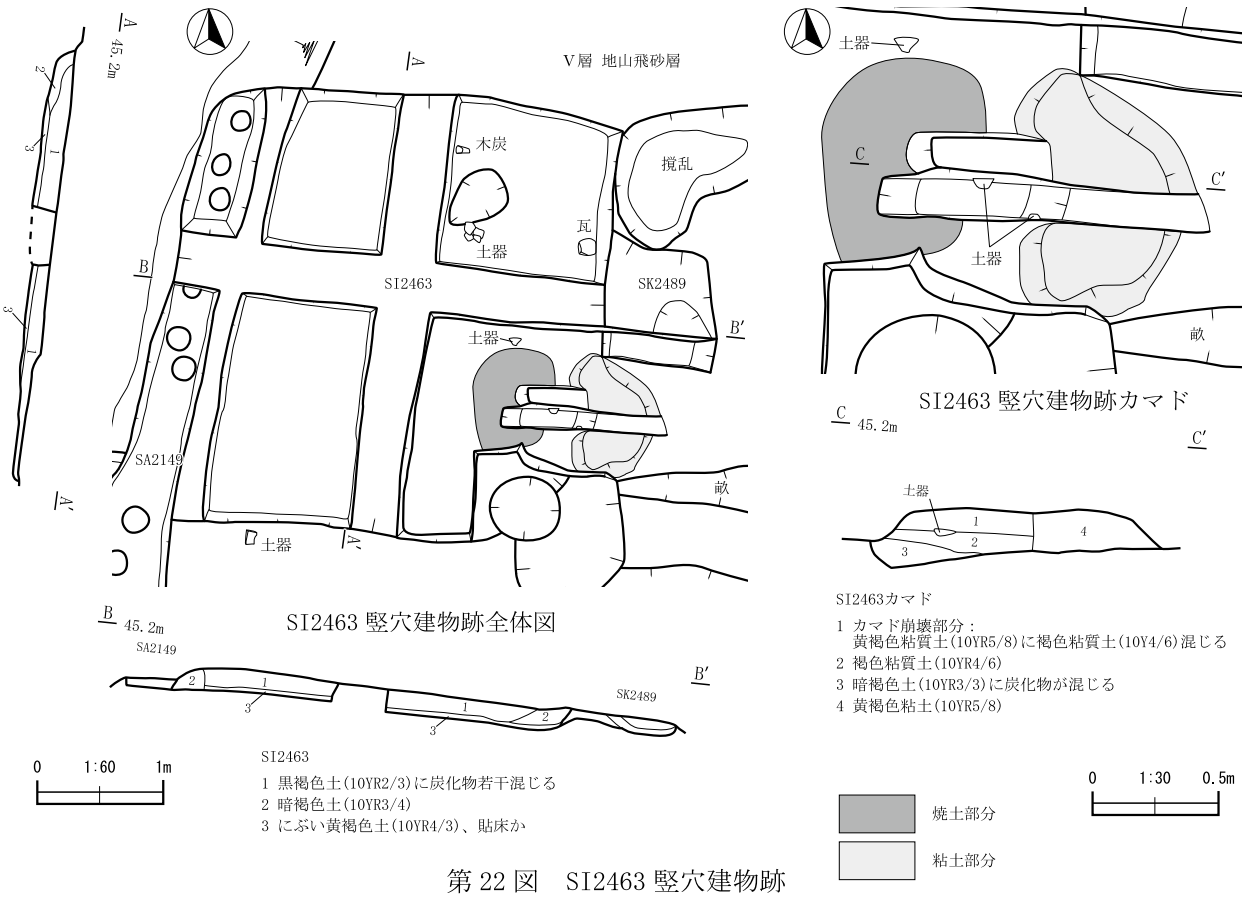
SD2457・SD2458・SK2482 と重複し、これらより古い。

ＳＩ2462 竪穴建物跡出土遺物（第 26 図、図版 16）

須恵器（第 26 図１）：埋土出土で、坏の口縁部破片である。

土師器（第 26 図２）：埋土出土で、甕の底部破片である。底部外面の立ち上がり部分にカキ目調整を施す。

鉄製品（第 26 図３）：埋土出土で、鉄鏃の茎部分である。



第 22 図　SI2463 竪穴建物跡

ＳＩ2463 竪穴建物跡（第 22 図、図版６）

調査区の南西区の第Ⅴ層面で検出された。幅 2.9m、長さ 3.4m、壁高 22cm、方形を呈し、東壁が北で東に 10°振れる。東壁にカマドを確認した。

SK2489・SA2149 と重複し、SK2489 より新しく、SA2149 より古い。

ＳＩ2463 竪穴建物跡出土遺物（第 26 図、図版 16・17）

須恵器（第 26 図４）：埋土出土で、壺の底部である。体部下半に手持ちヘラケズリ調整を施した後、体部中央にケズリ調整を施す。

土師器（第 26 図５）：甕の口縁部破片である。

赤褐色土器（第 26 図６～10）：６・９・10 は埋土から、７・８は床面から出土した。６から９は糸切り無調整の坏である。６は内面に漆が付着している。８は内外面に煤状炭化物が付着している。10 は鍋である。

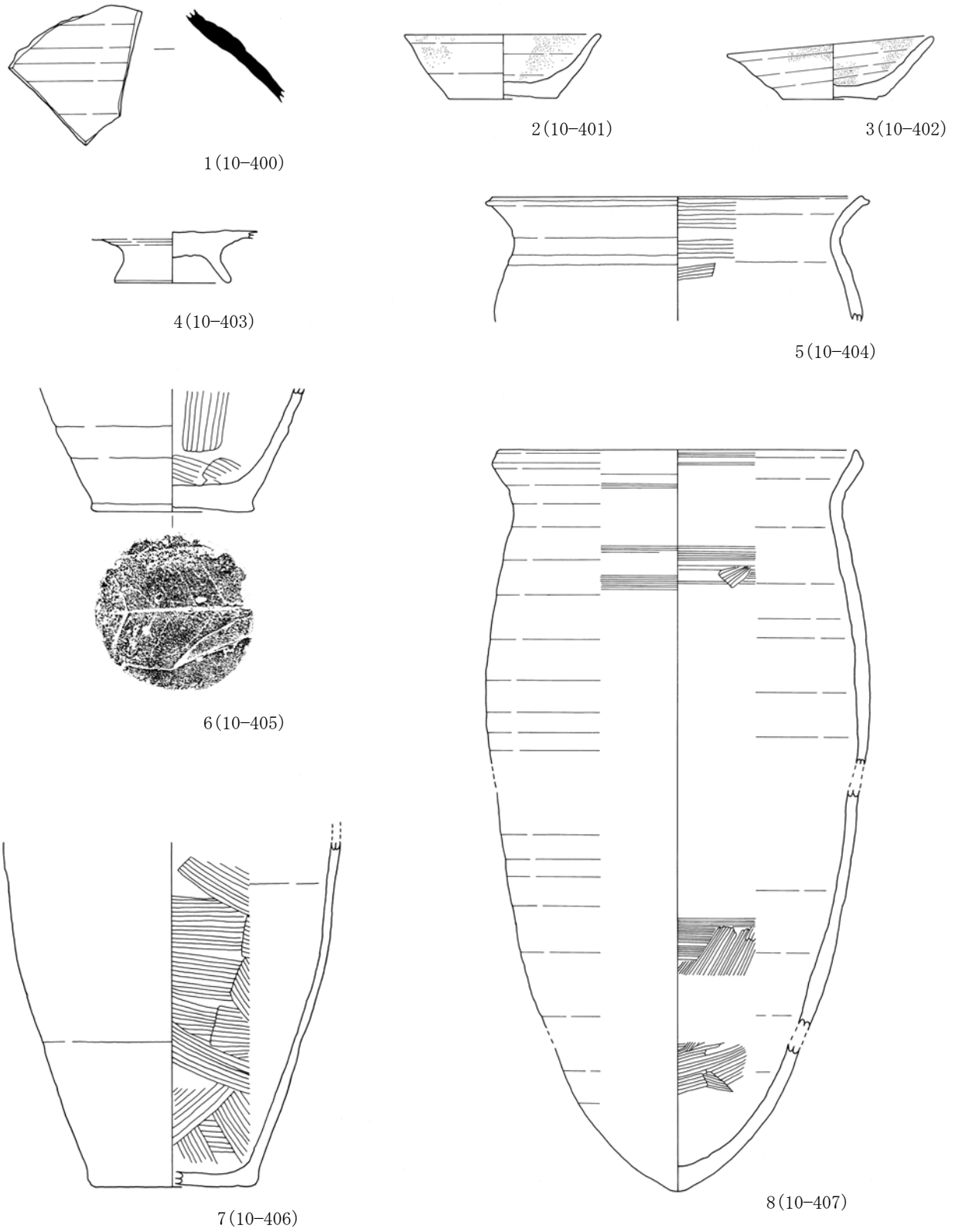
土師器（第 26 図 11）：カマド埋土出土である。甕の底部破片である。内外面にハケメ調整を施す。

ＳＫ2464 土坑（第 27 図）

調査区の北東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 50cm、長さ 100cm 以上、深さ 20cm、不整形を呈する。

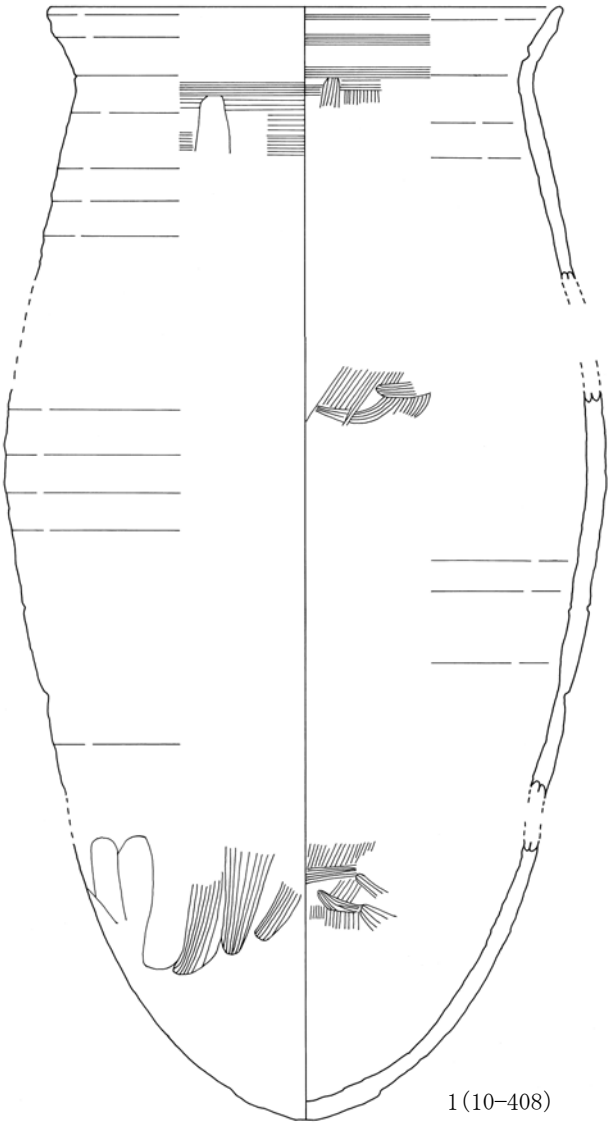
ＳＫ2464 土坑出土遺物（第 29 図、図版 18）

赤褐色土器（第 29 図１～４）：いずれも埋土出土である。１から４は糸切り無調整の坏である。１は被熱しており、内外面に煤状炭化物が付着している。

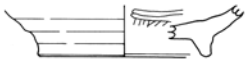


1～4　SI2459 埋土
5～7　SI2459 カマド構築土
8　　SI2459 カマド埋土

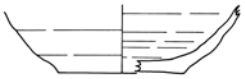
第 23 図　SI2459 竪穴建物跡出土遺物



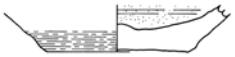
1(10-408)



2(10-411)



3(10-412)

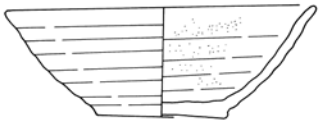


4(10-413)

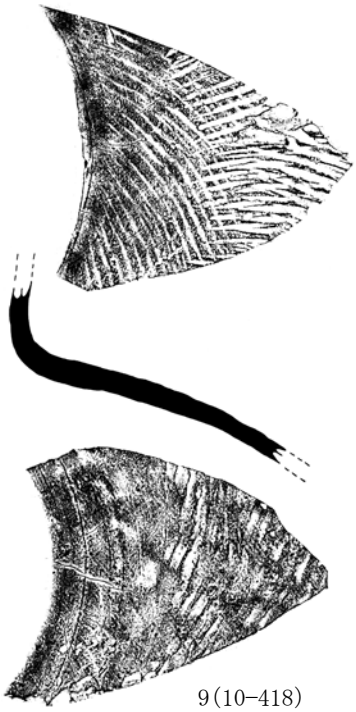
5(10-414)

6(10-415)

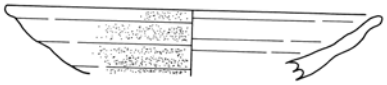
7(10-416)



8(10-417)



9(10-418)

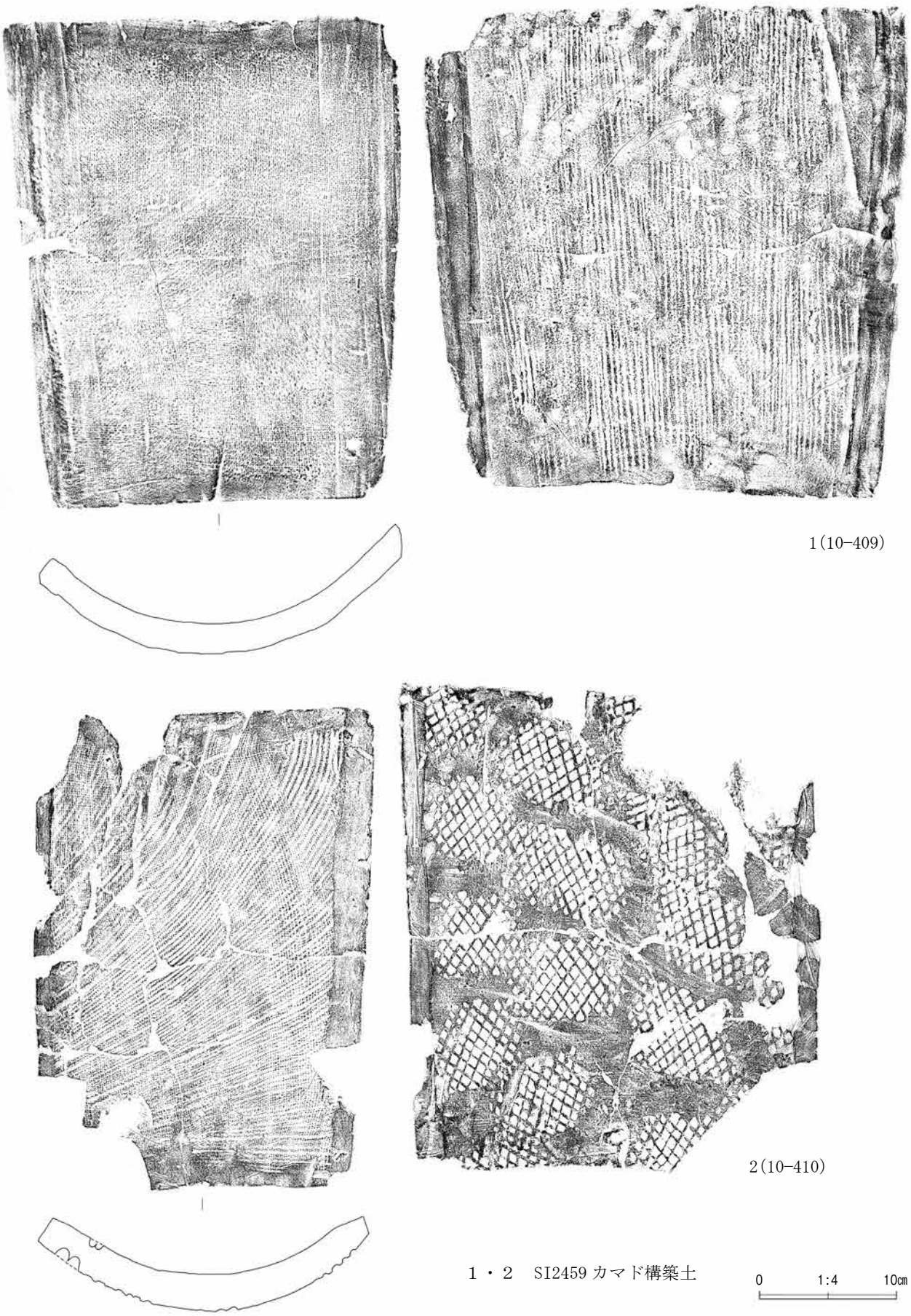


10(10-419)

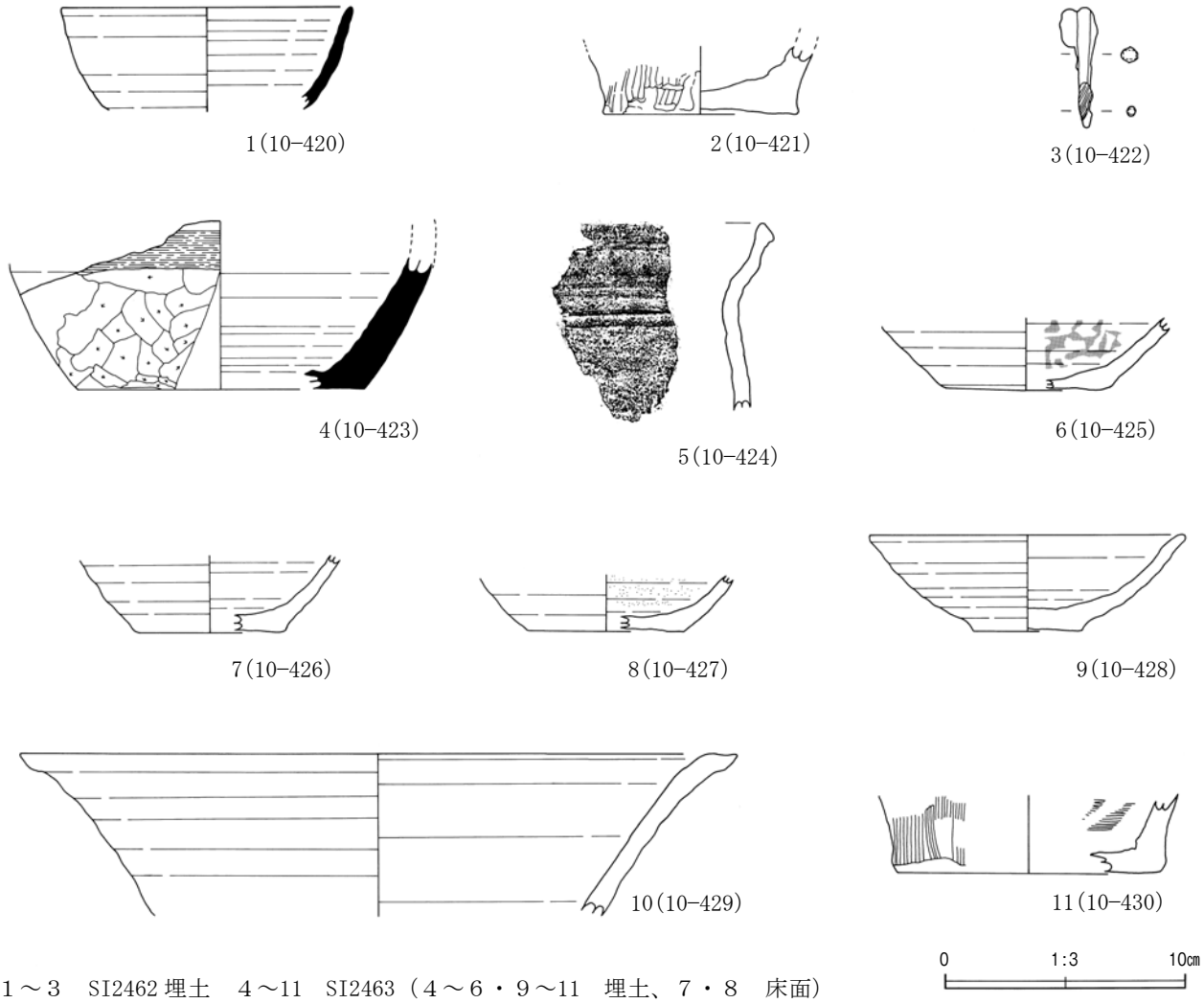
1　SI2459 カマド構築土　2～6　SI2460 埋土　7　SI2460 床面直上
8　SI2460 P5 埋土　9～10　SI2461 埋土

0　1:3　10cm

第 24 図　SI2459 ～ SI2461 竪穴建物跡出土遺物



第 25 図　SI2459 竪穴建物跡出土瓦



１～３　SI2462 埋土　４～11　SI2463（４～６・９～11　埋土、７・８　床面）

第 26 図　SI2462・SI2463 竪穴建物跡出土遺物

ＳＫ2465 土坑（第 27 図、図版７）

調査区の北東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 110cm、長さ 170cm、深さ 10cm、不整形を呈する。西で 12°北側に振れる。

ＳＫ2465 土坑出土遺物（第 29 図、図版 18）

赤褐色土器（第 29 図５）：埋土出土で、糸切り無調整の坏である。

縄文土器（第 29 図６）：埋土出土で、粗製の深鉢形土器の破片である。ＬＲ単節縄文を施す。

ＳＫ2466 土坑

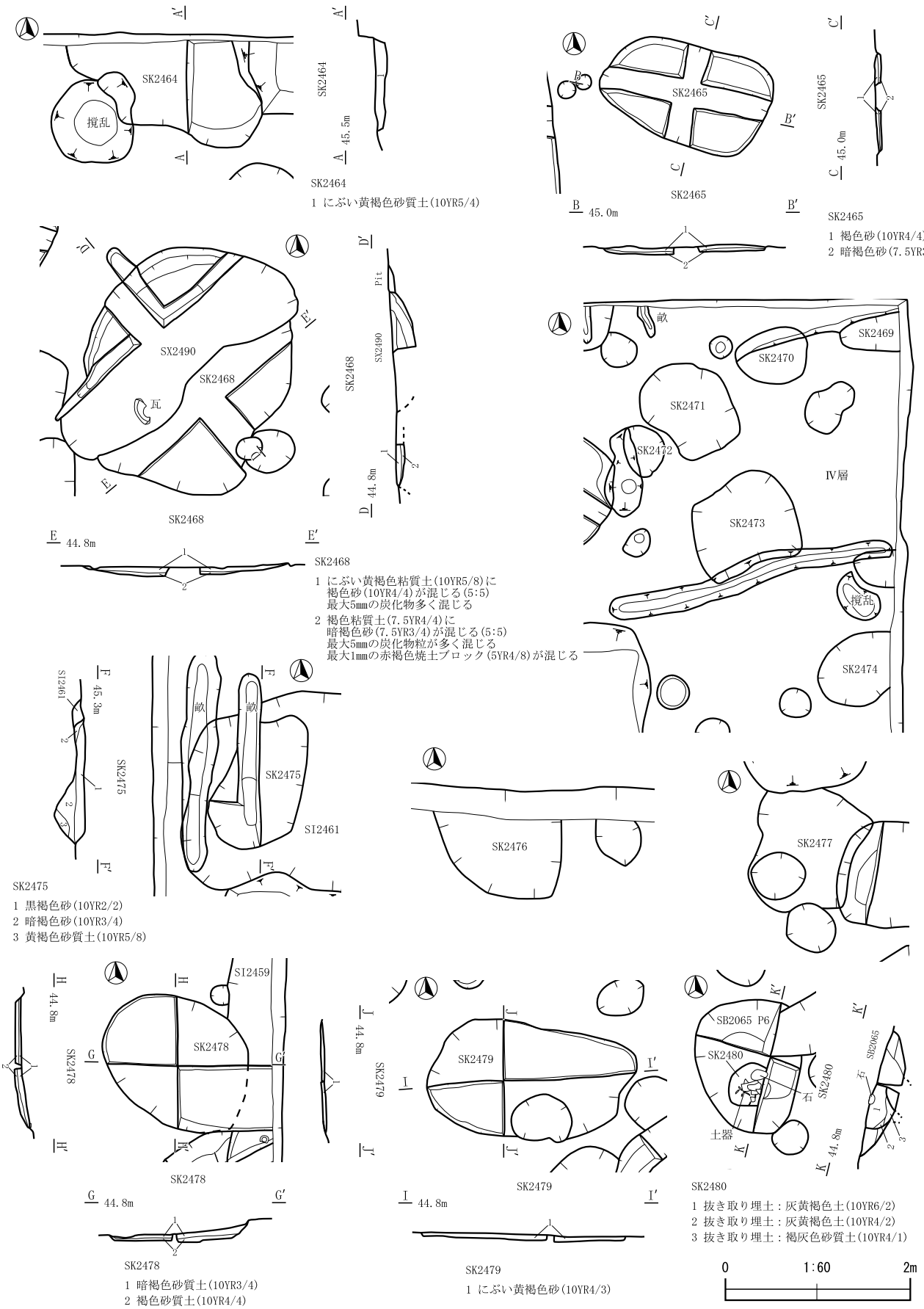
調査区の北東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 100cm 以上、長さ 100cm 以上、楕円形を呈する。

SK2467・SX2490 と重複し、SK2467 より新しく、SX2490 より古い。

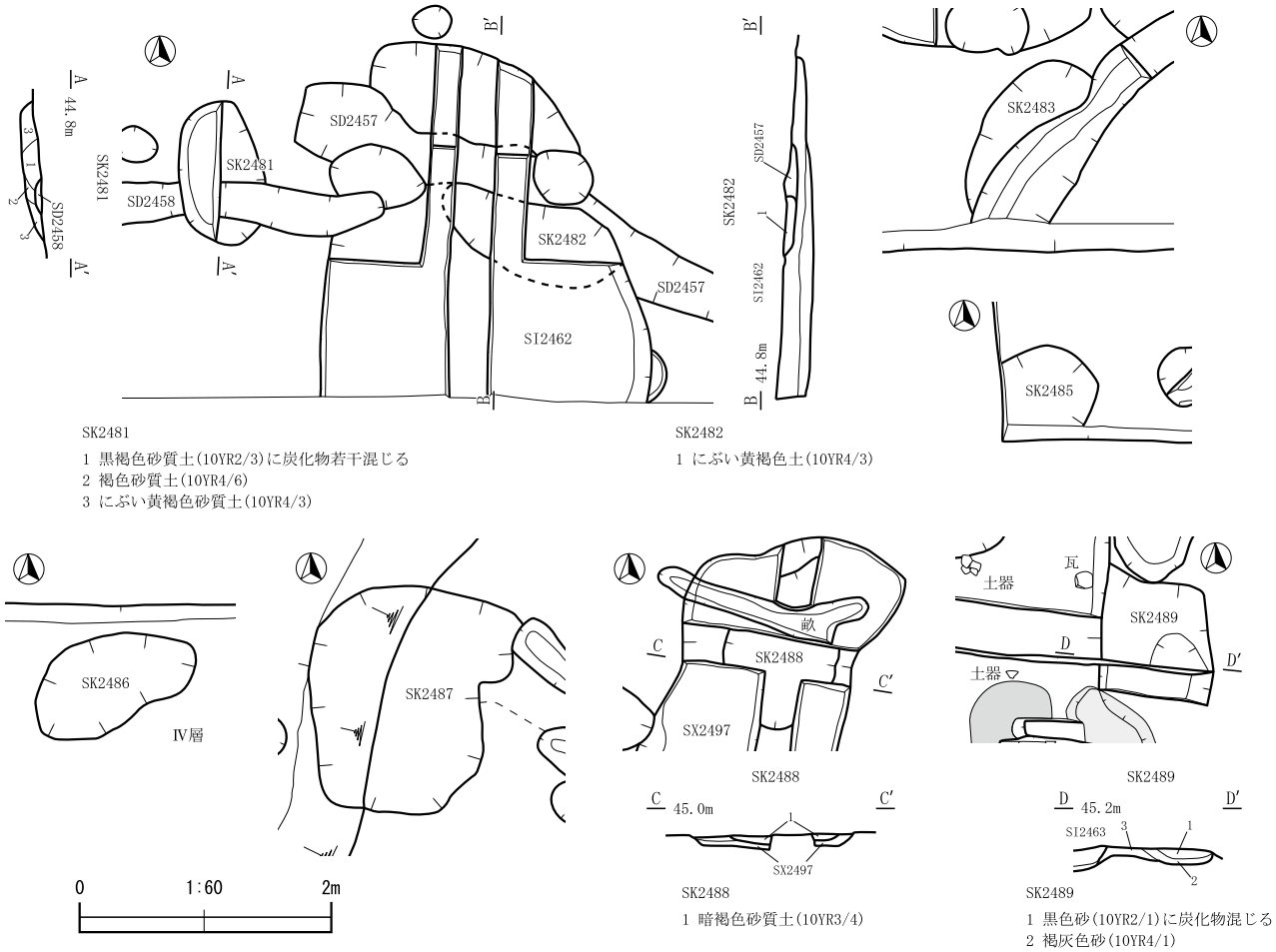
ＳＫ2467 土坑

調査区の北東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 100cm、長さ 120cm、楕円形を呈する。

SK2466・SX2490 と重複し、これらより古い。



第 27 図　SK2464 ～ SK2480 土坑



第 28 図　SK2481 ～ SK2489 土坑

ＳＫ2468 土坑（第 27 図）

調査区の北東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 100cm 以上、長さ 290cm、深さ 10cm、不整形を呈し、北で東に 52°振れる。

SX2490 と重複し、これより古い。

ＳＫ2468 土坑出土遺物（第 29・30 図、図版 18）

土師器（第 29 図７）：埋土出土で、甕の頸部破片である。外面にハケメ調整を施す。

瓦（第 30 図１）：埋土出土で、丸瓦である。凸面には縄目叩き後ナデ調整を施す。凹面には布目圧痕がみられる。橙色で軟質、焼成はやや不良である。分割沈線が認められる。

ＳＫ2469 土坑（第 27 図）

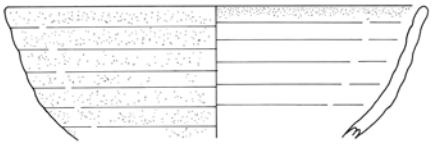
調査区の南東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 40cm、長さ 60cm 以上、楕円形を呈する。

ＳＫ2470 土坑（第 27 図）

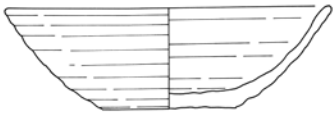
調査区の南東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 60cm、長さ 80cm 以上、歪な楕円形を呈する。

ＳＫ2471 土坑（第 27 図）

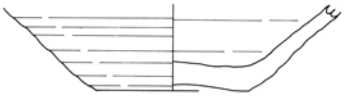
調査区の南東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 100cm、長さ 110cm、不整形を呈する。



1(10-431)

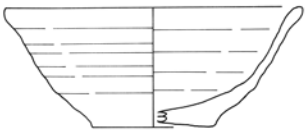


2(10-432)



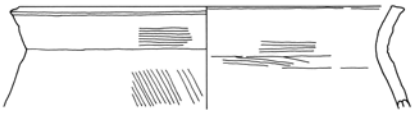
3(10-433)

4(10-434)



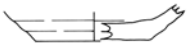
5(10-435)

6(10-436)



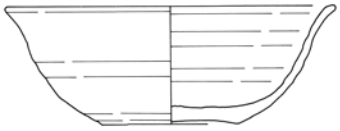
7(10-437)

8(10-438)

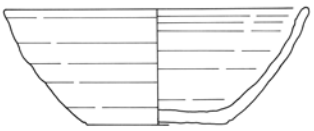


9(10-439)

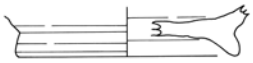
10(10-440)



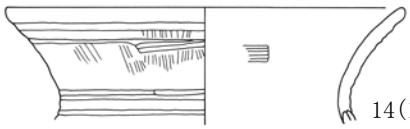
11(10-441)



12(10-442)



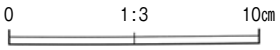
13(10-443)



14(10-444)

15(10-445)

１～４　SK2464 埋土　５・６　SK2465 埋土　７　SK2468 埋土　８　SK2471 埋土
９　SK2475 埋土　10　SK2478 埋土　11・12　SK2480 埋土　13　SK2481 埋土
14・15　SK2484 埋土



第 29 図　SK2464 ～ SK2484 土坑出土遺物

ＳＫ2471 土坑出土遺物（第 29 図、図版 18）

土製品（第 29 図８）：埋土出土で、フイゴの羽口の破片である。

ＳＫ2472 土坑（第 27 図）

調査区の南東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 40cm、長さ 60cm、楕円形を呈する。

ＳＫ2473 土坑（第 27 図）

調査区の南東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 100cm、長さ 110cm、不整形を呈する。

ＳＫ2474 土坑（第 27 図）

調査区の南東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 70cm、長さ 100cm、楕円形を呈する。

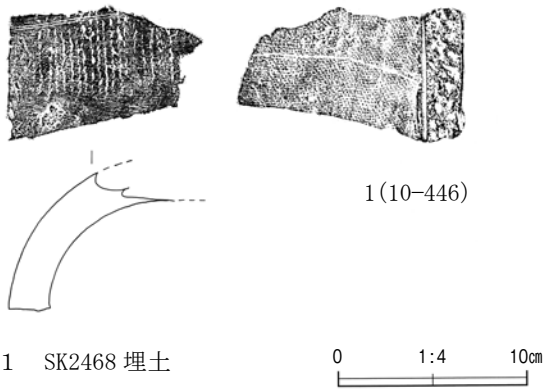
ＳＫ2475 土坑（第 27 図）

調査区の南東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 100cm、長さ 160cm、不整形を呈する。

SI2461 と重複し、これより新しい。

ＳＫ2475 土坑出土遺物（第 29 図、図版 18）

赤褐色土器（第 29 図９）：埋土出土で、糸切り無調整の坏である。



第 30 図　SK2468 土坑出土瓦

ＳＫ2476 土坑（第 27 図）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 100cm、長さ 150cm、不整形を呈する。

ＳＫ2477 土坑（第 27 図）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 140cm、長さ 150cm、不整形を呈する。

SB2065・SA2455 と重複し、これらより古い。

ＳＫ2478 土坑（第 27 図）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 130cm、長さ 180cm、深さ８cm、楕円形を呈する。

SI2459・SK2484 と重複し、これらより新しい。

ＳＫ2478 土坑出土遺物（第 29 図、図版 18）

赤褐色土器（第 29 図 10）：埋土出土で、糸切り無調整の坏である。

ＳＫ2479 土坑（第 27 図、図版７）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 120cm、長さ 220cm、深さ６cm、不整形を呈する。北で 85°東に振れる。

ＳＫ2480 土坑（第 27 図、図版８）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。直径 50cm、深さ 28cm、歪な円形を呈する。

SB2065 と重複し、これより新しい。

ＳＫ2480 土坑出土遺物（第 29 図、図版 18）

赤褐色土器（第 29 図 11・12）：いずれも埋土出土で、糸切り無調整の坏である。11 は被熱している。

ＳＫ2481 土坑（第 28 図、図版８）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 70cm、長さ 120cm、楕円形を呈する。

SD2458 と重複し、これより古い。

ＳＫ2481 土坑出土遺物（第 29 図、図版 18）

赤褐色土器（第 29 図 13）：埋土出土で、糸切り無調整の台付坏である。糸切りの後高台を貼り付けている。

ＳＫ2482 土坑（第 28 図）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 50cm 以上、長さ 150cm 以上、深さ 10cm、楕円形を呈する。SI2462・SD2457 と重複し、これらより新しい。

ＳＫ2483 土坑（第 28 図）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 50cm 以上、長さ 150cm 以上、深さ 17cm、楕円形を呈す。SD2458 と重複し、これより古い。

ＳＫ2484 土坑（第 20 図）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。SI2459 下層に存在し、深さ 20cm、平面形状は不明。SI2459・SK2478 と重複し、これらより古い。

ＳＫ2484 土坑出土遺物（第 29 図、図版 18）

土師器（第 29 図 14）：埋土出土で、甕の頸部破片である。頸部に縦方向のハケメ調整後、横走沈線を数条を施す。

赤褐色土器（第 29 図 15）：埋土出土で、糸切り無調整の坏である。被熱している。

ＳＫ2485 土坑（第 28 図）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 80cm 以上、長さ 80cm 以上、楕円形を呈する。

ＳＫ2486 土坑（第 28 図）

調査区の南西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 70cm、長さ 140cm、歪な楕円形を呈する。

ＳＫ2487 土坑（第 28 図）

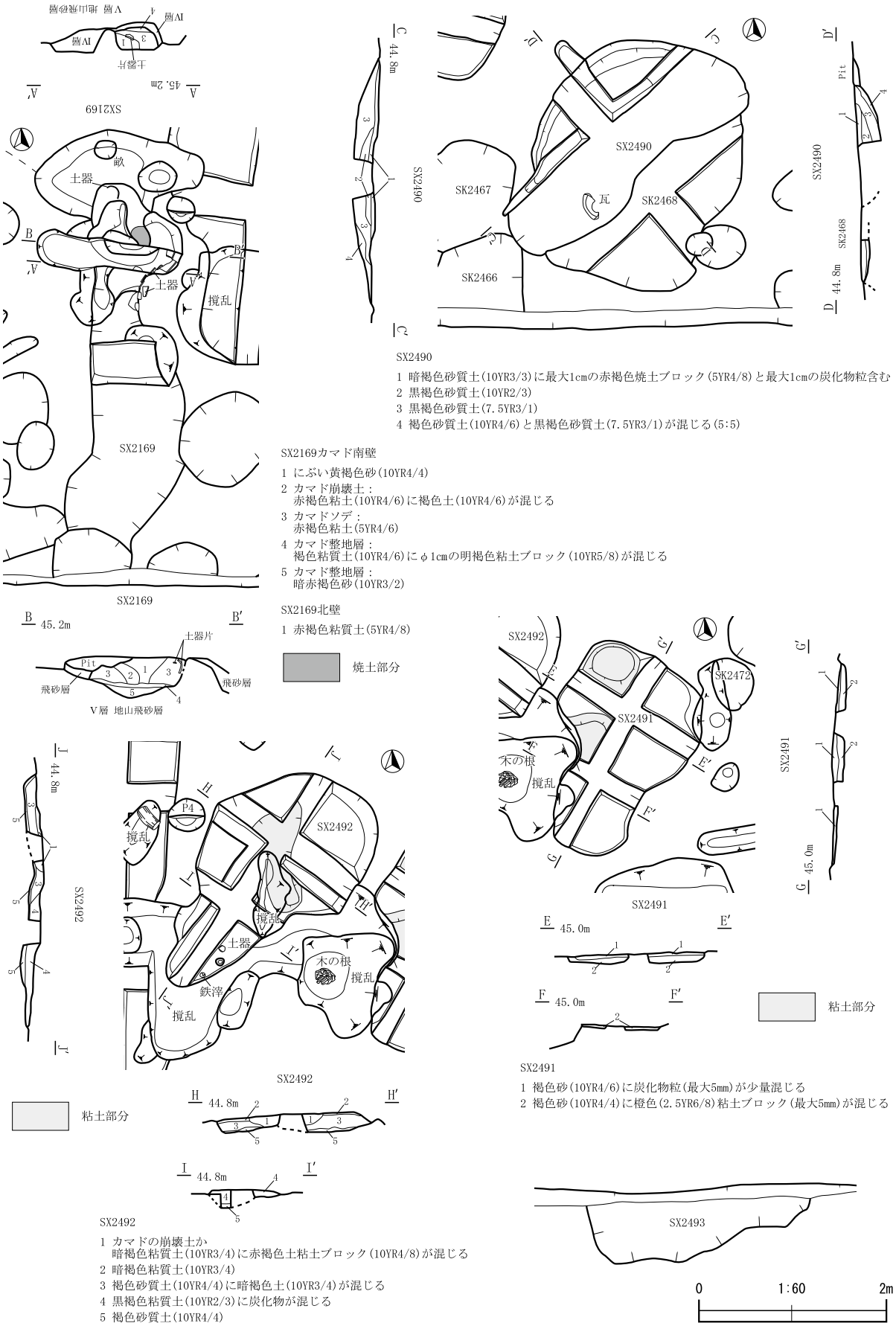
調査区の南西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 164cm、長さ 180cm、歪な隅丸方形を呈する。

ＳＫ2488 土坑（第 28 図）

調査区の南西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 80cm、長さ 180cm、深さ８cm、楕円形を呈する。SX2497 と重複し、これより新しい。

ＳＫ2489 土坑（第 28 図）

調査区の南西区の第Ⅴ層面で検出された。幅 90cm、長さ 110cm、深さ 12cm、楕円形を呈する。SI2463 と重複し、これより古い。



SX2490

1 暗褐色砂質土(10YR3/3)に最大1cmの赤褐色焼土ブロック(5YR4/8)と最大1cmの炭化物粒含む
2 黒褐色砂質土(10YR2/3)
3 黒褐色砂質土(7.5YR3/1)
4 褐色砂質土(10YR4/6)と黒褐色砂質土(7.5YR3/1)が混じる(5:5)

SX2169カマド南壁

1 にぶい黄褐色砂(10YR4/4)
2 カマド崩壊土：
赤褐色粘土(10YR4/6)に褐色土(10YR4/6)が混じる
3 カマドソデ：
赤褐色粘土(5YR4/6)
4 カマド整地層：
褐色粘質土(10YR4/6)にφ1cmの明褐色粘土ブロック(10YR5/8)が混じる
5 カマド整地層：
暗赤褐色砂(10YR3/2)

SX2169北壁

1 赤褐色粘質土(5YR4/8)

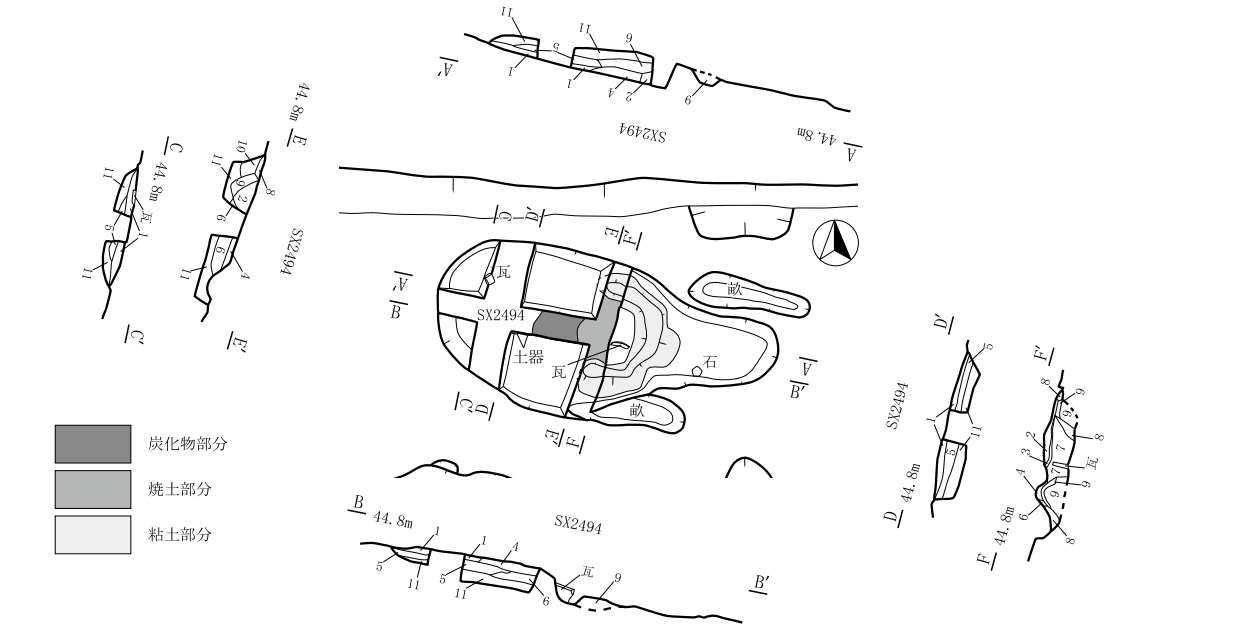
SX2491

1 褐色砂(10YR4/6)に炭化物粒(最大5mm)が少量混じる
2 褐色砂(10YR4/4)に橙色(2.5YR6/8)粘土ブロック(最大5mm)が混じる

SX2492

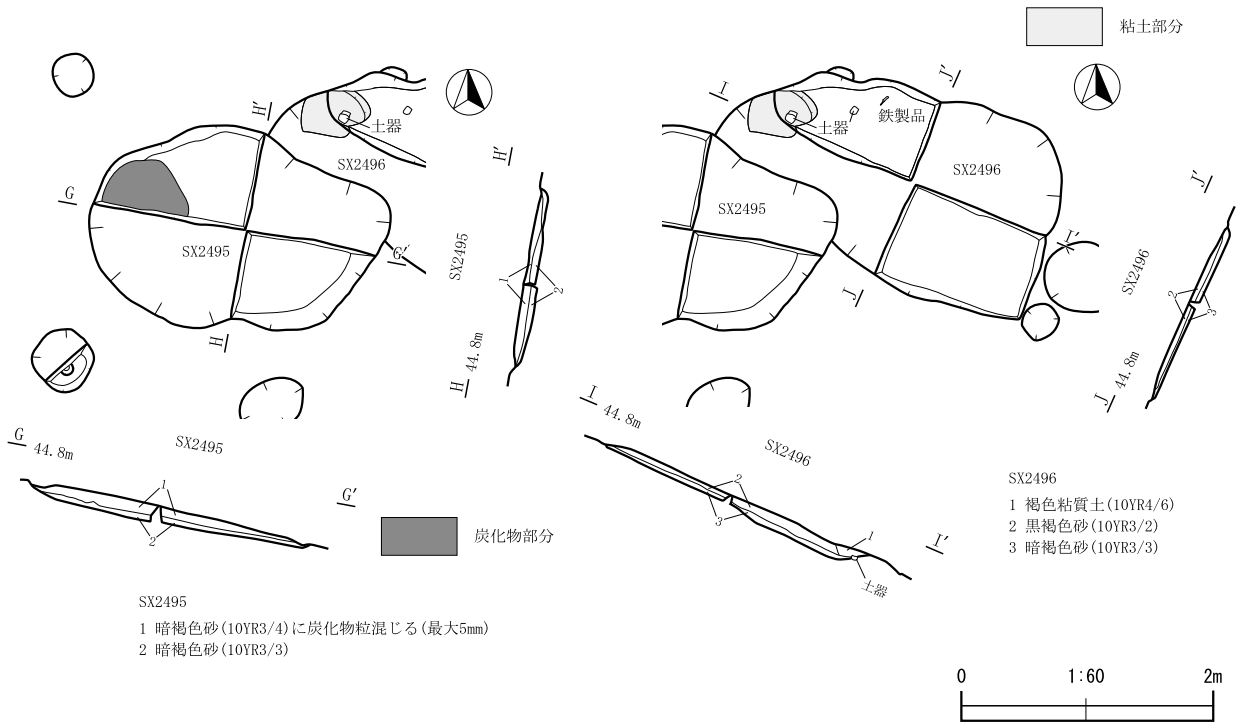
1 カマドの崩壊土か
暗褐色粘質土(10YR3/4)に赤褐色土粘土ブロック(10YR4/8)が混じる
2 暗褐色粘質土(10YR3/4)
3 褐色砂質土(10YR4/4)に暗褐色土(10YR3/4)が混じる
4 黒褐色粘質土(10YR2/3)に炭化物が混じる
5 褐色砂質土(10YR4/4)

第 31 図　SX2169・SX2490 ～ SX2493 焼土遺構



SX2494

1　褐色粘質土(10YR4/4)に黄褐色粘土ブロック(10YR5/8)
2　赤褐色粘土(2.5YR5/8)にφ2～3mmの赤褐色粘土ブロック(2.5YR4/8)が混じり、被熱している
3　明赤褐色粘土(2.5YR5/8)にφ2～3mmの赤褐色粘土ブロック(2.5YR4/8)が混じり、被熱している
4　黒褐色土(10YR2/3)にφ2～3mmの赤褐色粘土ブロック(2.5YR4/8)とにぶい黄橙色粘質土(10YR6/4)と炭化物が多く混じる
5　にぶい黄褐色土(10YR5/4)に黄褐色粘土ブロック(10YR5/8)が混じる
6　黒褐色土(10YR2/3)に赤褐色粘土ブロック(10YR5/8)が混じる
7　黒褐色粘質土(10YR3/2)にφ5～8mmの赤褐色土粘土ブロックに(2.5YR4/8)に炭化物が混じる
8　にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)
9　カマド粘土：
　黄褐色粘土(10YR5/8)にφ1cm程度のにぶい黄褐色粘土ブロック(10YR5/3)が混じる
10 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)
11 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)



SX2495

1 暗褐色砂(10YR3/4)に炭化物粒混じる(最大5mm)
2 暗褐色砂(10YR3/3)

SX2496

1 褐色粘質土(10YR4/6)
2 黒褐色砂(10YR3/2)
3 暗褐色砂(10YR3/3)

0　1:60　2m

第 32 図　SX2494 ～ SX2496 焼土遺構

ＳＸ2169 焼土遺構（第 31 図、図版８）

調査区の南西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 90～110cm、長さ３m90cm、深さ 44cm、不整形を呈する。西で北に 86°振れる。

ＳＸ2169 焼土遺構出土遺物（第 34 図、図版 19）

須恵器（第 34 図１）：底面出土で、大甕である。破片を用いて焼土遺構の補強材としていた。内面に同心円当て具痕、外面平行叩き痕がみられる。

赤褐色土器（第 34 図２）：埋土出土で、蓋である。内面に煤状炭化物が付着している。

ＳＸ2490 焼土遺構（第 31 図、図版８）

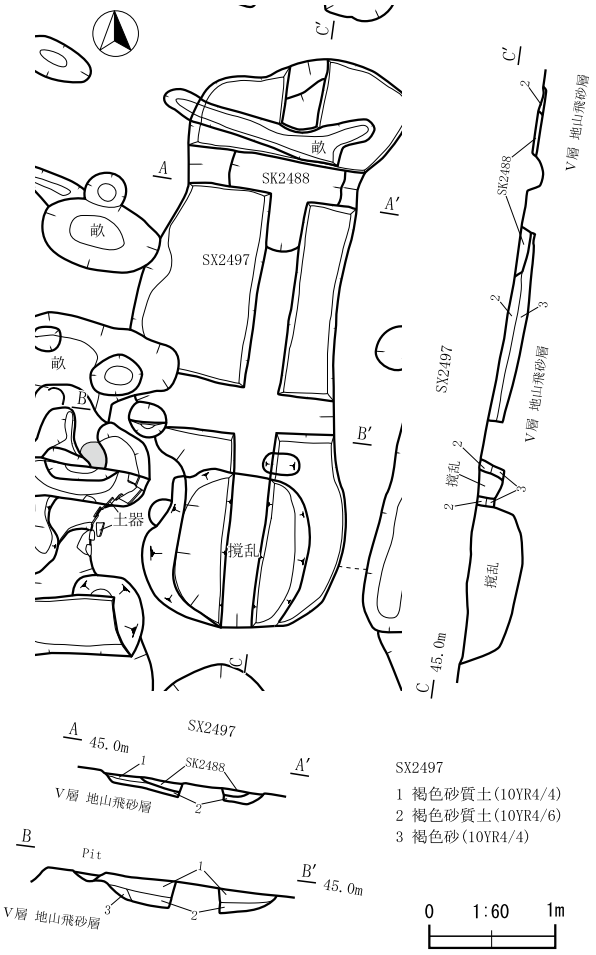
調査区の北東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 120cm、長さ 300cm、深さ 21cm、不整形を呈する。北で東に 52°振れる。

SK2467・SK2468・SK2466 と重複し、これらより新しい。

ＳＸ2490 焼土遺構出土遺物（第 34 図、図版 19）

須恵器（第 34 図３）：埋土出土で、坏の破片である。

瓦（第 36 図１）：埋土出土で丸瓦である。凸面にはナデ調整を施し、凹面には布目圧痕がみられる。橙色で軟質、焼成はやや不良である。分割沈線が認められる。



第 33 図　SX2497 焼土遺構

ＳＸ2491 焼土遺構（第 31 図、図版８）

調査区の南東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 150cm、長さ 230cm 以上、深さ 12cm、不整形を呈する。北で東に 27°振れる。

ＳＸ2491 焼土遺構出土遺物（第 34 図、図版 19）

須恵器（第 34 図４）：埋土出土で、坏の口縁部破片である。

赤褐色土器（第 34 図５）：埋土出土で、糸切り無調整の坏である。

鉄製品（第 34 図６）：埋土出土で、不明鉄製品である。

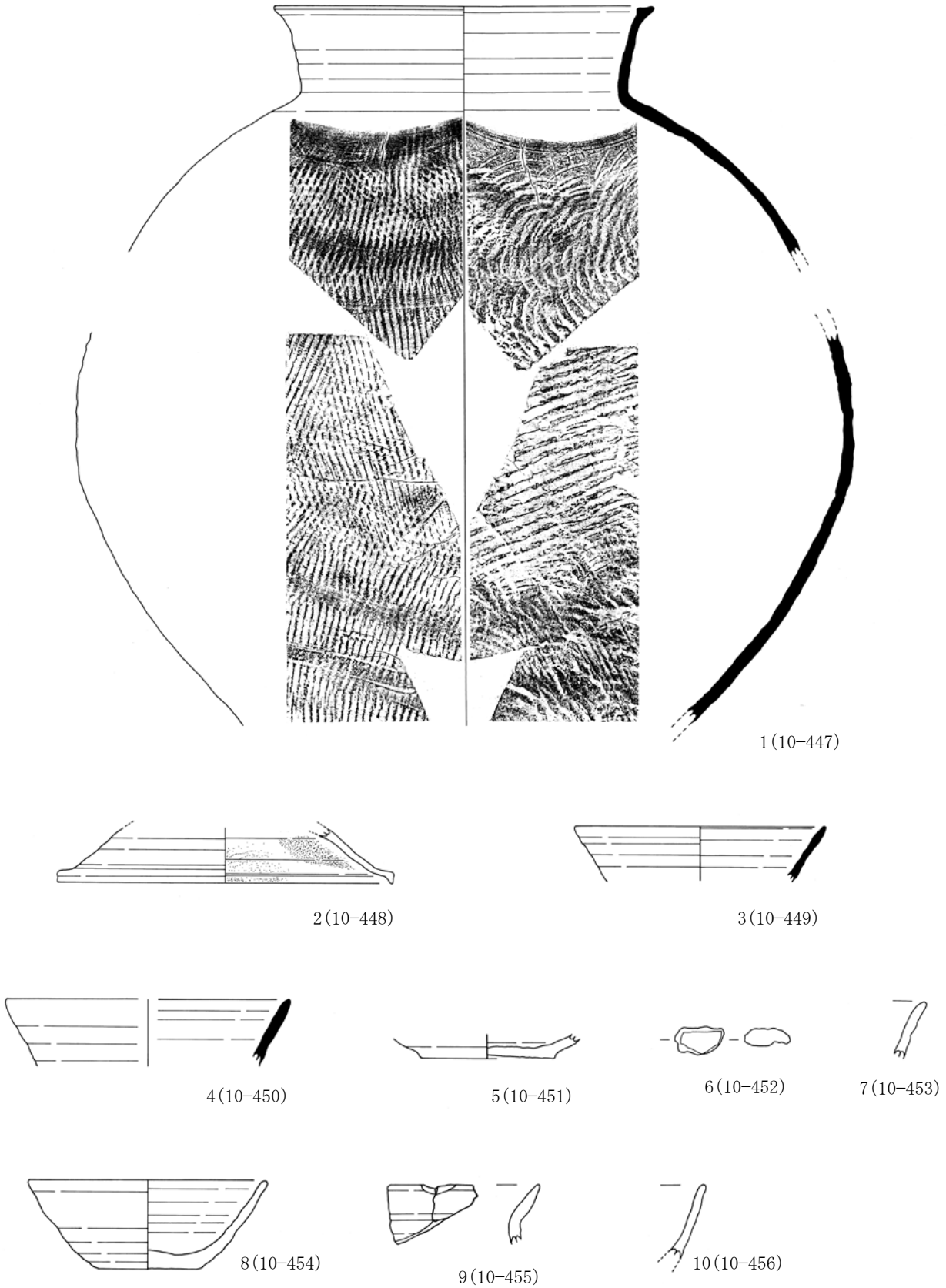
ＳＸ2492 焼土遺構（第 31 図、図版８・９）

調査区の南東区の第Ⅳ層面で検出された。幅 170cm、長さ 270cm、深さ 21cm、不整形を呈する。北で東に 36°振れる。

ＳＸ2492 焼土遺構出土遺物（第 34 図、図版 20）

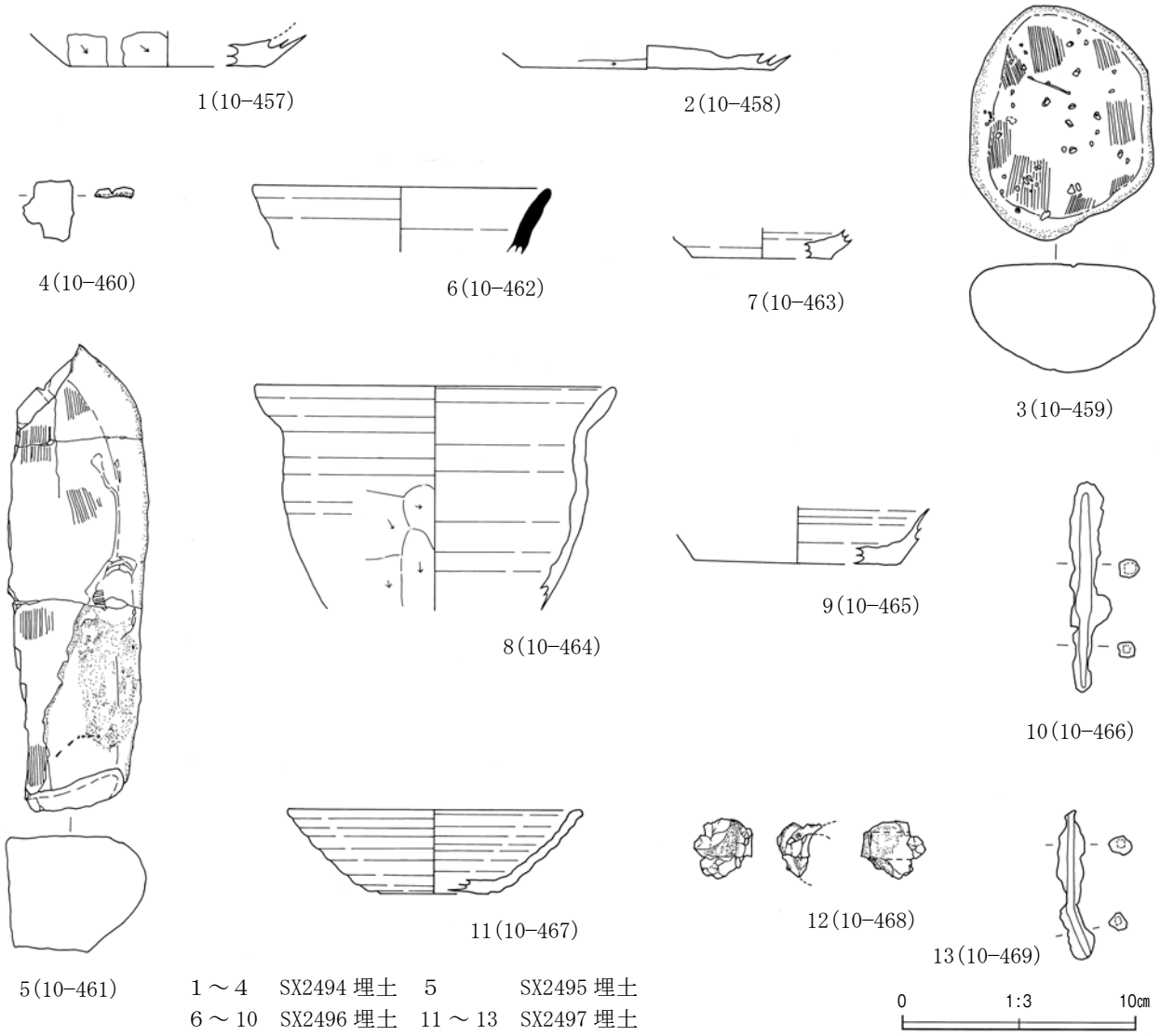
土師器（第 34 図７）：底面出土で、坏の口縁部破片である。内面に黒色処理、ミガキ調整を施す。

赤褐色土器（第 34 図８）：底面出土で、糸切り無調整の坏である。



1・2　SX2169(1　底面　2　埋土)　3　SX2490 埋土　4～6　SX2491 埋土
7・8　SX2492 底面　9・10　SX2494 埋土

第 34 図　SX2169・SX2490 ～ 2494 焼土遺構出土遺物



第 35 図　SX2494 ～ SX2497 焼土遺構出土遺物

ＳＸ2493 焼土遺構（第 31 図）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 60cm 以上、長さ 240cm 以上、不整形を呈する。

ＳＸ2494 焼土遺構（第 32 図、図版９）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 130cm、長さ 280cm、深さ 20cm、不整形を呈する。西で８°北側に振れる。

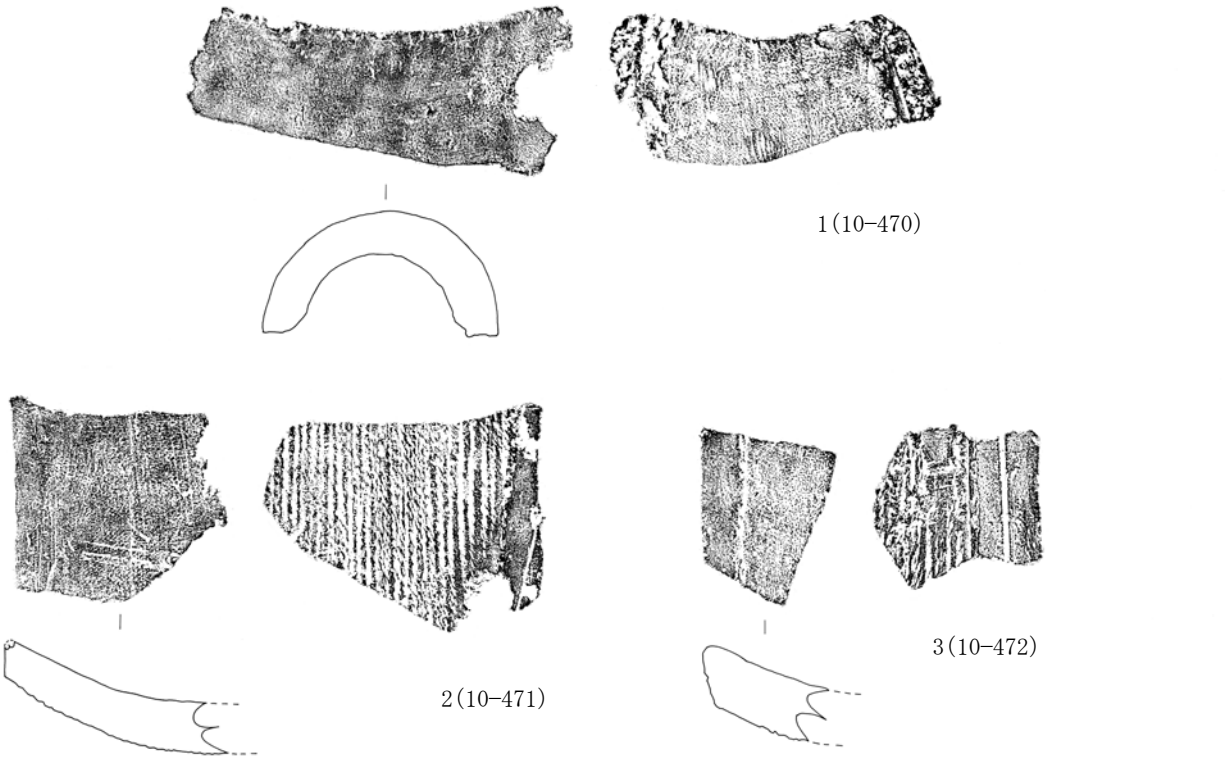
ＳＸ2494 焼土遺構出土遺物（第 34 図、図版 20）

土師器（第 34 図９）：埋土出土で、甕である。

赤褐色土器（第 34 図 10、第 35 図１・２）：いずれも埋土出土である。第 34 図 10 は坏の口縁部破片である。第 35 図１・２は平底小型甕の底部破片である。１は体部下半横方向に手持ちヘラケズリを施す。２は底部立ち上がり部分手持ちヘラケズリを施す。

石製品（第 35 図３）：埋土出土で、泥岩製の磨石である。表面が研磨されている。

鉄製品（第 35 図４）：埋土出土で、不明鉄製品である。



1　SX2490 埋土　２・３　SX2494 埋土

0　1:4　10cm

第 36 図　SX2490・SX2494 焼土遺構出土瓦

瓦（第 36 図２・３）：いずれも埋土出土である。いずれも平瓦で、凸面には縄目の叩き痕、凹面には布目圧痕がみられる。灰黄色でやや硬質、焼成は良好である。いずれも被熱している。

ＳＸ2495 焼土遺構（第 32 図、図版９）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 150cm、長さ 230cm、深さ８cm、不整形を呈する。西で 10°北側に振れる。

SX2496 と重複し、これらより新しい。

ＳＸ2495 焼土遺構出土遺物（第 35 図、図版 20）

礫（第 35 図５）：埋土出土である。被熱した安山岩製の礫で、金床石の可能性がある。

ＳＸ2496 焼土遺構（第 32 図、図版９）

調査区の北西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 110cm、長さ 220cm、深さ８cm、不整形を呈する。西で 24°北側に振れる。

SX2495 と重複し、これより古い。

ＳＸ2496 焼土遺構出土遺物（第 35 図、図版 20）

須恵器（第 35 図６）：埋土出土で、坏の口縁部破片である。

赤褐色土器（第 35 図７～９）：いずれも埋土出土である。7 は糸切り無調整の坏の底部破片である。８と９は平底小型甕である。８は体部下半縦方向に手持ちヘラケズリを施す。９は底部破片で被熱している。

鉄製品（第 35 図 10）：埋土出土で、鉄鏃である。先端部分が欠損している。

ＳＸ2497 焼土遺構（第 33 図、図版９）

調査区の南西区の第Ⅳ層面で検出された。幅 180～210cm、長さ 460cm、深さ 21cm、不整形を呈する。北で９°東側に振れる。

SK2488 と重複し、これより古い。

ＳＸ2497 焼土遺構出土遺物（第 35 図、図版 20）

赤褐色土器（第 35 図 11）：埋土出土で、糸切り無調整の坏である。

土製品（第 35 図 12）：埋土出土で、フイゴの羽口の破片である。

鉄製品（第 35 図 13）：埋土出土で、不明鉄製品である。

③Ｂ区第Ⅳ層面検出遺構

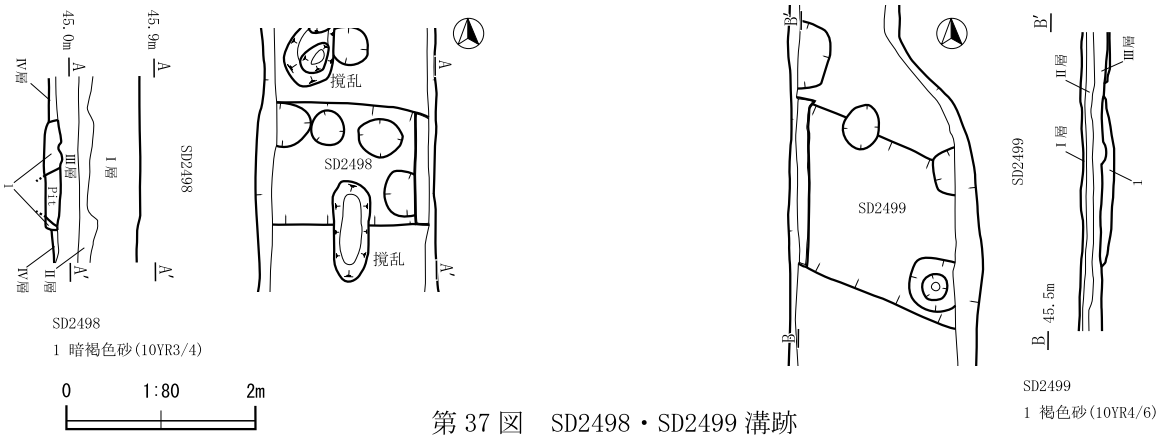
Ｂ区第Ⅳ層面からは、溝跡２条が発見された。

ＳＤ2498 溝跡（第 37 図、図版９）

調査区Ⅳ層面で検出された。幅 130cm、長さ 160cm、深さ 18cm の溝跡で、調査区の東西に延びる。方位は東西方向である。

ＳＤ2499 溝跡（第 37 図、図版９）

調査区Ⅳ層面で検出された。幅 160cm、長さ 180cm、深さ 12cm の溝跡で、調査区の東西に延びる。西で北に 25°振れる。



第 37 図　SD2498・SD2499 溝跡

３　基本層序および各層出土遺物

第 108 次調査地の現地形はほぼ平坦である。かつて宅地があり、その基礎によって削平を受けている部分がある。また、宅地となる以前は、畑地として利用されており、その耕作により古代整地層である第Ⅳ層の上部は大きく削平を受けていることが判明している。

第 108 次の基本層序をまとめると以下のようになる。

第Ⅰ層　表土：現表土。黒褐色土（7.5YR3/1）。

第Ⅱ層　造成土：暗褐色土（7.5YR3/4）。かつて調査地に立地していた宅地の造成土。

第Ⅲ層　耕作土：旧耕作土。近世以降。褐灰色土（10YR4/1）。

第Ⅳ層　古代整地層：褐色砂（10YR4/6）。

第Ⅴ層　地山飛砂層：黄褐色砂（10YR5/8）。

各層出土遺物

第Ⅰ層　出土遺物（第 38 図１～７、図版 21）

須恵器 （第 38 図１）：台付坏である。ヘラ切り後、台部を貼り付けている。底部外面に「長」墨書がみられる。底部内面を硯に転用している。

赤褐色土器（第 38 図２）：糸切り無調整の坏である。内面に漆が付着している。

土製品（第 38 図３）：フイゴ羽口の破片である。

陶器（第 38 図４）：志野の丸皿の可能性がある。

磁器（第 38 図５）：肥前系磁器の猪口で、内面に草花を染付ける。底部は蛇ノ目凹形高台である。

赤褐色土器（第 38 図６）：坏の体部破片である。部外面に判読不明の墨書がある。

鉄製品（第 38 図７）：不明鉄製品である。

第Ⅱ層　出土遺物（第 38 図８・９、図版 21）

須恵器 （第 38 図８）：甕の胴部破片である。内面を硯に転用している。

磁器（第 38 図９）：肥前系磁器の皿で、内外面に草花を染付ける。底部は蛇ノ目凹形高台である。

第Ⅲ層　出土遺物（第 38 図 10～第 39 図 13、図版 21・22）

須恵器（第 38 図 10～12）：10 と 11 は坏である。10 は糸切り後、周縁部にケズリ調整を施す。11 は底部回転ヘラ切りで、底部内面を硯に転用している。12 は甕である。

土師器（第 38 図 13・14）：13 は糸切り無調整の坏である。内面に漆が付着している。14 は碗である。内外面に黒色処理、体部外面上半と内面にミガキ調整を施す。

赤褐色土器（第 38 図 15～18）：15～18 は糸切り無調整の坏である。16 と 17 は内面に漆が付着している。18 は底部外面に判読不明の墨書がある。

土製品（第 38 図 19～21、39 図１）：19～21 は土錘である。19 は被熱している。第 39 図１はフイゴの羽口の破片である。

石製品（第 39 図２・３）：２と３は砥石である。いずれも凝灰岩製の携げ砥石でそれぞれ４面と６面を使用している。

鉄製品（第 39 図４～10）：４・５は鉄鏃で、いずれも頭部を欠損している。６～10 は不明鉄製品である

石製品（第 39 図 11）：粗粒玄武斑岩製の磨製石斧である。敲打後に部分的に研磨している。

陶器（第 39 図 12）：産地不明の甕である。

磁器（第 39 図 13）：肥前系磁器の碗で、外面に染付を施している。

第Ⅳ層　出土遺物（第 39 図 14～第 40 図 17、図版 22・23）

須恵器（第 39 図 14～19、40 図１・２）：第 39 図 14～19 は坏である。14 と 15 は底部回転ヘラ切り後ナデ調整を施す。16 は糸切り後軽いナデ調整を施す。17 は糸切り無調整。18 は底部回転ヘラ切り後ナデ調整を施す。19 は糸切り後、底部周縁にケズリ調整を施す。底部外面に判読不明の墨書がある。第 40 図１と２は台付坏である。１はヘラ切り後ナデ調整を施す。平行の圧痕が付着しており、その後高台を貼り付けている。２は内面を硯に転用している。

赤褐色土器（第 40 図３・４）：３は坏の口縁部破片である。体部外面に判読不明の墨書がある。４は甕で

ある。内外面にロクロ利用のカキ目調整を施している。

石製品（第 40 図５）：凝灰岩製で携げ砥石である。石製紡錘車を転用した可能性がある。

礫（第 40 図６）：花崗岩製の金床石の可能性がある。被熱している。

鉄製品（第 40 図７～14）：７～10 は鉄鏃で、７と８はその茎部分である。11 は刀子である。12 と 13 は不明鉄製品である。14 は刀子の刃部である。

弥生土器（第 40 図 15）：鉢の体部である。

石器（第 40 図 16）：珪質頁岩製の石鏃である。

瓦（第 40 図 17）：平瓦である。凸面は格子目のタタキ痕、凹面は布目圧痕がみられる。橙色でやや硬質、焼成はやや良好である。糸切り痕が認められ、広端部を上にした場合、糸切り方向は右下から左上である。

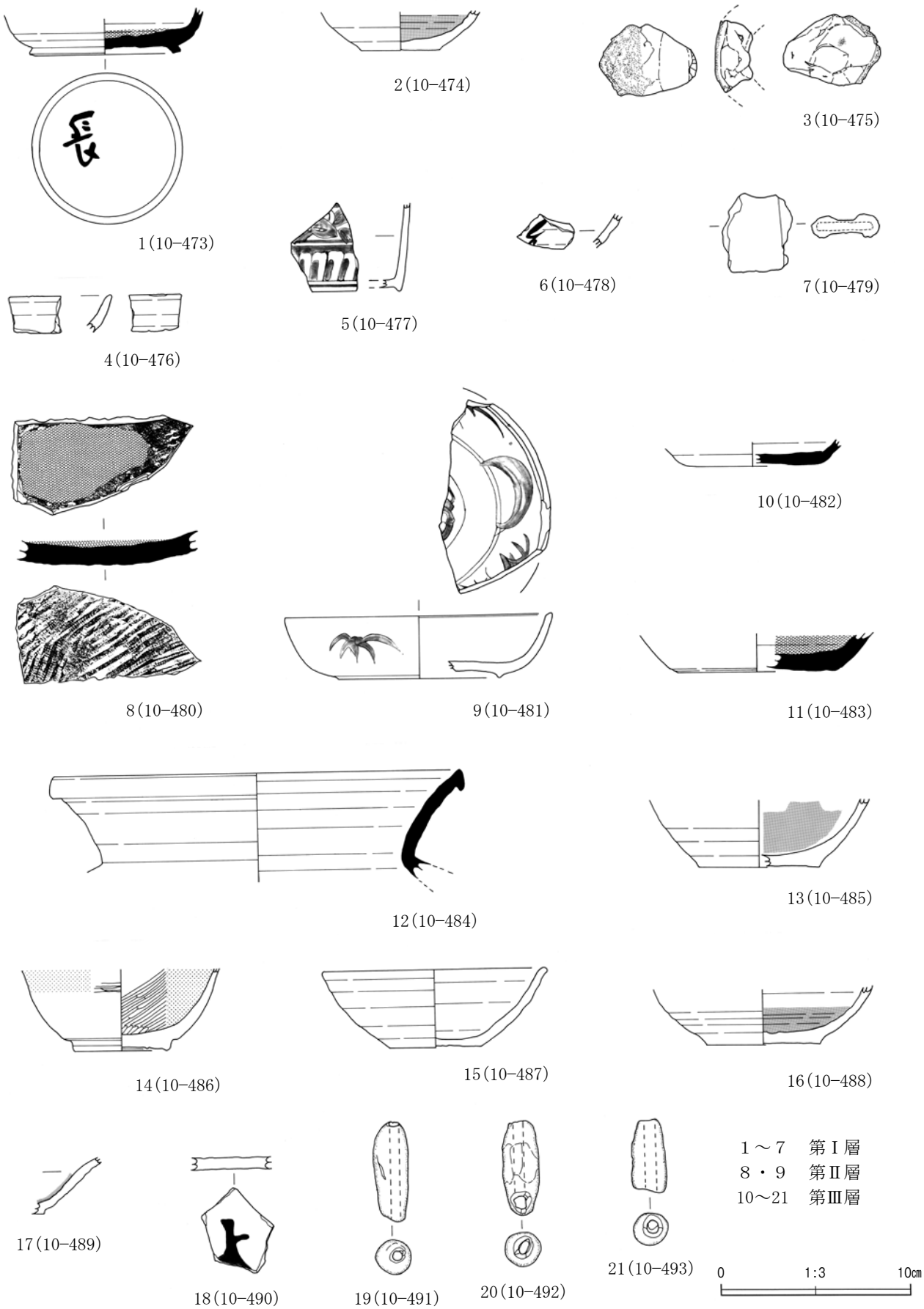
表３　第108次調査地出土鉄滓一覧表

点数

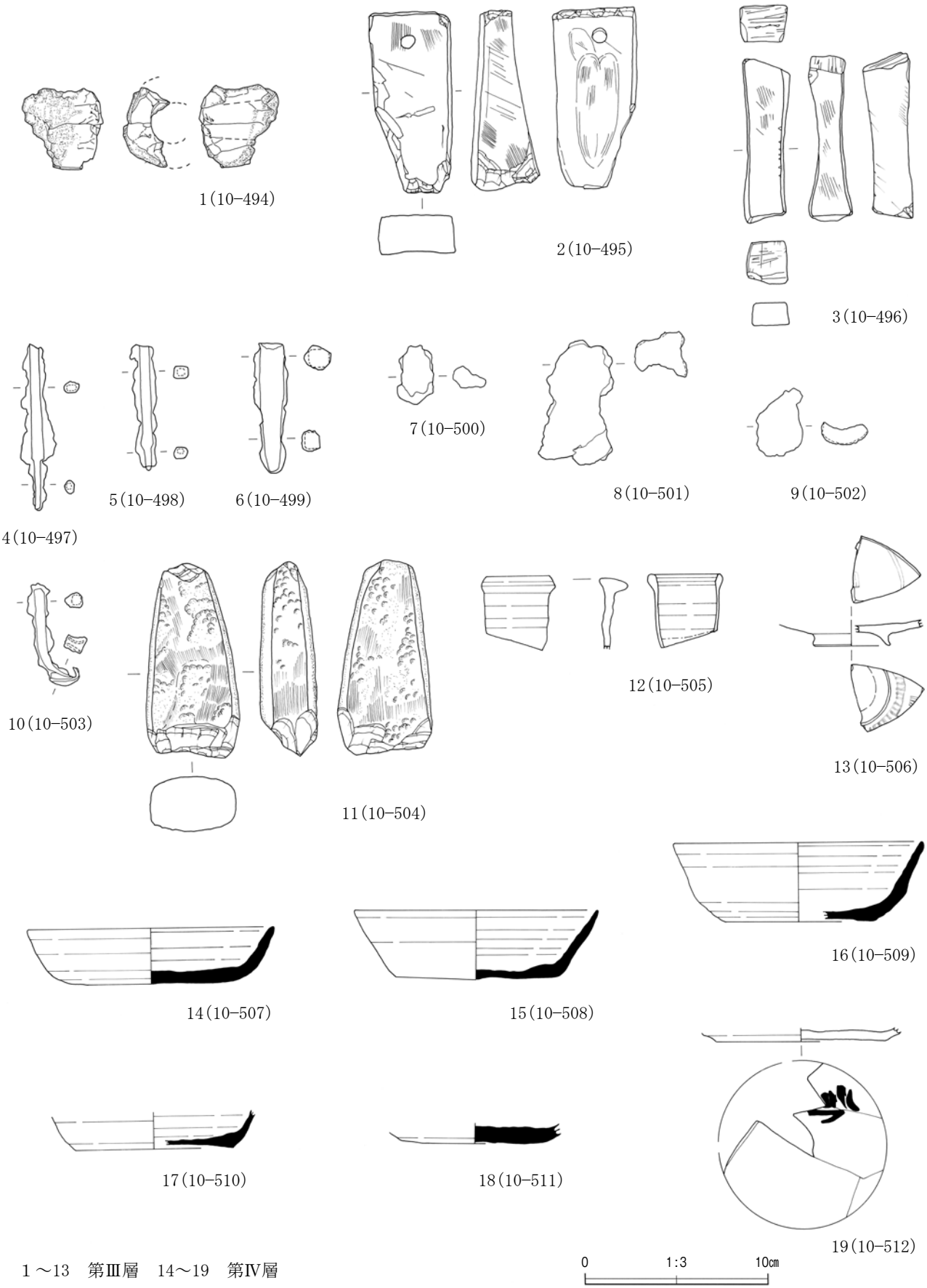
	磁着あり	磁着なし	総計
Ⅱ層	2	9	11
Ⅲ層	11	35	46
畝		3	3
SD2449		1	1
SD2450		6	6
SK2451		1	1
Ⅲ層小計	11	46	57
Ⅳ層	2	5	7
SI2463		2	2
SI2460		1	1
SI2461		1	1
SX2492		1	1
SX2169		1	1
Ⅳ層小計	2	11	13
総計	15	66	81

重量(g)

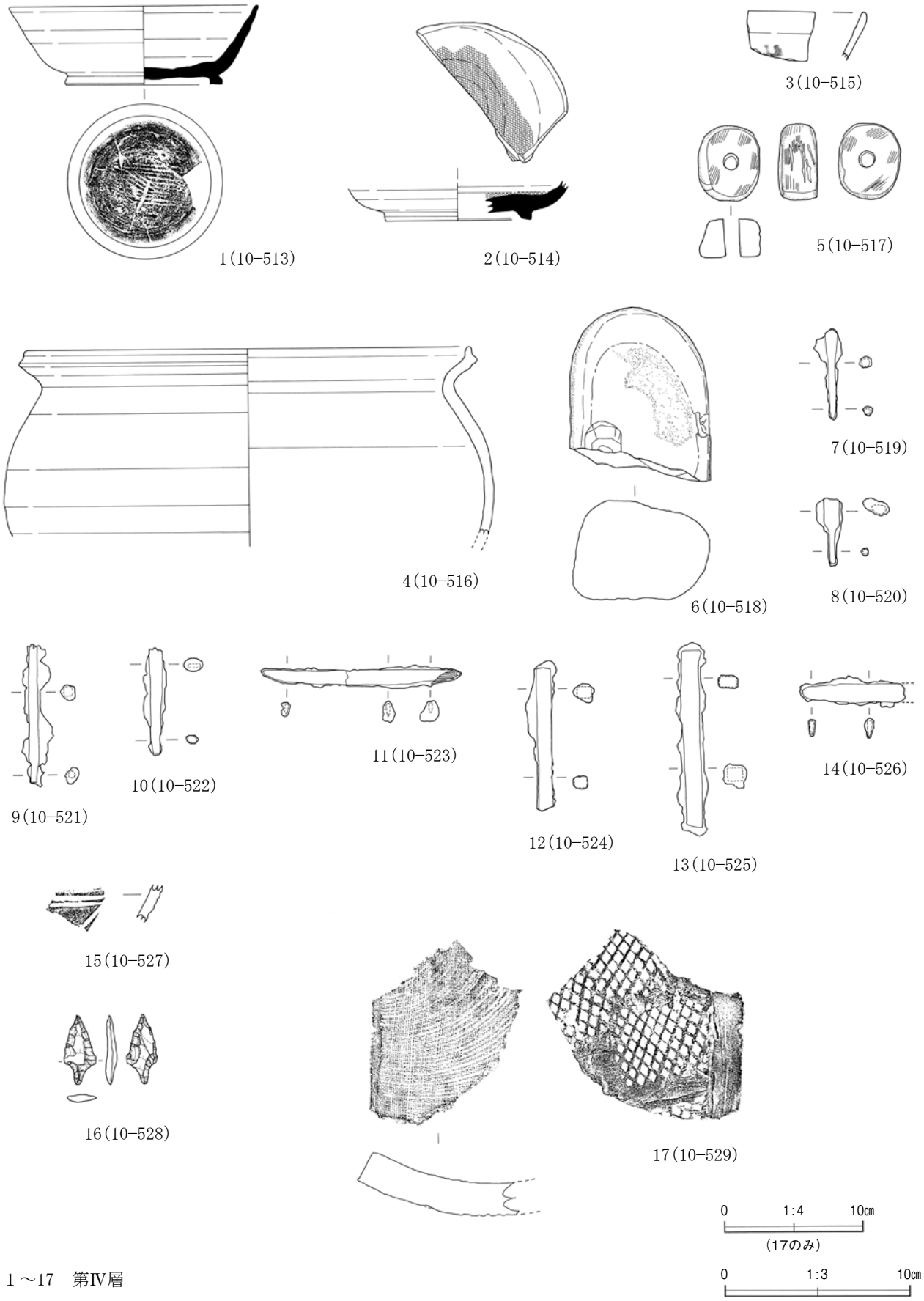
	磁着あり	磁着なし	総計
Ⅱ層	65.2	328.7	393.9
Ⅲ層	480.5	1040.6	1521.1
畝		43.5	43.5
SD2449		84.1	84.1
SD2450		220.6	220.6
SK2451		12.6	12.6
Ⅲ層小計	480.5	1401.4	1881.9
Ⅳ層	93.2	138.8	232.0
SI2463		156.2	156.2
SI2460		2.0	2.0
SI2461		1.7	1.7
SX2492		462.6	462.6
SX2169		16.0	16.0
Ⅳ層小計	93.2	777.3	870.5
総計	638.9	2494.8	3146.3



第 38 図　第 108 次調査地第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物



第 39 図　第 108 次調査地第Ⅲ層・第Ⅳ層出土遺物



1～17　第Ⅳ層

第 40 図　第 108 次調査地第Ⅳ層出土遺物

表４　第108次調査地検出遺構一覧（１）

遺構No.	図面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備　　考
SD2449	第７図	Ⅲ	近世以降		幅1.4m、長さ3.5m以上。深さ14cm。東西方向。
SD2450	第８図	Ⅲ	近世以降		幅1.2～1.8m、長さ15m以上。深さ15cm。北で東に14°振れる。
SK2451	第10図	Ⅲ	近世以降		幅50cm以上。長さ100cm。円形。深さ８cm。
SK2452	第10図	Ⅲ	近世以降		幅72cm以上。長さ205cm。隅丸方形。深さ20cm。
SK2453	第10図	Ⅲ	近世以降	→SD2449	幅1.7m、長さ4.3m。深さ18cm。東西方向。
SB2065	第12図	Ⅳ	古代	SK2477→ →SK2480・SA2455	南北２間（2.5m＋2.5m）東西１間（2.7m）。柱掘り方は一辺1.3m～1.5mの歪んだ方形。深さ20cm～45cm。柱痕跡は18～20cm。桁行南側柱筋が北で10°東に振れる。
SB2454	第13図	Ⅳ	古代		柱掘り方直径約20cm～40cmの歪んだ円形。柱痕跡は未確認。南北２間以上（3.3m＋3.3m…）、東西１間以上（2.6m＋…）。桁行東側柱筋が北で10°東に振れる。
SA2149	第15図	Ⅴ	古代	SA2144・SI2463→	布掘り溝を伴う材木列塀跡。布掘り溝は上幅50cm～70cm、下幅42cm～58cm、深さ３cm～22cm。北で東に13°振れる。断面系形はU字状。溝内に直径20cm～25cmの柱痕跡。99次調査確認の分も含め、長さ5.0m以上。
SA2455	第15図	Ⅳ	古代	SB2065→	南北２間(1.7m＋1.7m)。北で44°東に振れる。柱掘り方40～60cmの円形。深さ16～20cm。柱痕跡直径７～10cm。
SD2456	第17図	Ⅳ	古代		幅40～110cm、長さ2.5m、深さ18cm。東西方向。
SD2457	第17図	Ⅳ	古代	SI2462→ →SD2458・SK2482	幅10～90cm、長さ4.4m以上。深さ11cm。断面皿状。西で30°北側に振れる。
SD2458	第17図	Ⅳ	古代	SD2457・SK2481・SK2483・SI2462→	幅30～50cm、深さ10cm。
SI2459	第20図	Ⅳ	古代	SK2484→ →SK2478	幅3.9m以上、長さ4.1m、壁高は15cm、方形。真北方向。南西隅にカマドを確認。床面と周囲に柱穴を確認。
SI2460	第21図	Ⅳ	古代		突出部をもつ長方形。幅2.3m、長さ突出部無しで3.3m、突出部を入れて4.2m以上、壁高は６cm。真北方向。カマドの有無は不明。床面と周囲に柱穴を確認。
SI2461	第21図	Ⅳ	古代	→SK2475	竪穴状遺構。幅1.2m、長さ1.4m、壁高は12cm、方形。真北方向。カマドの有無は不明。
SI2462	第21図	Ⅳ	古代	→SD2457・SD2458・SK2482	竪穴状遺構。幅1.3m以上、長さ1.4m以上、壁高は22cm、歪な隅丸長方形。ほぼ真北方向。
SI2463	第22図	Ⅴ	古代	SK2489→ →SA2149	幅2.9m、長さ3.4m、壁高は22cm、方形。東壁にカマドを確認。東壁が北で東に10°振れる。
SK2464	第27図	Ⅳ	古代		幅50cm、長さ100cm以上、深さ20cm、不整形。
SK2465	第27図	Ⅳ	古代		幅110cm、長さ170cm。不整形。深さ10cm。西で12°北側に振れる。
SK2466		Ⅳ	古代	SK2467→ →SX2490	幅100cm以上、長さ100cm以上。楕円形。
SK2467		Ⅳ	古代	→SK2466・SX2490	幅100cm、長さ120cm。楕円形。
SK2468	第27図	Ⅳ	古代	→SX2490	幅100cm以上、長さ290cm、深さ10cm、不整形。北で東に52°振れる。
SK2469	第27図	Ⅳ	古代		幅40cm、長さ60cm以上。楕円形。
SK2470	第27図	Ⅳ	古代		幅60cm、長さ80cm以上。歪な楕円形。
SK2471	第27図	Ⅳ	古代		幅100cm、長さ110cm。不整形。
SK2472	第27図	Ⅳ	古代		幅40cm、長さ60cm。楕円形。
SK2473	第27図	Ⅳ	古代		幅100cm、長さ110cm。不整形。
SK2474	第27図	Ⅳ	古代		幅70cm、長さ100cm。楕円形。
SK2475	第27図	Ⅳ	古代	SI2461→	幅100cm、長さ160cm。不整形。
SK2476	第27図	Ⅳ	古代		幅100cm、長さ150cm。不整形。
SK2477	第27図	Ⅳ	古代	→SB2065・SA2455	幅140cm、長さ150cm。不整形。
SK2478	第27図	Ⅳ	古代	SK2484・SI2459→	幅130cm、長さ180cm。楕円形。深さ８cm。
SK2479	第27図	Ⅳ	古代		幅120cm、長さ220cm。不整形。深さ６cm。北で85°東に振れる。

表５　第108次調査地検出遺構一覧（２）

遺構No.	図面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備　　考
SK2480	第27図	Ⅳ	古代	SB2065→	直径50cmの歪な円形。深さ28cm。
SK2481	第28図	Ⅳ	古代	→SD2458	幅70cm、長さ120cm。楕円形。
SK2482	第28図	Ⅳ	古代	SI2462・SD2457→	幅50cm以上、長さ150cm以上。楕円形。深さ10cm。
SK2483	第28図	Ⅳ	古代	→SD2458	幅50cm以上、長さ150cm以上。楕円形。深さ17cm。
SK2484	第20図	Ⅳ	古代	→SI2459・SK2478	深さ20cm、平面形状は不明。
SK2485	第28図	Ⅳ	古代		幅80cm以上、長さ80cm以上。楕円形。
SK2486	第28図	Ⅳ	古代	SI2462→	幅70cm、長さ140cm。歪な楕円形。
SK2487	第28図	Ⅳ	古代		幅164cm、長さ180cm。歪な隅丸方形。
SK2488	第28図	Ⅳ	古代	SX2497→	幅80cm、長さ180cm。楕円形。深さ８cm。
SK2489	第28図	Ⅴ	古代	→SI2463	幅90cm、長さ110cm、深さ12cm、楕円形。
SX2169	第31図	Ⅳ	古代		幅90～110cm、長さ390cm、深さ44cm、不整形。西で北に86°振れる。
SX2490	第31図	Ⅳ	古代	SK2466・SK2467・SK2468→	幅120cm、長さ300cm、深さ21cm、不整形。北で東に52°振れる。
SX2491	第31図	Ⅳ	古代		幅150cm、長さ230cm以上、深さ12cm、不整形。北で東に27°振れる。
SX2492	第31図	Ⅳ	古代		幅170cm、長さ270cm、深さ21cm、不整形。北で東に36°振れる。
SX2493	第31図	Ⅳ	古代		幅60cm以上、長さ240cm以上。不整形。
SX2494	第32図	Ⅳ	古代		幅130cm、長さ280cm。不整形。深さ20cm。西で８°北側に振れる。
SX2495	第32図	Ⅳ	古代	SX2496→	幅150cm、長さ230cm。不整形。深さ８cm。西で10°北側に振れる。
SX2496	第32図	Ⅳ	古代	→SX2495	幅110cm、長さ220cm。不整形。深さ８cm。西で24°北側に振れる。
SX2497	第33図	Ⅳ	古代	→SK2488	幅180～210cm、長さ460cm、深さ21cm、不整形。北で９°東側に振れる。
SD2498	第37図	Ⅳ	古代		幅130cm、長さ160cm、深さ18cm。東西方向。
SD2499	第37図	Ⅳ	古代		幅160cm、長さ180cm、深さ12cm。西で北に25°振れる。

表６　第108次調査地出土遺物属性表（１）

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 層位	グリッド	種　別	器　種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備　　考
10-386	第9図1	図版14-1	SD2450埋土	Ⅲ層	須恵器	壺 (転用硯)	－	10.4	－	底部内面を硯に転用。底部切り離し不明、底部立ち上がり部分回転ヘラケズリ調整。
10-387	第9図2	図版14-2	SD2450埋土	Ⅲ層	土師器	坏	－	－	－	体部外面「寺」の墨書、内面黒色処理とミガキ調整。
10-388	第9図3	図版14-3	SD2450埋土	Ⅲ層	土製品	羽口	－	－	－	
10-389	第9図4	図版14-4	SD2450埋土	Ⅲ層	陶器	碗	－	－	－	近世の灰釉陶器。
10-390	第9図5	図版14-5	SD2450埋土	Ⅲ層	磁器	皿	10.2	－	－	染付、肥前系磁器。内面に草花を染付ける。肥前Ⅴ期。
10-391	第11図1	図版14-6	SK2452埋土	Ⅲ層	須恵器	甕 (転用硯)	－	－	－	内面を硯に転用している。内外面平行の叩き目痕。
10-392	第14図1	図版14-7	SB2065P6 掘り方埋土	Ⅳ層	須恵器	坏	－	(10.0)	－	底部切り離し不明。
10-393	第14図2	図版14-8	SB2065P6 抜き取り埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	10.4	－	－	
10-394	第14図3	図版14-9	SB2065P5 抜き取り埋土	Ⅳ層	鉄製品	鏃	－	－	－	残存長66.8㎜。茎部分欠損。
10-395	第14図4	図版14-10	SB2454P5埋土	Ⅳ層	鉄製品	不明	－	－	－	
10-396	第16図1	図版14-11	SA2455P2 抜き取り埋土	Ⅳ層	土師器	甕	(16.6)	－	－	
10-397	第18図1	図版14-12	SD2456埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	13.0	－	－	口縁部被熱、内外面に煤状炭化物付着。
10-398	第18図2	図版14-13	SD2458埋土	Ⅳ層	鉄製品	不明	－	－	－	
10-399	第19図1	図版14-14	SD2456埋土	Ⅳ層	瓦	丸瓦	－	－	－	凸面ナデ調整。凹面布目圧痕。橙色。軟質。やや焼成不良。
10-400	第23図1	図版14-15	SI2459埋土	Ⅳ層	須恵器	壺	－	－	－	
10-401	第23図2	図版14-16	SI2459埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	10.1	5.6	3.3	底部回転糸切り無調整、内外面に煤状炭化物付着。
10-402	第23図3	図版14-17	SI2459埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	10.7	5.2	2.7	底部回転糸切り無調整。内外面に煤状炭化物付着。
10-403	第23図4	図版15-1	SI2459埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	台付皿	－	高台径 6.0	－	
10-404	第23図5	図版15-2	SI2459 カマド構築土	Ⅳ層	土師器	甕	19.0	－	－	頸部外面に２条の沈線、内面ハケメ調整。
10-405	第23図6	図版15-3	SI2459 カマド構築土	Ⅳ層	土師器	甕	－	8.4	－	内面ハケメ調整、底部木葉痕。
10-406	第23図7	図版15-4	SI2459 カマド構築土	Ⅳ層	土師器	甕	－	8.5	－	体部内外面ハケメ調整。
10-407	第23図8	図版15-5	SI2459 カマド埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	長胴甕	17.8	－	(38.0)	丸底砲弾型長胴甕。内外面ロクロ利用のカキ目調整。内面体部下半ハケメ調整。
10-408	第24図1	図版16-1	SI2459 カマド構築土	Ⅳ層	赤褐色土器	長胴甕	20.3	－	(44.0)	丸底砲弾型長胴甕。内外面上半部ロクロ利用のカキ目調整、下半部ハケメ調整。外面にケズリ調整。
10-409	第25図1	図版17-1	SI2459 カマド構築土	Ⅳ層	瓦	平瓦	－	－	－	一枚作り。凸面縄目の叩き痕、凹面は布目圧痕。暗灰色。硬質。焼成堅緻。
10-410	第25図2	図版17-2	SI2459 カマド構築土	Ⅳ層	瓦	平瓦	－	－	－	凸面は格子目の叩き痕、凹面は布目圧痕。黄灰色。硬質。焼成堅緻。
10-411	第24図2	図版16-2	SI2460埋土	Ⅳ層	土師器	台付坏	6.8	－	－	内面黒色処理、内面ミガキ調整。底部に菊花状工具痕がみられる。
10-412	第24図3	図版16-3	SI2460埋土	Ⅳ層	赤褐色土器		－	5.0	－	底部回転糸切り無調整。
10-413	第24図4	図版16-4	SI2460埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	小型甕	－	5.6	－	平底小型甕。底部外面立ち上がり部分回転ヘラケズリ後、底部回転糸切り無調整。内外面に煤状炭化物付着。
10-414	第24図5	図版16-5	SI2460埋土	Ⅳ層	土製品	土錘	－	－	－	残存長5.2cm、幅1.1cm。
10-415	第24図6	図版16-6	SI2460埋土	Ⅳ層	土製品	土錘	－	－	－	長さ4.8cm、幅2.0cm。
10-416	第24図7	図版16-7	SI2460 床面直上	Ⅳ層	鉄製品	鏃	－	－	－	残存長37.1㎜。茎部分。
10-417	第24図8	図版16-8	SI2460 P5埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	11.6	5.1	4.3	底部回転糸切り無調整、被熱、内面に煤状炭化物。
10-418	第24図9	図版16-9	SI2461埋土	Ⅳ層	須恵器	甕	－	－	－	内面平行当て具、外面平行叩き痕。
10-419	第24図10	図版16-10	SI2461埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	皿	15.0	－	－	外面に煤状炭化物。
10-420	第26図1	図版16-11	SI2462埋土	Ⅳ層	須恵器	坏	12.0	－	－	
10-421	第26図2	図版16-12	SI2462埋土	Ⅳ層	土師器	甕	－	8.0	－	底部外面立ち上がり部分ハケメ調整。
10-422	第26図3	図版16-13	SI2462埋土	Ⅳ層	鉄製品	鏃	－	－	－	残存長48.6㎜。茎部分。
10-423	第26図4	図版16-14	SI2463埋土	Ⅴ層	須恵器	壺	－	12.0	－	体部下半手持ちヘラケズリ後、体部中央回転ヘラケズリ。
10-424	第26図5	図版17-3	SI2463埋土	Ⅴ層	土師器	甕	－	－	－	
10-425	第26図6	図版17-4	SI2463埋土	Ⅴ層	赤褐色土器	坏	－	6.6	－	底部回転糸切り無調整。内面に漆付着。

表７　第108次調査地出土遺物属性表（２）

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 層位	グリッド	種　別	器　種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備　　考
10-426	第26図7	図版17-5	SI2463床面	Ⅴ層	赤褐色土器	坏	－	6.4	－	底部回転糸切り無調整。
10-427	第26図8	図版17-6	SI2463床面	Ⅴ層	赤褐色土器	坏	－	6.4	－	底部回転糸切り無調整。内外面に煤状炭化物付着。
10-428	第26図9	図版18-1	SI2463埋土	Ⅴ層	赤褐色土器	坏	13.2	4.5	4.0	底部回転糸切り無調整。
10-429	第26図10	図版18-2	SI2463埋土	Ⅴ層	赤褐色土器	鍋	30.0	－	－	
10-430	第26図11	図版18-3	SI2463 カマド埋土	Ⅴ層	土師器	甕	－	11.0	－	内外面ハケメ調整。
10-431	第29図1	図版18-4	SK2464埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	17.0	－	－	被熱、内外面に煤上炭化物付着。
10-432	第29図2	図版18-5	SK2464埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	13.2	5.3	4.1	底部回転糸切り無調整。
10-433	第29図3	図版18-6	SK2464埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	－	6.2	－	底部回転糸切り無調整。
10-434	第29図4	図版18-7	SK2464埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	－	6.4	－	底部回転糸切り無調整。
10-435	第29図5	図版18-8	SK2465埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	12.0	5.0	4.8	底部回転糸切り無調整。
10-436	第29図6	図版18-9	SK2465埋土	Ⅳ層	縄文土器	深鉢	－	－	－	粗製深鉢。LR単節縄文。
10-437	第29図7	図版18-10	SK2468埋土	Ⅳ層	土師器	甕	15.8	－	－	体部外面ハケメ調整。
10-438	第29図8	図版18-11	SK2471埋土	Ⅳ層	土製品	羽口	－	－	－	
10-439	第29図9	図版18-12	SK2475埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	－	4.6	－	底部回転糸切り無調整。
10-440	第29図10	図版18-13	SK2478埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	－	6.6	－	底部回転糸切り無調整。
10-441	第29図11	図版18-14	SK2480埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	13.3	5.4	4.7	底部回転糸切り無調整、被熱している。
10-442	第29図12	図版18-15	SK2480埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	12.4	5.6	4.6	底部回転糸切り無調整。
10-443	第29図13	図版18-16	SK2481埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	台付坏	－	高台径 8.8	－	底部回転糸切り無調整の後高台貼り付け。
10-444	第29図14	図版18-17	SK2484埋土	Ⅳ層	土師器	甕	16.0	－	－	頸部に縦方向のハケメ調整後、横走沈線を数条を施す。
10-445	第29図15	図版18-18	SK2484埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	－	5.4	－	底部回転糸切り無調整、被熱している。
10-446	第30図1	図版18-19	SK2468埋土	Ⅳ層	瓦	丸瓦	－	－	－	凸面は縄目叩き後ナデ調整。凹面は布目圧痕。橙色。軟質。焼成やや不良。分割沈線が認められる。
10-447	第34図1	図版19-1	SX2169底面	Ⅳ層	須恵器	大甕	－	－	－	内面同心円当て具痕、外面平行叩き痕。
10-448	第34図2	図版19-2	SX2169埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	蓋	17.4	－	－	内面煤状炭化物付着。
10-449	第34図3	図版19-3	SX2490埋土	Ⅳ層	須恵器	坏	13.0	－	－	
10-450	第34図4	図版19-4	SX2491埋土	Ⅳ層	須恵器	坏	(14.8)	－	－	
10-451	第34図5	図版19-5	SX2491埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	－	6.8	－	底部回転糸切り無調整。
10-452	第34図6	図版19-6	SX2491埋土	Ⅳ層	鉄製品	不明鉄製品	－	－	－	
10-453	第34図7	図版20-1	SX2492底面	Ⅳ層	土師器	坏	－	－	－	内面黒色処理、内面ミガキ調整。
10-454	第34図8	図版20-2	SX2492底面	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	12.4	5.2	4.6	底部回転糸切り無調整。
10-455	第34図9	図版20-3	SX2494埋土	Ⅳ層	土師器	甕	－	－	－	
10-456	第34図10	図版20-4	SX2494埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	－	－	－	
10-457	第35図1	図版20-5	SX2494埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	小型甕	－	8.4	－	平底小型甕。体部下半横方向手持ちヘラケズリ。
10-458	第35図2	図版20-6	SX2494埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	小型甕	－	10.8	－	平底小型甕。底部立ち上がり部分手持ちヘラケズリ。
10-459	第35図3	図版20-7	SX2494埋土	Ⅳ層	石製品	磨石	－	－	－	泥岩製。表面が研磨されている。
10-460	第35図4	図版20-8	SX2494埋土	Ⅳ層	鉄製品	不明鉄製品	－	－	－	
10-461	第35図5	図版20-9	SX2495埋土	Ⅳ層	礫	金床石ヵ	－	－	－	安山岩。被熱している。
10-462	第35図6	図版20-10	SX2496埋土	Ⅳ層	須恵器	坏	12.4	－	－	
10-463	第35図7	図版20-11	SX2496埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	－	6.0	－	底部回転糸切り無調整。
10-464	第35図8	図版20-12	SX2496埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	小型甕	15.4	－	－	平底小型甕。体部下半縦方向手持ちヘラケズリ。
10-465	第35図9	図版20-13	SX2496埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	小型甕	－	8.8	－	平底小型甕。被熱している。
10-466	第35図10	図版20-14	SX2496埋土	Ⅳ層	鉄製品	鏃	－	－	－	残存長83㎜。先端部分欠損。
10-467	第35図11	図版20-15	SX2497埋土	Ⅳ層	赤褐色土器	坏	12.6	4.6	3.6	底部回転糸切り無調整。
10-468	第35図12	図版20-16	SX2497埋土	Ⅳ層	土製品	羽口	－	－	－	
10-469	第35図13	図版20-17	SX2497埋土	Ⅳ層	鉄製品	不明鉄製品	－	－	－	
10-470	第36図1	図版20-18	SX2490埋土	Ⅳ層	瓦	丸瓦	－	－	－	凸面はナデ調整。凹面は布目圧痕。橙色。焼成やや不良。軟質。分割沈線が認められる。
10-471	第36図2	図版20-19	SX2494埋土	Ⅳ層	瓦	平瓦	－	－	－	凸面は縄目の叩き痕、凹面は布目圧痕。灰黄色。焼成良好。やや硬質。被熱している。
10-472	第36図3	図版20-20	SX2494埋土	Ⅳ層	瓦	平瓦	－	－	－	凸面は縄目の叩き痕、凹面は布目圧痕。灰黄色。焼成良好。やや硬質。被熱している。
10-473	第38図1	図版21-1	Ⅰ層	－	須恵器	台付坏 (転用硯)	－	高台径 8.2	－	底部回転ヘラ切り後、台部貼付。底部外面に「長」墨書、底部内面を硯に転用。
10-474	第38図2	図版21-2	Ⅰ層	－	赤褐色土器	坏	－	4.2	－	底部回転糸切り無調整、内面に漆付着。
10-475	第38図3	図版21-3	Ⅰ層	－	土製品	羽口	－	－	－	
10-476	第38図4	図版21-4	Ⅰ層	－	陶器	皿	－	－	－	志野丸皿ヵ。
10-477	第38図5	図版21-5	Ⅰ層	－	磁器	猪口	－	－	－	染付、肥前系磁器。内面に草花を染付ける。底部は蛇ノ目凹形高台。肥前Ⅴ期。

表８　第108次調査地出土遺物属性表（３）

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 層位	グリッド	種　別	器　種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備　　考
10-478	第38図6	図版21-6	Ⅰ層	NG71 NG72	赤褐色土器	坏	－	－	－	体部外面に判読不明の墨書あり。
10-479	第38図7	図版21-7	Ⅰ層	NH70	鉄製品	不明鉄製品	－	－	－	
10-480	第38図8	図版21-8	Ⅱ層	NE73	須恵器	甕 (転用硯)	－	－	－	内面を硯に転用。
10-481	第38図9	図版21-9	Ⅱ層	ND75	磁器	皿	14.4	8.8	3.4	染付、肥前系磁器、内外面に草花を染付ける。蛇ノ目凹形高台。肥前Ⅴ期。
10-482	第38図10	図版21-10	Ⅲ層	NG68	須恵器	坏	－	7.0	－	底部回転糸切り後、周縁部ケズリ調整。
10-483	第38図11	図版21-11	Ⅲ層	NG72	須恵器	坏 (転用硯)	8.4	－	－	底部回転ヘラ切り。底部内面を硯に転用。
10-484	第38図12	図版21-12	Ⅲ層	NF68 NH72	須恵器	甕	22.0	－	－	
10-485	第38図13	図版21-13	Ⅲ層	ND71	土師器	坏	－	6.4	－	内面に漆付着、底部回転糸切り無調整。
10-486	第38図14	図版21-14	Ⅲ層	NG72	土師器	碗	－	5.0	－	内外面黒色処理、外面体部上半ミガキ調整、内面ミガキ調整。
10-487	第38図15	図版21-15	Ⅲ層	NF75	赤褐色土器	坏	12.2	5.0	4.2	底部回転糸切り無調整。
10-488	第38図16	図版21-16	Ⅲ層	NG71 NI71	赤褐色土器	坏	－	6.0	－	内面に漆付着、底部回転糸切り無調整。
10-489	第38図17	図版21-17	Ⅲ層	NG71 NI71	赤褐色土器	坏	－	－	－	内面に漆付着、底部回転糸切り無調整。
10-490	第38図18	図版21-18	Ⅲ層	ND71	赤褐色土器	坏	－	－	－	底部回転糸切り無調整、底部外面に判読不明墨書。
10-491	第38図19	図版21-19	Ⅲ層	NC74	土製品	土錘	－	－	－	被熱している。
10-492	第38図20	図版21-20	Ⅲ層	ND69	土製品	土錘	－	－	－	
10-493	第38図21	図版21-21	Ⅲ層	ND64	土製品	土錘	－	－	－	
10-494	第39図1	図版22-1	Ⅲ層	ND69	土製品	羽口	－	－	－	
10-495	第39図2	図版22-2	Ⅲ層	ND73	石製品	砥石	－	－	－	凝灰岩製。携げ砥石。４面を使用。
10-496	第39図3	図版22-3	Ⅲ層	ND72	石製品	砥石	－	－	－	凝灰岩製。６面を使用。
10-497	第39図4	図版22-4	Ⅲ層	NF74	鉄製品	鏃	－	－	－	残存長91.8mm。頭部欠損。
10-498	第39図5	図版22-5	Ⅲ層	NG73	鉄製品	鏃	－	－	－	残存長69.8mm。頭部欠損。
10-499	第39図6	図版22-6	Ⅲ層	NE74	鉄製品	不明鉄製品	－	－	－	
10-500	第39図7	図版22-7	Ⅲ層	NK72	鉄製品	不明鉄製品	－	－	－	
10-501	第39図8	図版22-8	Ⅲ層	NG71 NI71	鉄製品	不明鉄製品	－	－	－	
10-502	第39図9	図版22-9	Ⅲ層	ND68	鉄製品	不明鉄製品	－	－	－	
10-503	第39図10	図版22-10	Ⅲ層	ND70	鉄製品	不明鉄製品	－	－	－	
10-504	第39図11	図版22-11	Ⅲ層	NF71	石製品	磨製石斧	－	－	－	粗粒玄武斑岩製。敲打後に部分的に研磨。刃部は破損している。
10-505	第39図12	図版22-12	Ⅲ層	NF73	陶器	甕	－	－	－	
10-506	第39図13	図版22-13	Ⅲ層	NE74	磁器	碗	－	4.0	－	染付。肥前系磁器。
10-507	第39図14	図版22-14	Ⅳ層	NG70	須恵器	坏	10.0	13.5	3.1	底部回転ヘラ切り後ナデ調整。
10-508	第39図15	図版22-15	Ⅳ層	NF72	須恵器	坏	13.3	8.8	3.8	底部回転ヘラ切り後ナデ調整。
10-509	第39図16	図版22-16	Ⅳ層	NF68	須恵器	坏	13.5	8.0	4.3	底部回転糸切り後軽いナデ調整。
10-510	第39図17	図版22-17	Ⅳ層	NF73	須恵器	坏	－	8.7	－	底部回転糸切り無調整。
10-511	第39図18	図版22-18	Ⅳ層	NF68	須恵器	坏	－	8.0	－	底部回転ヘラ切り後ナデ調整。
10-512	第39図19	図版22-19	Ⅳ層	NF68	須恵器	坏	－	9.2	－	底部回転糸切り後、底部周縁にケズリ調整。底部外面に判読不明の墨書あり。
10-513	第40図1	図版22-20	Ⅳ層	NF71	須恵器	台付坏	13.6	8.5	4.3	ヘラ切り後ナデ調整。平行の圧痕が付着。その後高台貼付。
10-514	第40図2	図版22-21	Ⅳ層	NC75	須恵器	台付坏 (転用硯)	－	高台径 8.0	－	内面を硯に転用。
10-515	第40図3	図版23-1	Ⅳ層	NC75	赤褐色土器	坏	－	－	－	体部外面に判読不明の墨書あり。
10-516	第40図4	図版23-2	Ⅳ層	NG67	赤褐色土器	甕	12.0	－	－	内外面ロクロ利用のカキ目調整。
10-517	第40図5	図版23-3	Ⅳ層	NH71	石製品	砥石	－	－	－	凝灰岩製。携げ砥石。石製紡錘車を転用ヵ。
10-518	第40図6	図版23-4	Ⅳ層	NG74	礫	金床石ヵ	－	－	－	花崗岩。被熱している。
10-519	第40図7	図版23-5	Ⅳ層	NG73	鉄製品	鏃	－	－	－	茎部分。
10-520	第40図8	図版23-6	Ⅳ層	NF75	鉄製品	鏃	－	－	－	茎部分。
10-521	第40図9	図版23-7	Ⅳ層	NF68	鉄製品	鏃	－	－	－	
10-522	第40図10	図版23-8	Ⅳ層	NF68	鉄製品	鏃	－	－	－	
10-523	第40図11	図版23-9	Ⅳ層	NG68	鉄製品	刀子	－	－	－	
10-524	第40図12	図版23-10	Ⅳ層	NH75	鉄製品	不明鉄製品	－	－	－	
10-525	第40図13	図版23-11	Ⅳ層	ND70	鉄製品	不明鉄製品	－	－	－	
10-526	第40図14	図版23-12	Ⅳ層	NE73	鉄製品	刀子	－	－	－	刃部。
10-527	第40図15	図版23-13	Ⅳ層	NH71	弥生土器	鉢	－	－	－	
10-528	第40図16	図版23-14	Ⅳ層	NH72	石器	石鏃	－	－	－	珪質頁岩製。長さ37.5mm、幅17.4mm、厚さ0.41mm。
10-529	第40図17	図版23-15	Ⅳ層	NF71	瓦	平瓦	－	－	－	凸面は格子目のタタキ、凹面は布目圧痕。橙色。焼成やや良好。糸切り方向右下から左上。

Ⅲ　第 109 次調査報告

１　調査経過

第 109 次調査は焼山地区北西部を対象に、平成 29 年９月 21 日から 10 月６日まで調査を実施した。調査面積は 41 ㎡である。

第 109 次調査地は焼山地区北西部にあたり、周辺の調査で、古代秋田城の城外西大路、中世の材木塀跡が検出されている（第 41 図）。特に 106 次調査Ｂ区では、13 世紀末～15 世紀中葉の珠洲系中世陶器が出土しており、中世後期にも利用されていることがわかった。このような古代秋田城の城外西大路や中世後期における利用の実体解明が必要であり、調査を行った。

調査は基準杭測量、調査区の設定後、重機による第Ⅰ層表土の除去を行った（９月 21 日）。その後、手掘りにより第Ⅰ層表土除去、第Ⅱ層を検出し、精査を行った（９月 22 日）。その結果、第Ⅱ層上面で SA2500・SA2501・SKP2504・SKP2505 を検出した。SKP2504 と SKP2505 は棟門となる可能性が考えられため、調査区東側へ１ｍ拡張した（９月 25 日）。また、調査区南側で落ち込みを発見したため、１ｍ×１ｍ拡張し、SA2502・SA2503 を検出した（９月 26 日）。必要な部分を半裁後、第Ⅱ層面検出遺構の記録化を行った（９月 27 日～10 月２日）。調査区西側にサブトレンチを設定し、１ｍ幅で第Ⅱ層面を除去し、第Ⅲ層面を検出し、SD2507・SD2508・SX2509 を検出した（10 月２日）。第Ⅲ層面検出遺構を半裁後、記録化を行い、さらに西側に 50 ㎝幅で第Ⅲ層面を除去し、第Ⅳ層面で SD2510・SX2511 を検出した（10 月３日）。第Ⅳ層面検出遺構の記録化後、調査区西側に 20 ㎝幅で第Ⅳ層面を除去し、第Ⅴ層地山粘土層もしくは第Ⅵ層地山砂礫層まで検出した（10 月４日）。最終調査状況での記録化を行い（10 月５日）、埋め戻しと共に機材を撤収し、調査を終了した（10 月６日、第 42・43 図）。

２　検出遺構と出土遺物

調査地からは材木塀跡４条、柱掘り方２基、溝跡３条、土塁１基、道路遺構２面が検出された（第 42～４５図）。各遺構は、第Ⅱ・Ⅲ～Ⅴ層面で検出されている。第Ⅱ層は中世後期、第Ⅲ～Ⅴ層は古代の遺構であると考えられる。以下、遺構が検出された各層ごとに遺構・遺物の記述を行う。

①第Ⅱ層面検出遺構と遺物

ＳＡ2500 材木塀跡（第 44 図、図版 10）

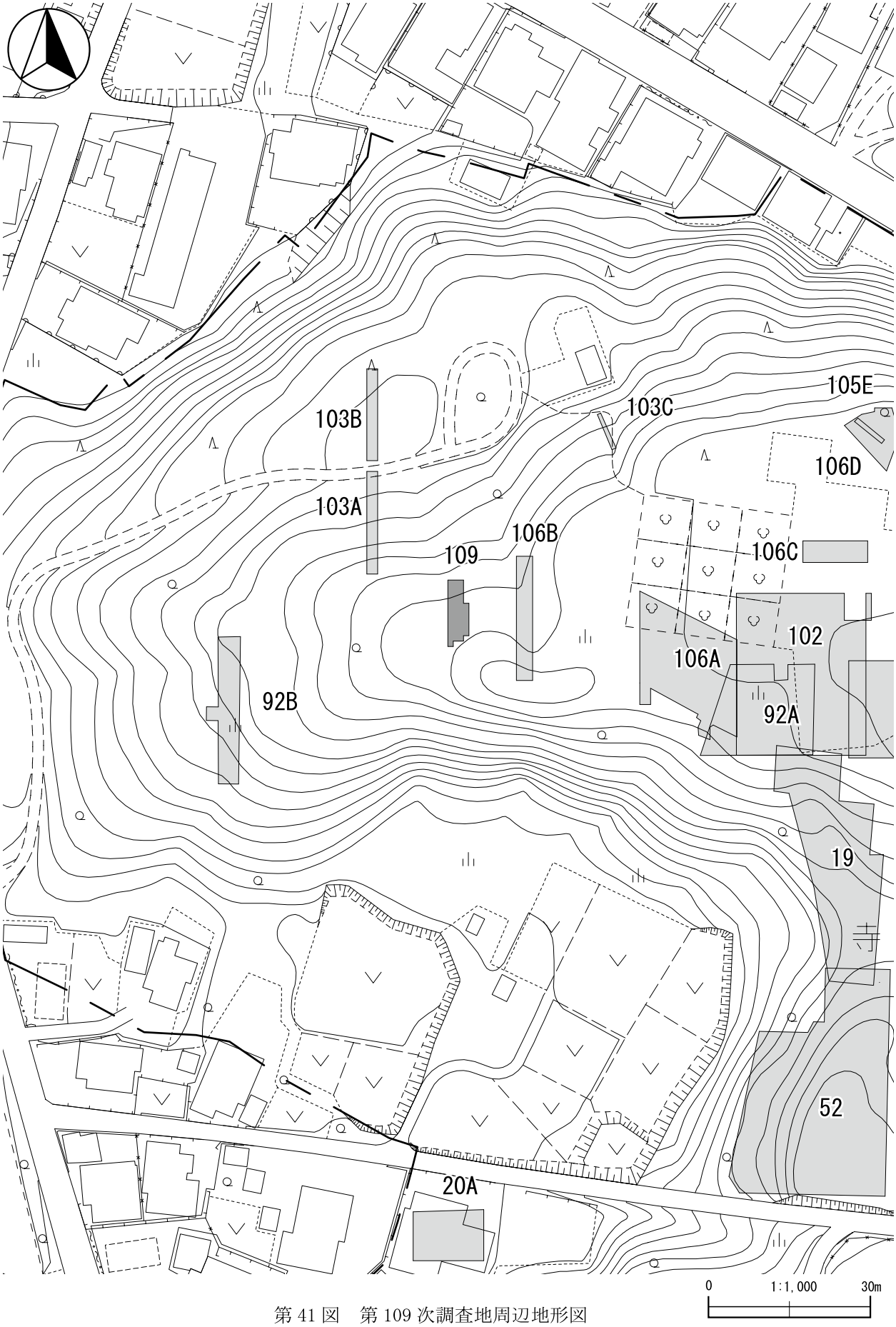
調査区の北側の第Ⅱ－３層面で検出された東西方向の区画施設である。調査区外の東西に延びる。布掘り溝は幅 30～38 ㎝、深さ 20 ㎝、長さ 2.6ｍ以上で、断面はＵ字状を呈し、直径 12～13 ㎝の柱痕跡が伴う。西で８°南に振れる。溝内に材木を立て並べた構造の材木塀と考えられる。

SA2501・SX2506 と重複し、これらより新しい。

ＳＡ2501 材木塀跡（第 44 図、図版 10・11）

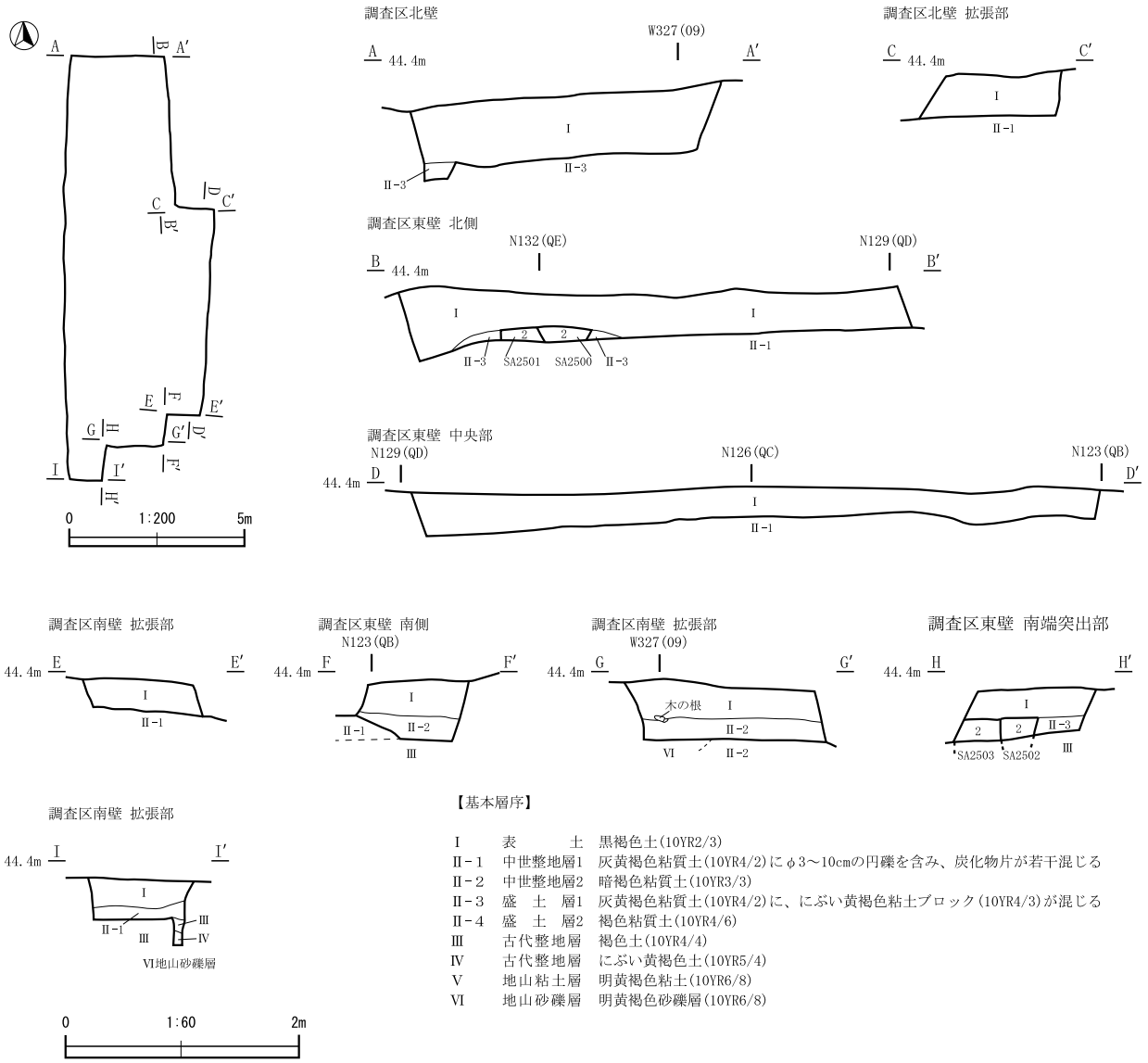
調査区北側の第Ⅱ－３層面で検出された東西方向の区画施設である。調査区外の東西に延びる。布掘り溝は幅 40 ㎝、深さ 20 ㎝、長さ 2.6ｍ以上で、断面はＵ字状を呈し、直径 10～13 ㎝の柱痕跡が伴う。西で 9°南に振れる。

SA2500・SX2506 と重複し、SX2506 より新しく、SA2500 より古い。



第 41 図　第 109 次調査地周辺地形図

第 42 図　109 次調査地検出遺構全体図



第 43 図　第 109 次調査地土層断面図

ＳＡ2502 材木塀跡（第 44 図、図版 11）

調査区南側の第Ⅱ－２層面で検出された東西方向の区画施設である。調査区外の東西方向に延びる。布掘り溝は幅 30 cm、深さ 15 cm、長さ 0.8m以上で、断面はU字状を呈し、直径 12 cmの柱痕跡が伴う。西で 9°北に振れる。

SA2503 と重複し、これより新しい。

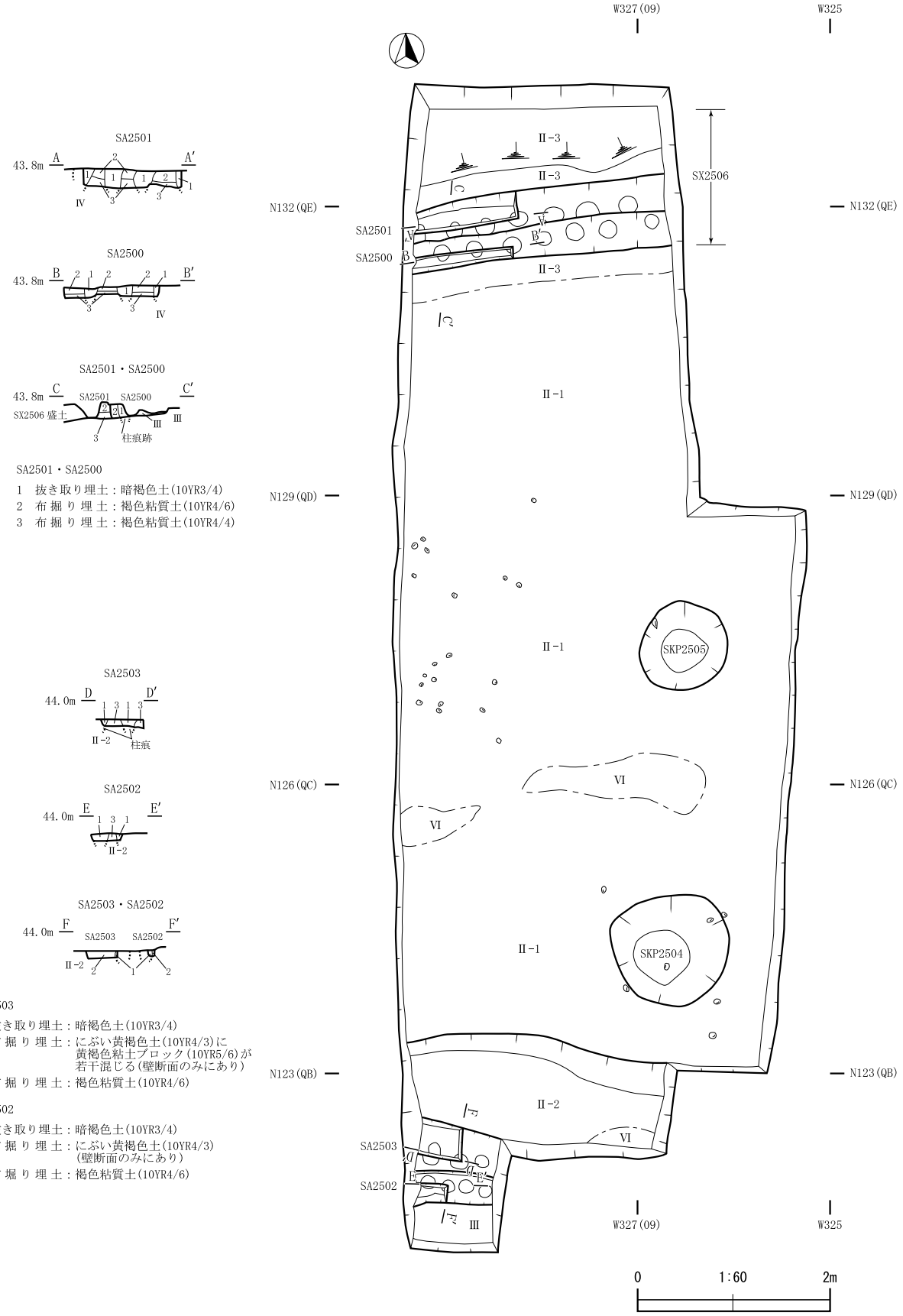
ＳＡ2503 材木塀跡（第 44 図、図版 11）

調査区南側の第Ⅱ－２層面で検出された東西方向の区画施設である。調査区外の東西方向に延びる。布掘り溝は幅 40～50 cm、深さ 15 cm、長さ 1.0m以上で、断面はU字状を呈し、直径 10 cmの柱痕跡が伴う。西で 10°北に振れる。

SA2502 と重複し、これより古い。

ＳＫＰ2504 柱掘り方（第 44 図、図版 11）

調査区中央部の第Ⅱ－１層面で検出された柱掘り方である。直径 90cm の円形を呈する。柱抜き取り痕が認



第 44 図　第 109 次調査地第Ⅱ層面検出遺構全体図

められるため、柱掘り方と認定した。

ＳＫＰ2504 柱掘り方出土遺物（第 46 図、図版 23）

陶器（第 46 図１）：掘り方埋土の上面から出土された。鉢（擂鉢ヵ）の口縁部破片である。越前産の可能性がある。

ＳＫＰ2505 柱掘り方（第 44 図、図版 11）

調査区中央部の第Ⅱ－１層面で検出された柱掘り方である。直径 120 ㎝の円形を呈する。柱抜き取り痕が認められるため、柱掘り方と認定した。

ＳＸ2506 土塁（第 44 図）

調査区北部で検出された。土塁構築面は第Ⅴ層地山粘土層面である。盛土部分は、第Ⅱ－３・第Ⅱ－４層で、厚さは 10～20 ㎝である。版築状の構築は認められなかった。

SA2500・SA2501・SD2507 と重複し、SD2507 より新しく、SA2500・SA2501 より古い。

②第Ⅲ層面検出遺構と遺物

ＳＤ2507 溝跡（第 45 図、図版 11）

調査区北側の第Ⅲ層面で検出された溝跡である。調査区外の東西方向に延びる。幅 30 ㎝、深さ 20 ㎝、長さ 0.5ｍ以上で、断面は皿状である。西で５°南に振れる。

ＳＤ2508 溝跡（第 45 図、図版 11）

調査区南側の第Ⅲ層面で検出された溝跡である。調査区外の東西方向に延びる。幅 40 ㎝、深さ 15 ㎝、長さ 1.0ｍ以上で、断面は皿状である。西で１°南に振れる。

ＳＸ2509 道路遺構（第 45 図）

調査区中央の第Ⅲ層である褐色土の硬化面からなる東西方向の道路遺構である。第Ⅲ層の層厚は、５～20 ㎝である。SD2507 溝跡が北側側溝、SD2508 溝跡が南側側溝と考えられ、これらによって区画されており、西で１～５°南に振れる。道路側溝間の距離は、道路側溝に直交する方向で計測すると溝芯々で約 8.0ｍである。調査区外の東西方向に延びる。発見された道路側溝の溝の深さから推定すると、第Ⅲ層は道路硬化面であるが、上部は削平を受けていると考えられる。

③第Ⅳ・Ⅴ層面検出遺構と遺物

ＳＤ2510 溝跡（第 45 図、図版 12）

調査区南側の第Ⅴ層面で検出された溝跡である。調査区外の東西方向に延びる。幅 40 ㎝、深さ 20 ㎝、長さ 0.3ｍ以上で、断面皿状である。西で４°南に振れる。

ＳＸ2511 道路遺構（第 45 図）

調査区中央の第Ⅳ層である褐色土の硬化面からなる東西方向の道路遺構と考えられる。第Ⅲ層の層厚は、５～20 ㎝である。SD2509 溝跡が北側側溝と考えられるが、南側側溝は調査区内では発見されなかった。道路

第 45 図　第Ⅲ層面・第Ⅳ層面検出遺構全体図

幅は 10.5m以上あると考えられる。

３　基本層序および各層出土遺物

調査地の現地形はほぼ平坦である。

第Ⅰ層　表土：現表土。黒褐色土(10YR2/3)。

第Ⅱ層　中世整地層：中世の整地層で、以下のように細分される。

第Ⅱ－１層　中世整地層１:灰黄褐色粘質土(10YR4/2)にφ3～10cm の円礫を含み、炭化物片が若干混じる。SKP2504、SKP2505 が検出された。

第Ⅱ－２層　中世整地層２：暗褐色粘質土(10YR3/3)。SA2502・SA2503 が検出された。

第Ⅱ－３層　盛土層１:灰黄褐色粘質土(10YR4/2)に、にぶい黄褐色粘土ブロック(10YR4/3)が混じる。SX2506 土塁の盛土。SA2500・SA2501 が検出された。

第Ⅱ－４層　盛土層２：褐色粘質土(10YR4/6)。SX2506 土塁の盛土。

第Ⅲ層　古代整地層：褐色土(10YR4/4)。しまりが強く、道路造成土であると考えられる。SD2507・SD2508 が検出された。SX2509 道路遺構を構成する造成土である。

第Ⅳ層　古代整地層：にぶい黄褐色土(10YR5/4)。しまりが強く、道路造成土であると考えられる。SD2510 が検出された。SX2511 道路遺構を構成する造成土である。

第Ⅴ層　地山粘土層：明黄褐色粘土(10YR6/8)。

第Ⅵ層　地山砂礫層：明黄褐色砂礫層(10YR6/8)。

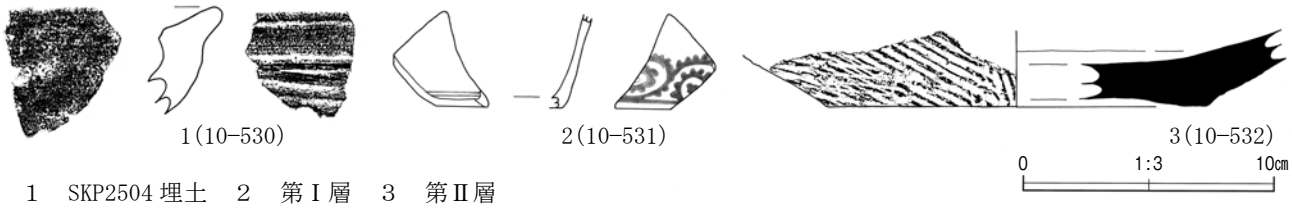
各層出土遺物

第Ⅰ層　出土遺物（第 46 図２・３、図版 23）

磁器（第 46 図２）：肥前系磁器染付碗で、内面に二重円圏文、外面に蛸唐草を染付ける。

第Ⅱ層　出土遺物（第 46 図６～13、図版 23）

陶器（第 46 図３）：珠洲系中世陶器。体部下端に平行の叩き痕が認められる。底面に砂が付着している。



1　SKP2504 埋土　2　第Ⅰ層　3　第Ⅱ層

第 46 図　第 109 次調査地出土遺物

表９　第109次調査地検出遺構一覧

遺構No.	図面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備　　考
SA2500	第44図	Ⅱ-3	中世	SA2501・SX2506→	幅30～38cm、深さ20cm、長さ2.6m以上、直径12～13cmの柱痕跡。東西方向。断面U字状。西で8°南に振れる。
SA2501	第44図	Ⅱ-3	中世	SX2506→ →SA2500	幅40cm、深さ20cm、長さ2.6m以上、直径10～13cmの柱痕跡。東西方向。断面U字状。西で9°南に振れる。
SA2502	第44図	Ⅱ-2	中世	SA2502→	幅30cm、深さ15cm、長さ0.8m以上、直径12cmの柱痕跡。東西方向。断面U字状。西で9°北に振れる。
SA2503	第44図	Ⅱ-2	中世	→SA2502	幅40～50cm、深さ15cm、長さ1.0m以上、直径10cmの柱痕跡。東西方向。断面U字状。西で10°北に振れる。
SKP2504	第44図	Ⅱ-1	中世		直径90cmの円形。
SKP2505	第44図	Ⅱ-1	中世		直径120cmの円形。
SX2506	第44図	Ⅴ	中世		第Ⅱ-3・Ⅱ-4層が盛土。盛土層は、10～20cm。
SD2507	第45図	Ⅲ	古代	→SX2506	幅30cm、深さ20cm、長さ0.5m以上。東西方向。断面皿状。西で5°南に振れる。
SD2508	第45図	Ⅲ	古代		幅40cm、深さ15cm、長さ1.0m以上。東西方向。断面皿状。西で1°南に振れる。
SX2509	第45図	Ⅲ	古代		道路幅8.0m。西で1～5°振れる。SD2507が北側側溝、SD2508が南側側溝。
SD2510	第45図	Ⅴ	古代		幅40cm、深さ20cm、長さ0.3m以上。東西方向。断面皿状。西で4°南に振れる。
SX2511	第45図	Ⅳ	古代		道路幅10.5m以上。SD2510が北側側溝か。

表10　第109次調査地出土遺物属性表

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点・層位	グリッド	種　別	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　　考
10-530	第46図1	図版23-16	SKP2504掘り方埋土	Ⅱ層	陶器	鉢(擂鉢ヵ)	-	-	-	越前産ヵ。
10-531	第46図2	図版23-17	Ⅰ層	QB08	磁器	碗	-	-	-	染付。肥前系磁器。内面二重円圏文、外面に蛸唐草を染付ける。肥前Ⅴ期。
10-532	第46図3	図版23-18	Ⅱ層	QB90	中世陶器	甕	-	-	-	珠洲系中世陶器。Ⅳ～Ⅴ期。底面に砂が付着している。体部下端に平行叩き痕。

Ⅳ　第 110 次調査報告

１　調査経過

第 110 次調査は焼山地区東部・大畑地区西部を対象に、平成 29 年 10 月 11 日から 10 月 31 日まで調査を実施した。調査面積は 44.5 ㎡である。

第 110 次調査は、Ａ～Ｃ区の３箇所の調査区を設定した。Ａ区は市道（旧国道）西の焼山地区側に５×８ｍの調査区を設定した。Ｂ・Ｃ区は市道東の大畑地区側（政庁側）に設定し、Ｂ区は１×２ｍ、Ｃ区は１×2.5ｍのトレンチとした（第 47 図）。

第 110 次調査Ａ区は、焼山地区東部である。周辺では、第 89 次調査で８世紀中頃～９世紀中葉の規則的な配置をもつ大型建物跡が検出され、焼山地区建物群の一部が当該地周辺まで展開することが判明している。また、当該地は、政庁西門が想定される位置から延びる城内西大路の推定位置にあたるが、第 89 次調査地では発見されなかった。こうしたことから、政庁西側で未検出の城内西大路を検出するため、推定位置に 110 次調査Ａ区を設定した。

第 110 次調査Ｂ区は、大畑地区西部、政庁西側である。周辺では、第 77 次調査で政庁域の掘立柱建物跡等が発見されている。明治時代の旧国道開削の際の斜面に政庁整地層が残されているか確認をするために、斜面にＢ・Ｃ区調査トレンチを設定した。

以上のように、第 110 次調査では、城内西大路の検出とともに、今後の整備・活用における基礎資料を得る目的で調査を行った。

調査は基準杭測量、調査区の設定を行い（10 月 11～12 日）、Ａ区において重機による第Ⅰ層表土の除去を行った（10 月 16 日）。その後、手掘りによりＡ区の第Ⅱ層を除去していった（10 月 17 日）。第Ⅲ層を検出した（10 月 18 日）。Ａ区の現況で土手状の高まりが存在しており、この第Ⅲ層がこの土手状高まりの本体部分に相当すると考えられた。一旦、この第Ⅲ層上面で記録化を行い（10 月 19 日）、その後、調査区の南側に幅 50 ㎝のサブトレンチを設定し第Ⅲ層を除去した（10 月 20 日）。その結果、第Ⅲ層は、第Ⅲ-１層と第Ⅲ-２層に細分され、これらの直下に第Ⅳ層地山腐植土層が検出され、第Ⅳ層を掘り込む形でヒューム管が埋設されていることが分かった。したがって、第Ⅲ-１・２層は近年の造成土であり、古代整地層や地山飛砂層は既に削平を受けて存在しておらず、旧地形は削平されていると判断した。サブトレンチおよび撹乱を除去した深掘り部分で、第Ⅳ層地山腐植土層、さらにその下層の第Ⅴ層地山粘土層が確認できたため、Ａ区の最終的な記録化を行い、Ａ区の調査を終了した（10 月 20 日）。次に、政庁西側のＢ・Ｃ区の調査に移り、手掘りにて第Ⅰ層～Ⅳ層を除去し、第Ⅴ層の古代整地層を確認した（10 月 24 日）。この第Ⅴ層古代整地層は、隣接の第 77 次調査では③層として報告されている古代整地層である。Ｂ・Ｃ地区の第Ⅴ層上面では遺構は確認できなかったが、Ｂ・Ｃ地区ではこの第Ⅴ層を検出した状態で、記録化を行った（10 月 26 日）。Ａ～Ｃ区の埋め戻し及び機材の撤収を行い、調査を終了した（10 月 31 日）。

２　基本層序および各層出土遺物

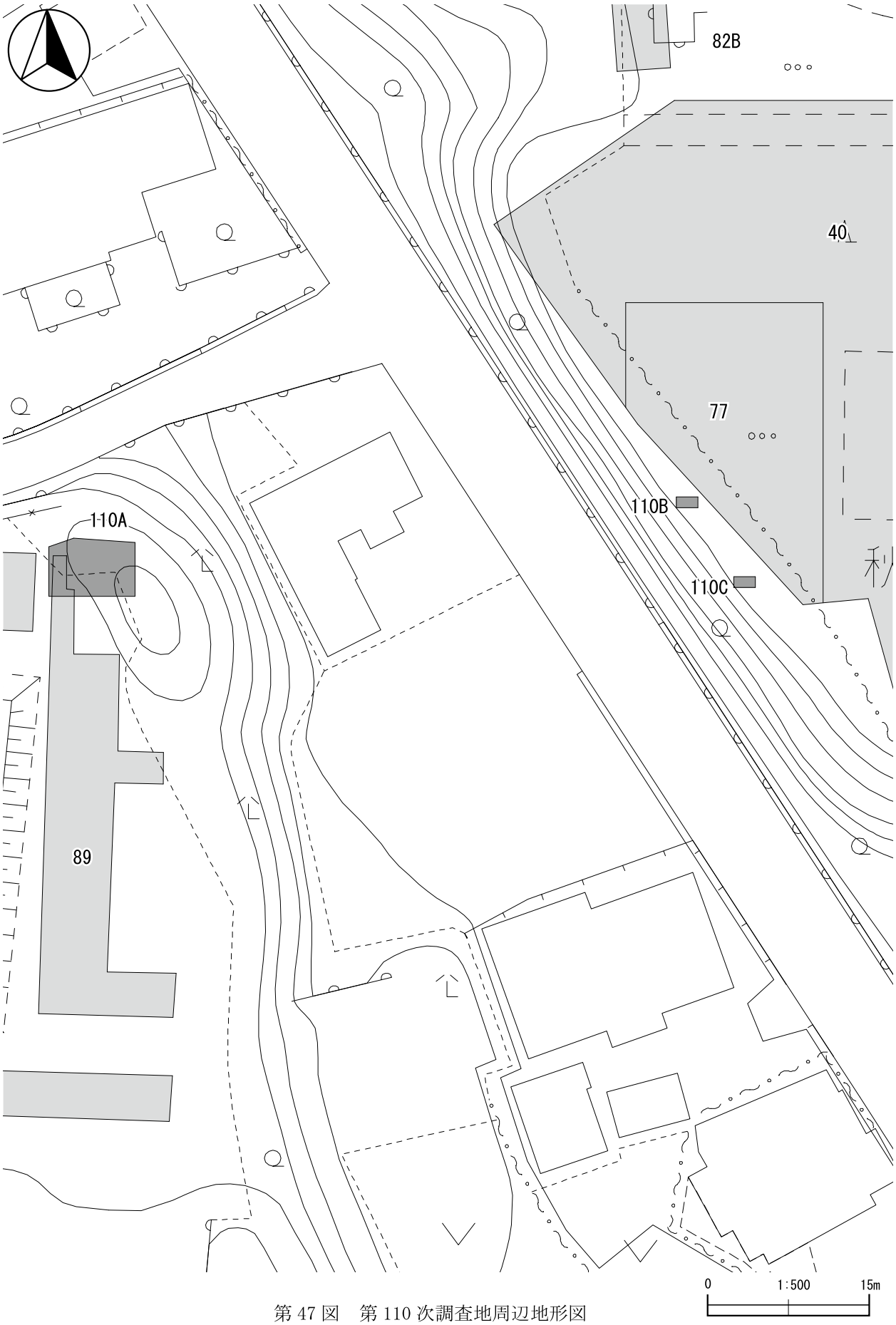
調査地からは古代の遺構は検出されなかった。第 110 次調査地の基本層序をまとめると以下のようになる。

①Ａ区（第 48・49 図）

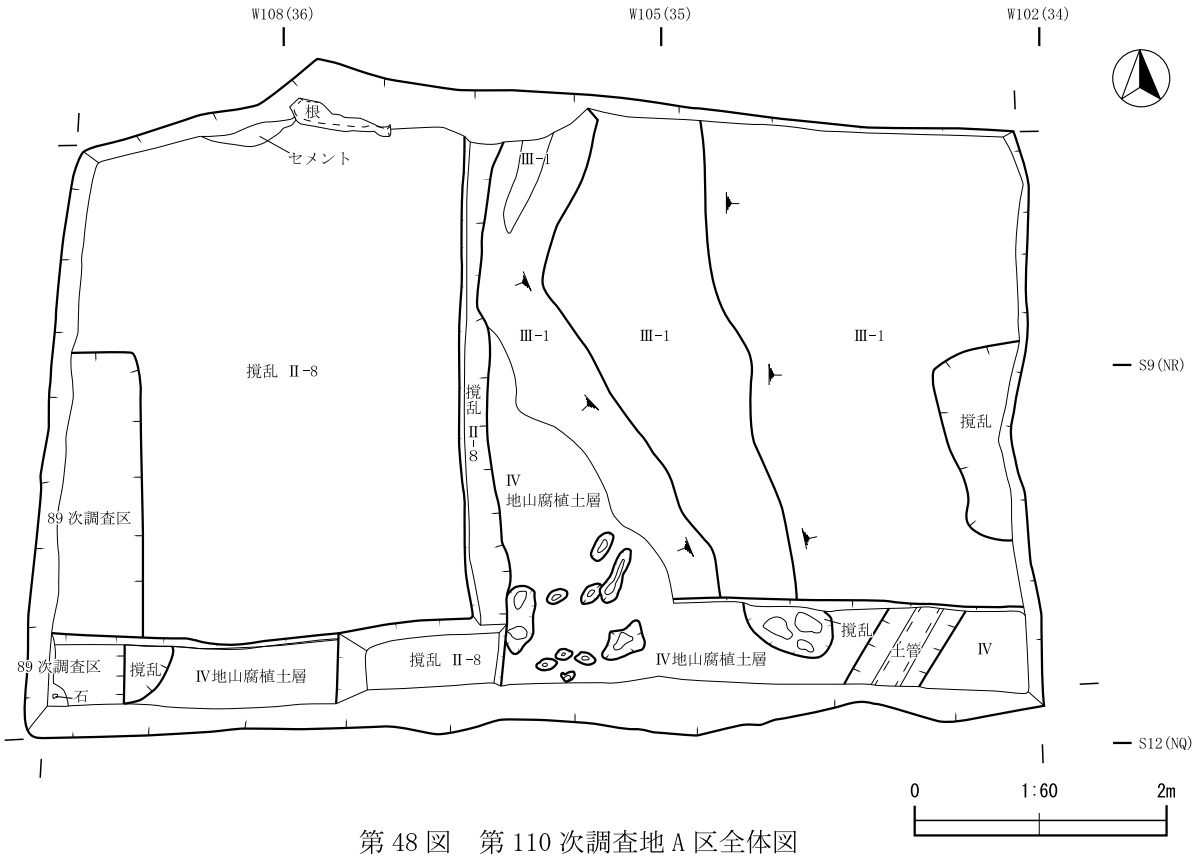
Ａ区は、現況で土手状高まりが存在していた。

第Ⅰ層　表土：現表土。暗褐色土(10YR3/3)に黄褐色粘土(10YR5/6)が混じる。

第Ⅱ層　造成土：第Ⅱ-１層（造成土：黒褐色土(10YR3/2)にφ2～5㎝の礫が混じる)、第Ⅱ-２層（造成土：



第 47 図　第 110 次調査地周辺地形図



第 48 図　第 110 次調査地 A 区全体図

黄褐色粘土(10YR5/6)に暗褐色土(10YR3/3)と、にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)とφ5～10cm の礫が混じる)、第Ⅱ－３層（造成土：暗褐色土(10YR3/4)に黒褐色粘土(10YR2/3)が混じる。φ3～8cm の礫が混じる)、第Ⅱ－４層(造成土:黒褐色砂質土(10YR3/2))、第Ⅱ－５層(造成土:黄褐色粘土(10YR5/6))、第Ⅱ－６層（造成土：φ2～10cm の礫層)、第Ⅱ－７層（造成土：φ1cm 程度の礫層)、第Ⅱ－８層（造成土：暗褐色粘質土(10YR3/4)に黄褐色粘土(10YR5/6)とφ5～10cm の礫が混じる）がある。

第Ⅲ層　造成土：現況の土手状高まりの本体部分である。次のように細分される。

第Ⅲ－１層　造成土：灰黄褐色砂質土(10YR4/2)。

第Ⅲ－２層　造成土:褐色砂質土(10YR4/4)。この層の下部からヒューム管が埋設されているのを確認した。

第Ⅳ層　地山腐植土層：黒褐色粘土(10YR2/3)。

第Ⅴ層　地山ローム層：黄褐色粘土(10YR5/8)。

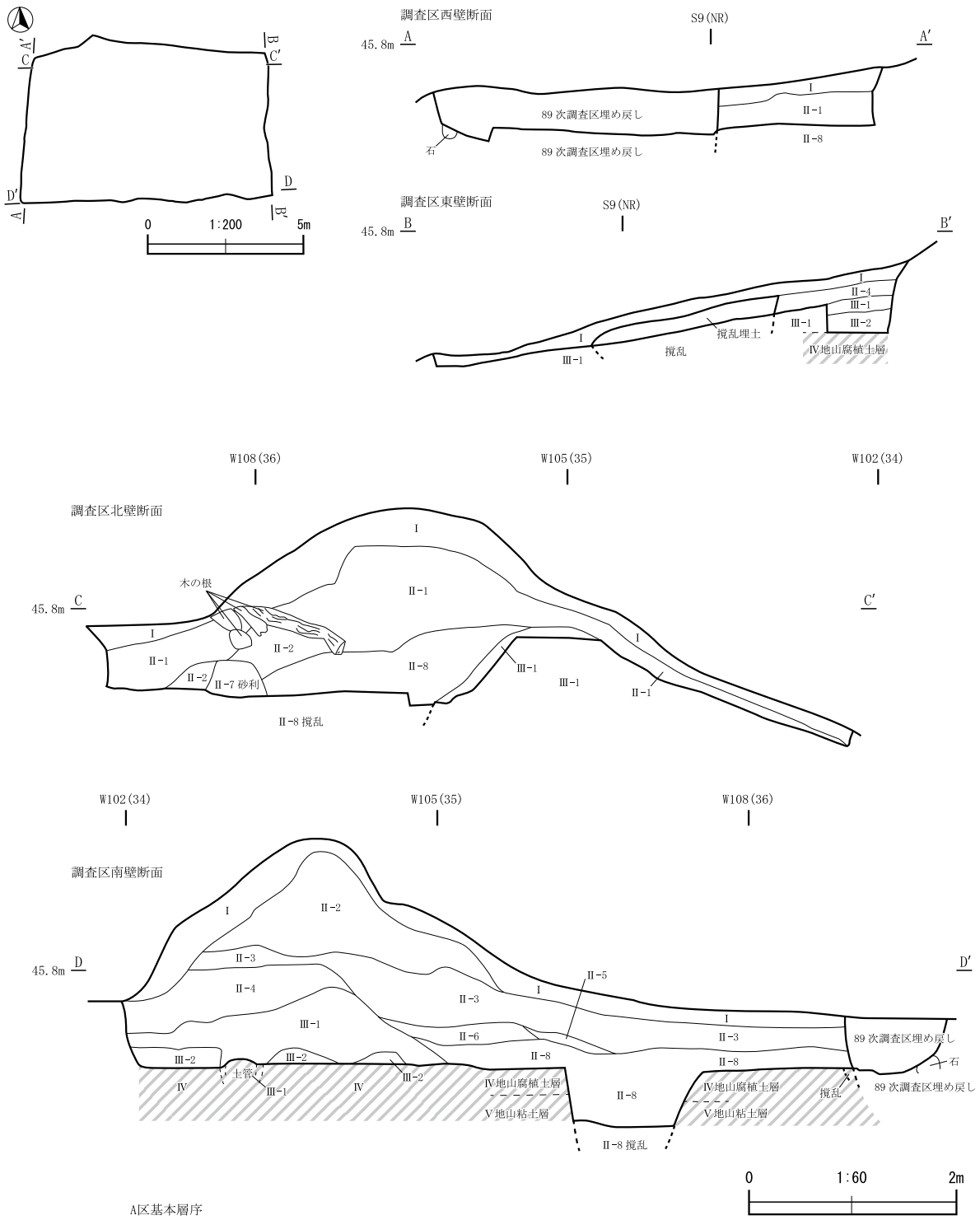
②Ｂ・Ｃ区（第 50 図）

Ｂ・Ｃ区の西側は、旧国道の開削の際に大きく削平されており、東から西に急激に傾斜している。

第Ⅰ層　表土：現表土。第Ⅰ－１層（表土：黄褐色砂質土(10YR5/6)）と第Ⅰ－２層（表土　黒褐色砂質土(10YR3/2)）がある。

第Ⅱ層　造成土：暗褐色砂質土(10YR3/3)。現在の斜面を形成している層である。明治期の旧国道開削の時の造成土と考えられる。

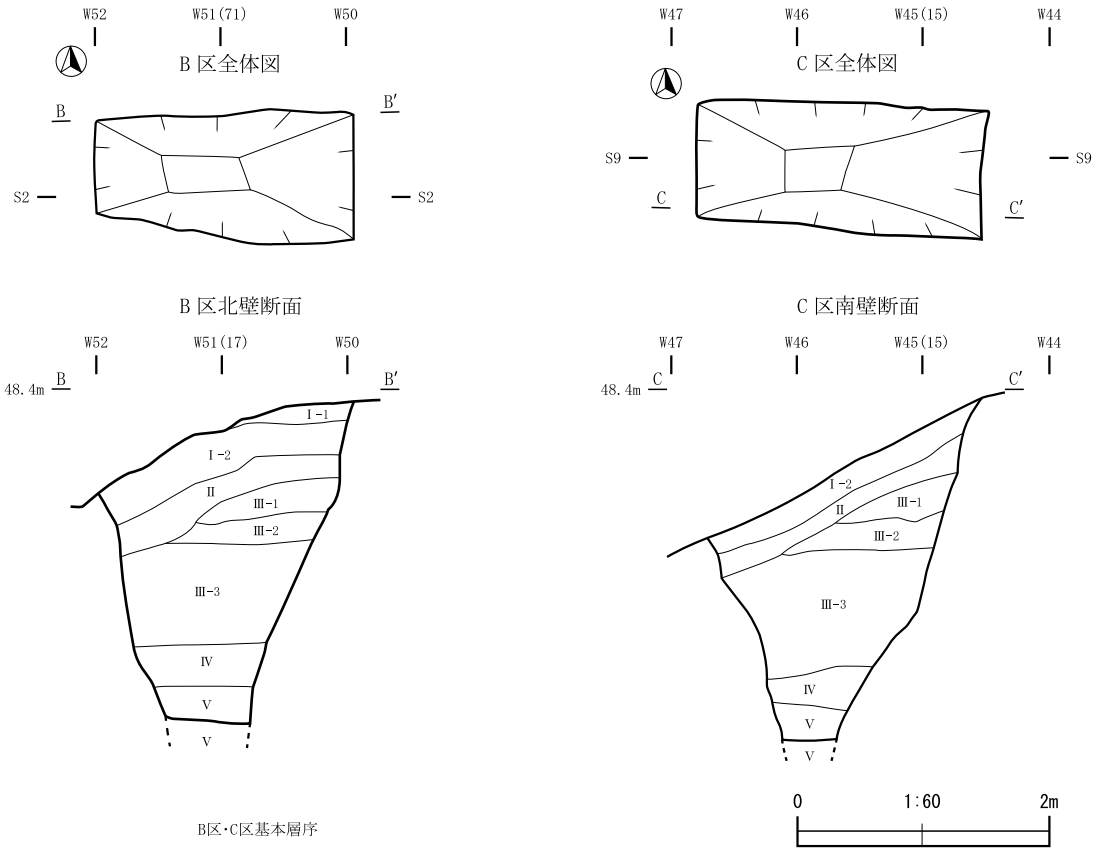
第Ⅲ層　造成土：いずれも第Ⅱ層によって削平を受けており、削平を受ける前は、水平に堆積していたものと考えられる。第Ⅲ－１層（造成土：褐色砂質土(10YR4/4)に黄褐色砂(10YR5/6)が若干混じる)、第Ⅲ－２層（造成土：黒褐色砂質土(10YR2/3)に黄褐色砂(10YR5/6)が若干混じる)、第Ⅲ－３層（造成土：明黄褐色砂(10YR6/8)に褐色砂(10YR4/6)と暗褐色土(10YR3/4)が混じる）がある。



A区基本層序

Ⅰ	表　　土	暗褐色土(10YR3/3)に黄褐色粘土(10YR5/6)が混じる
Ⅱ-1	造　成　土	黒褐色土(10YR3/2)にφ2～5cmの礫が混じる
Ⅱ-2	造　成　土	黄褐色粘土(10YR5/6)に暗褐色土(10YR3/3)・にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)・φ5～10cmの礫が混じる
Ⅱ-3	造　成　土	暗褐色土(10YR3/4)に黒褐色粘土(10YR2/3)が混じる　φ3～8cmの礫が混じる
Ⅱ-4	造　成　土	黒褐色砂質土(10YR3/2)
Ⅱ-5	造　成　土	黄褐色粘土(10YR5/6)
Ⅱ-6	造　成　土	φ2～10cmの礫層
Ⅱ-7	造　成　土	φ1cm程度の礫層
Ⅱ-8	造　成　土	暗褐色粘質土(10YR3/4)に黄褐色粘土(10YR5/6)とφ5～10cmの礫が混じる
Ⅲ-1	造　成　土	灰黄褐色砂質土(10YR4/2)
Ⅲ-2	造　成　土	褐色砂質土(10YR4/4)
Ⅳ	地山腐植土層	黒褐色粘土(10YR2/3)
Ⅴ	地山ローム層	黄褐色粘土(10YR5/8)

第 49 図　第 110 次調査地 A 区土層断面図



B区･C区基本層序

Ⅰ-1	表　　土	黄褐色砂質土(10YR5/6)
Ⅰ-2	表　　土	黒褐色砂質土(10YR3/2)
Ⅱ	造　成　土	暗褐色砂質土(10YR3/3)
Ⅲ-1	造　成　土	褐色砂質土(10YR4/4)に黄褐色砂(10YR5/6)が若干混じる
Ⅲ-2	造　成　土	黒褐色砂質土(10YR2/3)に黄褐色砂(10YR5/6)が若干混じる
Ⅲ-3	造　成　土	明黄褐色砂(10YR6/8)に褐色砂(10YR4/6)と暗褐色土(10YR3/4)が混じる
Ⅳ	旧耕作土	褐灰色土(10YR4/1)
Ⅴ	古代整地層	褐色粘質土(10YR4/6)

第 50 図　第 110 次調査地 B・C 区全体図・土層断面図

第Ⅳ層　旧耕作土：褐灰色土(10YR4/1)。第 77 次調査の②層（旧耕作土）に相当すると考えられる。

第Ⅴ層　古代整地層：褐色粘質土(10YR4/6)。第 77 次調査の第③層（古代整地層）に相当すると考えられる。

各層出土遺物

Ａ区

第Ⅱ層　出土遺物（第 51 図、図版 23）

磁器（第 51 図１）：西洋コバルトを用いた染付碗である。

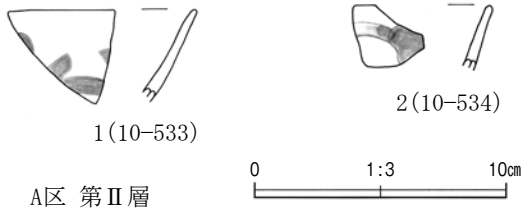
その他、Ⅲ層からはガラス片や番線が出土している。

Ｂ・Ｃ区

第Ⅲ層　出土遺物（第 51 図・52 図、図版 23）

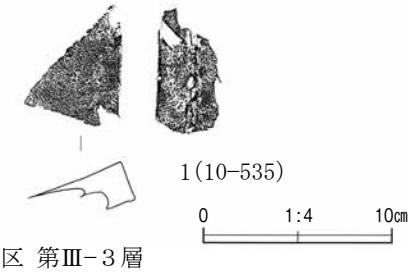
磁器（第 51 図２）：Ｂ区第Ⅲ-２層から出土した。染付碗で、外面に草花文を染め付ける。

瓦（第 52 図１）：Ｃ区第Ⅲ-３層から出土した。桟瓦で、黒色のいぶし瓦である。



1　A区 第Ⅱ層
2　B区 第Ⅲ-２層

第 51 図　第 110 次調査地出土遺物



1　C区 第Ⅲ-３層

第 52 図　第 110 次調査地出土瓦

表11　第110次調査地出土遺物属性表

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点・層位	グリッド	種　別	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　　考
10-533	第51図1	図版23-19	A区・Ⅱ層		磁器	碗	－	－	－	染付。西洋コバルト。
10-534	第51図2	図版23-20	B区・Ⅲ-2層		磁器	碗	－	－	－	染付。外面に草花文。
10-535	第52図1	図版23-21	C区・Ⅲ-3層		瓦	桟瓦	－	－	－	いぶし瓦。

Ⅴ　考　　察

１　第 108 次調査について

第 108 次調査地は焼山地区南西部にあたり、周辺の調査（第 99 次調査など）で９世紀第２四半期～第４四半期に造営された城内区画施設跡を検出している（註１、第 53 図）。調査地は、この城内区画施設の内側部分であり、城内区画施設の利用実態の把握を目的として行った。調査の結果、Ａ区第Ⅲ層面から溝跡２条、土坑３基、Ａ区第Ⅳ層面から掘立柱建物跡２棟、柱列跡１条、材木塀跡１条、溝跡３条、竪穴建物跡５軒、土坑 26 基、焼土遺構９基が検出された。また、Ｂ区第Ⅳ層面から溝跡２条が検出された。

これらの遺構については、出土遺物や検出層位、重複関係などから、年代や新旧関係の把握が可能である。遺物包含層や検出遺構の年代について各調査区で検討を行った上で、全体の利用状況と変遷について以下にまとめる。

（１）各遺物包含層の年代について

層序については、第Ⅱ章３の基本層序で述べた。各層出土の年代比定資料をみていく。第Ⅰ・Ⅱ層はガラス片なども出土する。これらのことから、第Ⅰ層・Ⅱ層はこの場所にあった宅地のための造成土であると考えられる（註２、以下、遺物の年代比定における「～に位置づけられる」の表記は、「～の」と表記する）。

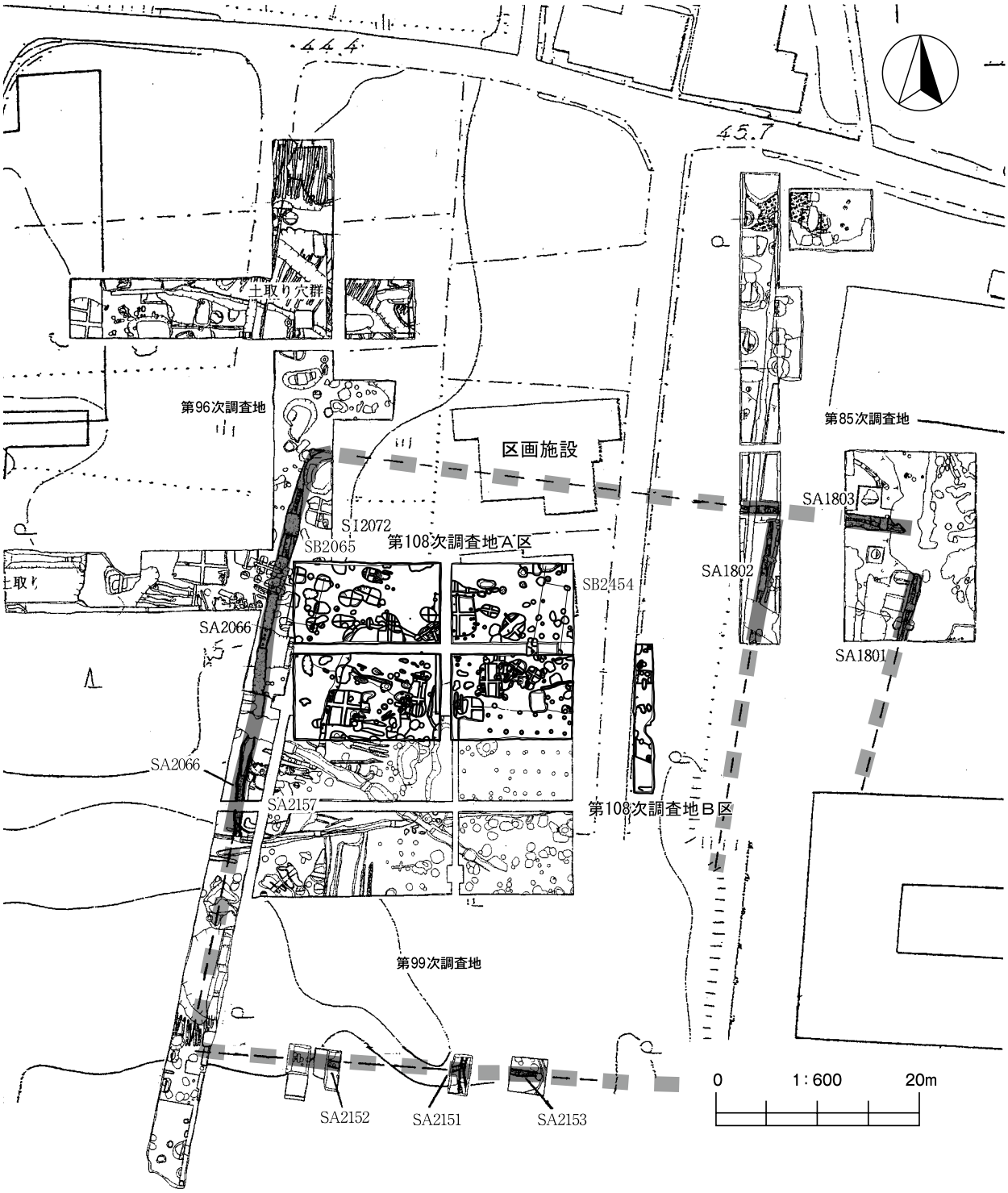
第Ⅲ層面からは、江戸後期の陶磁器（第 39 図 12・13）が出土し、多数の畝跡が検出されており、少なくとも近世以降の耕作土であると考えられる。

第Ⅳ層からは古代以前の遺物のみが出土することから、古代の整地層と考えられる。特に、法量の小型化した須恵器杯（第 39 図 14～19、註３）が出土することから、８世紀末から９世紀初頭にかけての整地層であると考えられる。

（２）各遺構の年代について

第Ⅲ層面検出遺構では SD2450 の埋土から、近世灰釉陶器（第９図４）のほか、18 世紀前半の肥前Ⅴ期の染付皿（第９図５）が出土している。このことから、第Ⅲ層面検出遺構は、上述の第Ⅲ層の耕作土が近世以降であるという所見と同様である。

第Ⅳ層面以下検出の遺構では、掘立柱建物跡 SB2065 柱掘り方からは、今回の調査において直接時期比定の根拠となる遺物は出土しなかった。しかし、第 96 次調査では、柱掘り方埋土から９世紀以降の頸部に段や沈線を有しない土師器の長胴甕が出土しており、また、柱の抜き取り部分からは、底径が縮小し口縁部が外反した９世紀第４四半期の赤褐色土器杯Ａが出土している（註４）。SB2454 掘立柱建物跡は柱穴の半裁を行っていないため、遺物から年代を特定することは難しい。しかし、方位規制から SB2065 掘立柱建物跡や後述の焼土遺構、材木列塀跡といった城内区画施設の一部を構成していた可能性がある。SA2149 材木塀跡は第 99 次調査において、９世紀代２四半期のもので、区画施設の拡張以前とされていた。しかし、後述する竪穴建物跡との切り合い関係からこれよりも新しく、城内区画施設との関連性は認められないことが分かった。SD2456 溝跡埋土からは口径 13cm の赤褐色土器杯Ａ（第 18 図１）が出土しており、９世紀第２四半期以降と考えられる。SI2459 竪穴建物跡には、カマド構築の際の補強材として口縁部が退化した赤褐色土器砲弾型長胴甕（第 23 図５、第 24 図１）が用いられており、これらは９世紀第４四半期以降の特徴を有していると考えられる。また、この竪穴建物跡埋土からは、小型化した赤褐色土器の坏Ａ（第 23 図２・３）が出土してお



第53図　焼山地区南西部遺構配置図

り、10 世紀前葉の廃絶と考えられる。SI2460 竪穴建物跡からは、柱穴埋土から底径 5.1cm、口径 11.6cm の赤褐色土器坏Ａ（第 24 図８）が出土しており、10 世紀前葉のものである。SI2461 竪穴建物跡埋土からは赤褐色土器皿（第 24 図 10）が出土しており、９世紀第３四半期以降であり、かつ、方位が真北方向であることも考えると、城内区画施設廃絶後の９世紀第４四半期以降である可能性がある。SI2463 竪穴建物跡埋土からは小型化した 10 世紀前葉の赤褐色土器坏Ａ（第 26 図６）が出土している。

SK2464 土坑埋土からは底径が縮小した赤褐色土器の坏Ａ（第 29 図２・３）が出土しており、９世紀第３四半期以降である。SK2465 土坑埋土からは小型化した 10 世紀前葉の赤褐色土器坏Ａ（第 29 図５）が出土している。SK2468 土坑埋土からは秋田城における瓦分類のうち、橙色系である４－１群（第 30 図１）が出土しており、８世紀末９世紀初頭以降のものである。SK2475 土坑埋土からは底径が縮小した 10 世紀前葉の赤褐色土器の底部（第 29 図９）が出土している。SK2478 土坑埋土からは底径の大きさから９世紀第３四半期以前の赤褐色土器坏Ａ底部（第 29 図 10）が出土している。SK2480 土坑埋土からは底径が縮小した９世紀第４四半期以降の赤褐色土器坏Ａ（第 29 図 11・12）が出土している。SK2484 土坑埋土からは８世紀後半の特徴を有する頸部に沈線をもつ土師器甕が出土している（第 29 図 14）。

SX2169 焼土遺構は第 96 次調査で埋土から赤褐色土器杯Ｂが出土しており、また方位規制も異なることから周辺の焼土遺構よりも古い９世紀第２四半期頃の廃絶の可能性がある（註１）。SX2490 焼土遺構埋土からは４－１群の丸瓦（註５、第 36 図１）が出土しており、８世紀末から９世紀初頭以降である。SX2491 焼土遺構からは埋土から器形と底径から９世紀第３四半期と判断される赤褐色土器坏Ａ底部（第 34 図５）が出土している。SX2492 焼土遺構からは底面から小型化した９世紀第３四半期～第４四半期の赤褐色土器坏Ａ（第 34 図８）が出土している。SX2497 埋土からは小型化した 10 世紀前葉の赤褐色土器坏Ａ（第 35 図 11）が出土している。

（３）第 108 次調査地全体の利用状況の変遷について

以上の年代の検討を踏まえ、全体の利用状況と変遷についてまとめると表 10 のようになる。

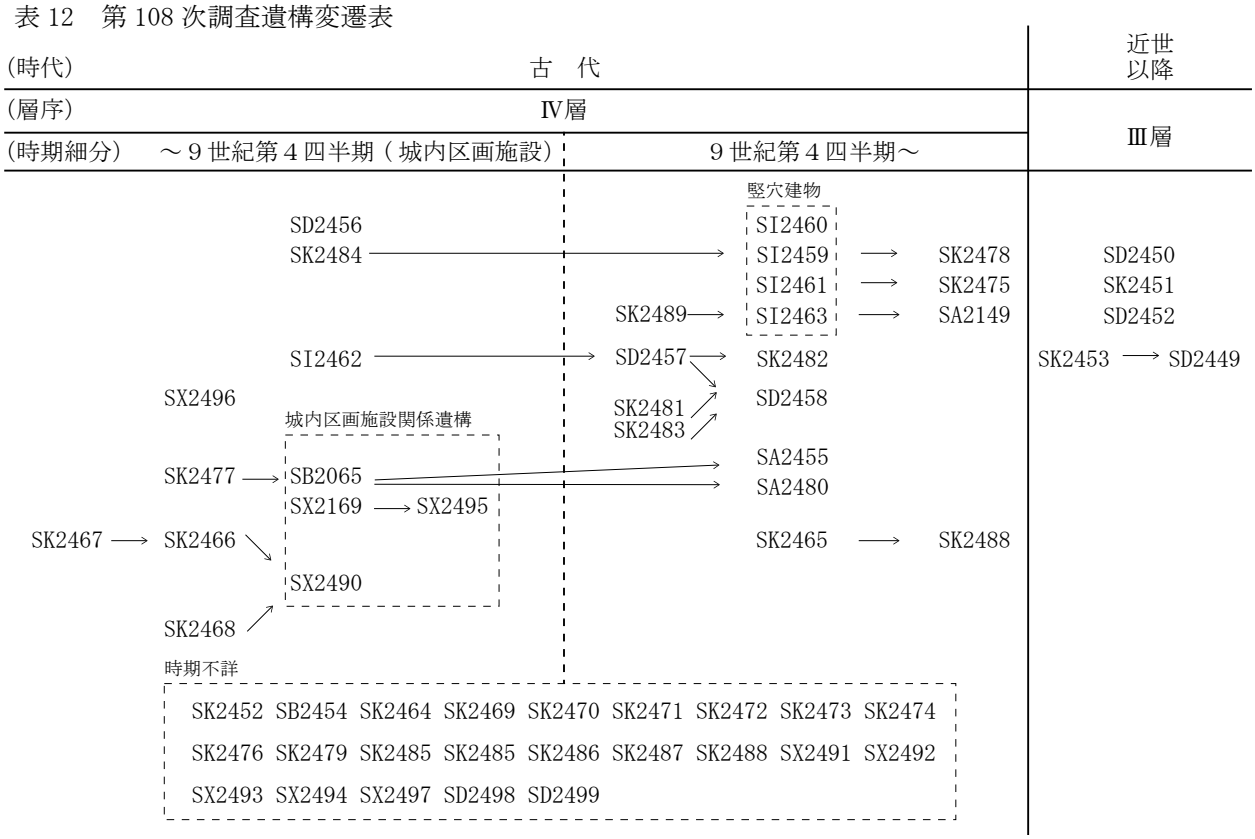
まず９世紀第２四半期以前であるが、今回の調査からは古代の遺構検出面でⅤ層地山飛砂層が部分的に露出しているにも関わらず、ほぼ９世紀第２四半期以降の遺構を検出していることから、それ以前の遺構の状況は希薄であった可能性がある。その後に９世紀第２四半期～第４四半期にかけてと第４四半期以降で焼山地区南西部の様相は大きく転換することが分かった（第 54 図）。以下にその詳細について記す。

①第 108 次調査地の遺構変遷と城内区画施設との関係について

これまで第 85・96・99 次調査で検出した城内区画施設関連遺構は、南北方向のものが北で約９°から 19 度東に、東西方向が西で北に７°から 14°振れる範囲内にあり、時期は９世紀第２四半期から第４四半期にかけてのものであると考えられる（註１）。第 108 次調査で検出した遺構も、方位・方向が北で東に９°から 36°振れるか、材木列塀跡の東西方向と平行するように西で北に８°から 24°振れ、出土遺物も踏まえると同時期に機能・廃絶した可能性がある。よって、城内区画施設の一部を構成していたと考えられる。さらに SB2454 掘立柱建物跡に関しても、遺物による時期は不明であるものの、桁行南側柱筋が北で 10°東に振れることから城内区画施設の一部となる可能性がある。

これらの廃絶後、SI2459～SI2461・SI2463 竪穴建物跡が中心となり、方位規制もほぼ真北方向に転換すると考えられる。

表 12　第 108 次調査遺構変遷表



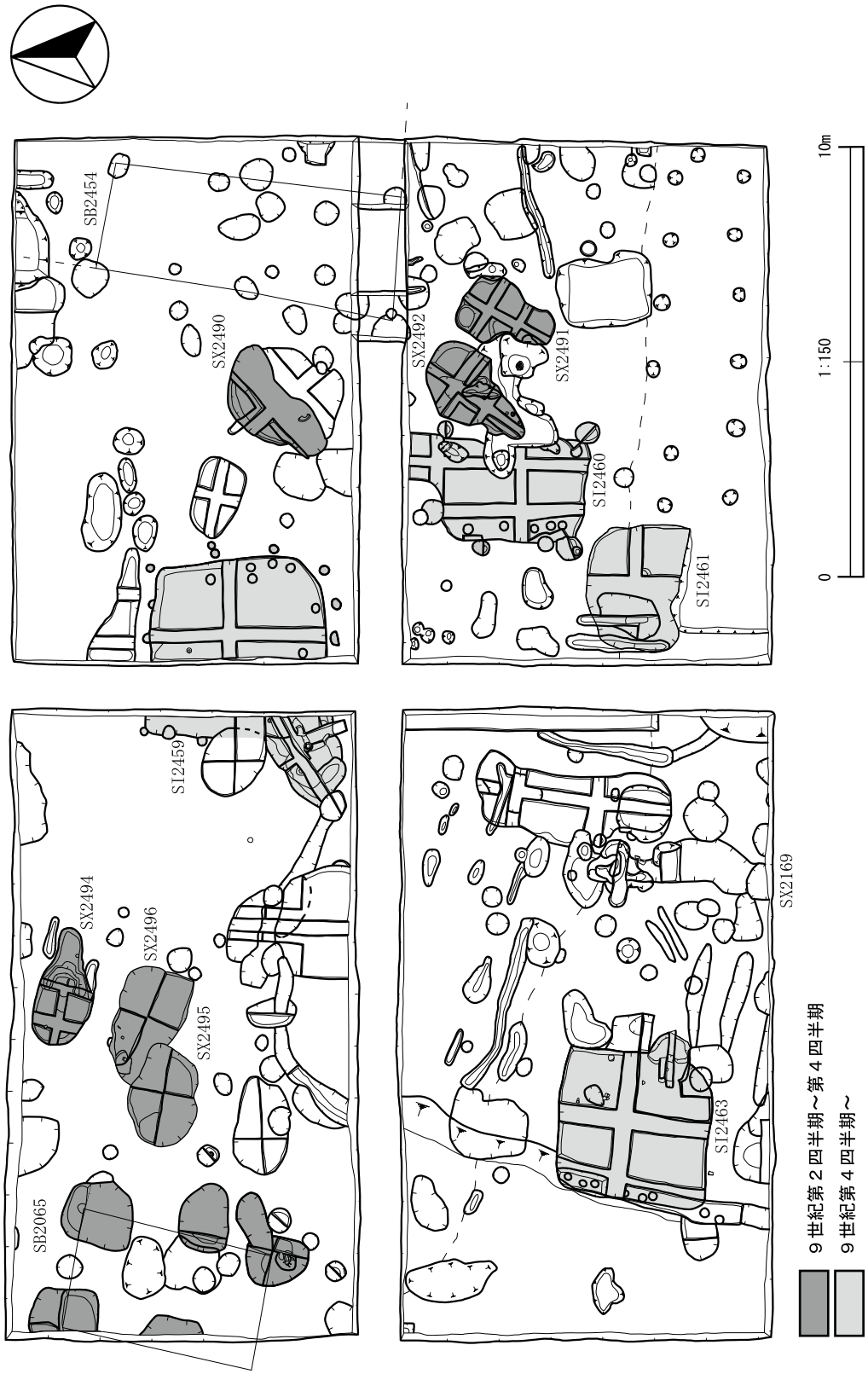
②第 108 次調査地における焼土遺構について

特に今回の調査における中心的な成果は、城内区画施設に伴うと考えられる焼土遺構である。以下にその特徴・構造と機能について記す。

今回の調査で検出された焼土遺構は、SX2169、SX2490～SX2497 である。これらは埋土に焼土粒や粘土ブロック・炭化物を含み、不整形の平面プランをもつという点で共通している。ただし、このうち SX2169 は出土遺物の時期や方位規制から城内区画施設に付随しない可能性がある。また、その形状も、他の例に比べ細長い平面プランを呈する。構造に関しても、深く掘り込んで基底部を粘質土で整地し、その壁面を須恵器の破片で補強した上で本体の粘土部分を構築しており、他の例と異なる。

SX2169 以外の焼土遺構に関しては、先述の通り城内区画施設の一部であると考えられ、いずれも概ね同様の歪んだ楕円形ないしはダルマ形の平面プランで、深さも類似している。このなかで、SX2494 は底部構造が概ね良好に遺存しており、歪なダルマ形の掘り込みの底部に粘土で馬蹄形の盛土をしている。また、おそらく最低１回以上造り直したと考えられ、盛り土の窪みの部分に瓦を立て補強しつつ粘質土で埋め立てた痕跡が認められる。そして、馬蹄形の粘土は、著しく被熱はしてないものの、その形状や埋土の炭化物からこの遺構が炉としての機能をもっていた可能性が考えられる。加えて、先述の通り、他の焼土遺構についても埋土に粘土ブロックが含まれることを踏まえれば、本来はそれらも同様の構造を有していた可能性がある。

次にこれらの遺構の機能について出土遺物から考える。まず、今回の調査地では先述の通り鉄鏃や刀子を中心とした鉄製品の出土点数が多い点、また、フイゴの羽口も小片を含め多数出土していることから、調査



第 54 図　秋田城跡第 108 次調査地Ａ区主要遺構変遷図

地内で鍛冶が行われていた可能性が示唆される。また、激しく被熱した石も出土しており、金床石であった可能性もある。特に被熱した石はSX2495からも出土しており、ここから焼土遺構が鍛冶に関わる可能性がうかがえる。

また今回の調査では多量の鉄滓が出土しており、この点からも調査区内で鍛冶が行われていた可能性が示唆される（表３）。特にSX2492底面からは椀型鉄滓が出土しており、この点からも焼土遺構の機能が鍛冶に関わる可能性がうかがえる。ただし層ごとに見た場合、鉄滓が最も多く出土しているのは遺構検出面上層のⅢ層である。かつ、全ての焼土遺構の埋土を４・２・１㎜のフルイにかけても、鍛造薄片を確認することはできなかった。これらについては、焼土遺構の上部構造や、それに伴う鍛冶の作業面が耕作による削平で失われた可能性が考えられる。

なお、南側に隣接する99次調査地においてもSX2165等の不整形の焼土遺構を検出している。さらにそこから、鉄製品として馬具のうち轡のハミ部分が出土しており、類似が認められる。

以上をまとめると、焼土遺構は城内区画施設の一部をなし、概ね企画性をもって構築され、鍛冶に関する機能を有していた可能性が指摘できる。

（４）第108次調査の成果と課題

第108次調査の結果により、以下の５点について成果と課題があった。

①第85・96・99次調査で、焼山地区南西部には９世紀第２四半期～第４四半期にかけて、最大60m四方の材木塀による城内区画施設が存在したことが分かっている。今回の調査から、その内側で検出されたSB2065・SB2454掘立柱建物跡や、不整形の焼土遺構のうち数基が、遺物や方位規制などから、９世紀第２四半期～第４四半期にかけて、区画施設に伴って機能・廃絶した可能性を指摘できる。なお、周辺調査地で検出されている竪穴建物跡のうち、材木塀と方位規制を揃え、かつそれに近接しているものに関しても同様の可能性が指摘されている（註６）。

②城内区画施設の性格・機能は、検出遺構・遺物の内容から、鍛冶に関連する可能性がある。

③焼山地区南西部は、この区画が廃絶した後、９世紀第４四半期～10世紀前葉にかけて、方位規制が真北方向となり、竪穴建物群に変容したと考えられる。

④この区画で焼土遺構が展開する時期は大畑地区で生産施設が拡充する時期に対応する（表13）。

⑤今後は、今回の調査によって、城内区画施設の中心部分がさらに北東に寄ることが想定されるので、その実態解明が必要である。また、城内区画施設と焼山地区北部の倉庫群との関係性についても解明が必要である。

２　第109次調査について

第109次調査地は、焼山地区北西部で、周辺の中世における利用と古代の城外西大路の実態把握と今後の環境整備に向けて調査を実施した。

調査の結果、第Ⅱ層面から材木塀跡４条、柱掘り方２基、土塁１基が発見された。第Ⅲ層面から溝跡２条、道路遺構面１面、第Ⅳ層面から溝跡１条、道路遺構面１面が検出された。

これらの遺構について、出土遺物や検出層位、重複関係などから、年代や新旧の把握が可能である。遺物包含層や検出遺構の年代について検討を行った上で、全体の利用上の変遷について以下にまとめる。

表13　秋田城遺構変遷表

	733	750	760	800	830	850	878	900	915	950
政庁 政庁区画施設	Ⅰ期 築地塀		Ⅱ期 築地塀 材木列塀	Ⅲ期 一本柱列塀	ⅣＡ期 一本柱列塀	ⅣＢ期 一本柱列塀	Ⅴ期 材木列塀		Ⅵ期 一本柱列塀	
外郭 外郭区画施設	Ⅰ期 瓦葺き築地塀		Ⅱ期 非瓦葺き築地塀	Ⅲ期 （小期あり） 柱列塀			Ⅳ期 （小期あり） 材木列塀		Ⅴ期 大溝	
大畑地区	Ⅰ期		Ⅱ期 生産施設	Ⅲ期 生産施設整備 居住域住居数増加		Ⅳ期 生産施設充実	Ⅴ期 官衙建物			
焼山地区	Ⅰ期　Ａ類建物 Ａ類建物倉庫		Ⅱ期　Ｂ類建物 Ｂ類建物倉庫群か？	Ⅲ期（小期あり）　Ｃ類建物 Ｃ類建物倉庫群			Ｄ類建物？			
鵜ノ木地区	Ⅰ期		Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期		Ⅴ期			
外郭西門	Ⅰ期		Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期		Ⅴ期		Ⅵ期	
時期	天平5年(733)～		8C後半前葉～	8C末・9C初～	9C第2四半期～	9C第3四半期～	元慶2年(878)～		10C第2四半期～10C中葉	
備考	秋田出羽柵創建期		天平宝字年間「秋田城」改修期	第Ⅲ期全体大改修期	天長7年(830)大地震後復興期	元慶の乱で焼失	元慶の乱(878)後復興期		最終末期	

（１）各遺物包含層の年代について

各層の年代比定資料をみていくと、第Ⅰ層から肥前Ⅴ期の肥前系磁器染付碗（第 46 図２）が出土している。このことから、第Ⅰ層は、18 世紀後葉から 19 世紀前半以降の造成土であると考えられる。また、第Ⅱ層からはⅣ～Ⅴ期の珠洲系中世陶器甕（第 46 図３）が出土している（註７）。このことから、第Ⅱ層は、14 世紀～15 世紀前半の整地層であると考えられる。第Ⅲ・Ⅳ層からは出土遺物が全くなかったため、年代比定は困難であるが、後述する遺構の内容から考えて、古代と考えられる。

（２）各遺構の年代について

遺構内出土資料は、第Ⅱ層面検出の SKP2504 出土陶器鉢（擂鉢ヵ）の破片１点のみである。赤褐色を呈し陶器であり、越前産の可能性がある。中世後期において、越前産陶器が出土することは、秋田城に隣接する後城遺跡でも確認されている（註８）。また、第Ⅱ層出土の遺物の年代も中世後期と考えられるため、これと矛盾はない。その他、第Ⅱ層面検出の SKP2505 柱掘り方・SA2500～2503 材木塀跡は、その検出層位からみて第Ⅱ層の堆積年代である中世後期と考えて良いだろう。

第Ⅲ層面以下の遺構内および遺物包含層からの出土遺物はなく、年代比定は困難であるが、遺構の内容および規格からみて、古代のものと考えられる。第Ⅲ層面では SD2507 溝跡と SD2508 溝跡を道路側溝とする SX2509 道路遺構、第Ⅳ層面では SD2510 溝跡を北側道路側溝とする SX2511 道路遺構が発見された。これらの道路遺構の規格は、第Ⅲ層面の SX2509 道路遺構の道路幅は約８ｍ、第Ⅳ層面の SX2511 道路遺構の道路幅は少なくとも 10.5m以上であり、南側側溝は調査区外にあると考えられる。年代比定資料は発見されなかったが、こうした道路の規格を近隣の調査結果と比較すると、第 106 次調査Ａ区・Ｂ区で発見された道路遺構は、今回の調査で発見された道路遺構と対応するものと考えられる（註９）。すなわち、道路幅約９ｍの第 106

次調査Ａ区のSX2331道路遺構の延長が、第109次調査第Ⅲ層面のSX2509道路遺構と対応する。同様に、道路幅約12mの第106次調査Ａ区のSX2332道路遺構および第106次調査Ｂ区のSX2349道路遺構の延長が、第109次調査SX2511道路遺構と対応する。したがって、第109次調査で発見された第Ⅲ層面のSX2509道路遺構は平安期、第Ⅳ層面のSX2511道路遺構は、奈良期であると推定することができる。

（３）第109次調査地全体の利用状況の変遷について

以上の年代の検討を踏まえ、全体の利用状況と変遷についてまとめると表14のようになる。

①第109次調査地の城外西大路について

先にみたように、第109次調査で、奈良期と推定される道路幅12m規模のSX2511道路遺構の一部と平安期と推定される道路幅約８mのSX2509道路遺構が確認された。これらは第92次調査Ａ区・第102次調査で発見された外郭西門から延びる城外西大路と考えられる（第55図）。城外西大路は外郭西門から、北西方向に尾根筋に沿って延びている。また、第109次調査の土層断面をみると、道路遺構の中央部では第Ⅵ層の地山砂礫層が検出されており、旧地形は中央部が高く、北側と南側は斜面になっていたと考えられる。道路遺構中央部で第Ⅴ層地山粘土層が発見されなかったため、古代の道路造成時に尾根筋をある程度削平している可能性が考えられる。第Ⅳ層面で発見されたSD2510溝跡は非常に浅いため、第Ⅲ層面のSX2509道路遺構造成時に削平を受けている可能性がある。また、同様に第Ⅲ層面のSD2507・2508溝跡も非常に浅いため、第Ⅱ層面の中世後期の削平を受けていると考えられる。

②第109次調査地の中世における利用について

第109次調査から第Ⅱ層面においてSA2500～2503材木塀跡が発見された。北側でSA2500･2501材木塀跡、南側でSA2502・2503材木塀跡が発見されており、これらの区画施設は新旧２時期の変遷が考えられる。これらは、第106次調査Ｂ区で発見されたSA2335～SA2338材木塀跡の延長であると考えられる。このような材木塀跡は、第109次調査の西側にさらに延長していることが、今回の調査で分かった。この他にSKP2504・2505柱掘り方が発見されたが、これらには区画施設が取り付かないため、門などの掘り方ではなく、調査区外に広がる掘立柱建物跡となる可能性がある。材木塀跡の区画施設が閉じる部分については、第109次調査地の

表14　第109次調査遺構変遷表

時　代			古　代		中世	近世以降
層序	Ⅵ層 地山砂礫層	Ⅴ層 地山粘土層	Ⅳ層	Ⅲ層	Ⅱ層	Ⅰ層
外郭時期区分			外郭Ⅰ・Ⅱ期？	外郭Ⅲ期？		
道路遺構関係			SX2511 SD2510 （北側側溝）	SX2509 SD2507 （北側側溝） SD2508 （南側側溝）		
区画施設					SA2501 ⟶ SA2500 SA2503 ⟶ SA2502	
その他					SKP2504 SKP2505	

さらに西側であることがわかった。

また、このような区画施設の年代は、第 106 次調査Ｂ区では、中世整地層から珠洲系中世陶器Ⅳ～Ⅴ期の甕が出土しており、SA2338 材木塀跡から珠洲系中世陶器Ⅳ期が出土している。今回の第 109 次調査でも第Ⅱ層から珠洲系中世陶器のⅣ～Ⅴ期の甕が出土していることから、同様の所見である。

（４）第 109 次調査の成果と課題

第 109 次調査の結果により、以下の４点について成果と課題があった。

①外郭西門から延びる城外西大路の延長の道路遺構が発見された。道路遺構は新旧２時期あり、出土遺物がないため年代比定は難しいが、第 106 次調査Ａ・Ｂ区の道路遺構の規格から推定すると、奈良期と平安期の道路遺構であると考えられた。

②城外西大路は第 109 次調査地点からさらに西側に尾根筋に沿って延びており、どこへ向かっているのかさらに西側に調査地点を設けて確認していく必要がある。

③14 世紀～15 世紀前半の中世後期の材木塀跡を尾根の北側と南側で発見した。材木塀跡は新旧２時期あり、年代・規模・構造において、第 106 次調査Ｂ区で発見された材木塀跡の延長であると考えられた。

④中世後期の材木塀跡はさらに西側に延びており、区画施設が閉じる部分に門などの出入り口施設があるかどうかさらに確認していく必要がある。

３　第 110 次調査について

第 110 次調査地は、焼山地区東部（Ａ区）と大畑地区西部（Ｂ・Ｃ区）で、城内西大路の実態把握と今後の環境整備に向けて調査を実施した。調査の結果、遺構の発見はなかった。

遺構の発見はなかったが、遺物包含層の年代を中心に検討を行った上で、全体の利用状況の変遷について、以下にまとめる。

（１）各遺物包含層の年代について

焼山地区東部のＡ区では、第Ⅱ層からは西洋コバルトを用いた磁器染付碗が出土しており、少なくとも明治期以降の堆積であると考えられる。また、図示はしなかったが、第Ⅲ層からガラス片や番線が出土している。これらのことから第Ⅲ層までは近代の造成土であると考えられる。第Ⅲ層の直下は第Ⅳ層地山腐植土層、第Ⅴ層地山粘土層となっており、古代整地層や地山飛砂層は確認されなかった。したがって、古代の遺構が確認される古代整地層や地山飛砂層は、削平を受けていると考えられる。

大畑地区西部、政庁西部のＢ・Ｃ区では、Ｂ区Ⅲ−２層で江戸後期の染付碗、Ｃ区Ⅲ−３層で近世の桟瓦が出土していることから、第Ⅲ−３層までは少なくとも近世以降の造成土であると考えられる。色調、標高などから、第Ⅳ層は隣接の第 77 次調査地②層旧耕作土に、第Ⅴ層は同調査地③層古代整地層に対比することができる。

（２）第 110 次調査地全体の利用状況の変遷について

焼山地区東部であるＡ区では、古代の遺構面は削平を受け、失われていることがわかった。焼山地区は、昭和 24 年に焼山浄水場が設置された場所であり、この時に大きく削平を受け、当該工事中に第Ⅰ～Ⅲ層が造成さらたと考えられる。したがって、政庁西門から延びる城内西大路は、当該地においても発見することが

できなかった。なお、第Ⅳ層地山腐植土層は、標高約 45.0mのところであり、少なくともこのレベルになると古代整地層は存在しないと言えるだろう。

大畑地区西部、政庁西部のＢ・Ｃ区では、第Ⅴ層の古代における利用以後、第Ⅳ層のような耕作地として利用されていたと考えられる。第Ⅲ-３層は少なくとも近世以降の堆積である。第Ⅱ層は、現況の斜面を形成している層であるため、明治 14 年の明治天皇巡幸に伴う旧国道の開削によるものと考えられる。第Ⅲ層は約 1.2m堆積しており大規模な造成であると考えられる。これは明治２年に当該地に設置された招魂社（現在の護国神社）造営の際の造成土である可能性がある。なお、第Ⅴ層古代整地層の標高は約 46.0mである。

（３）第 110 次調査の成果と課題

第 110 次調査の結果により、以下の３点について成果と課題があった。

①Ａ区は、昭和 24 年の焼山浄水場の造成時に大きく削平をうけ、古代整地層は残っていないと考えられた。したがって、この地点における城内西大路の検出は困難であると言える。

②Ｂ・Ｃ地区においては、第Ⅴ層が第 77 次調査地③層の古代整地層と対応することが分かった。その整地層の標高は約 46.0mである。

③このような土層堆積や地山面の標高を参考に環境整備を行っていきたい。

註１　秋田市教育委員会　2012　『秋田城跡　秋田城跡調査事務所年報 2011』

註２　これ以降の考察における肥前系陶磁器の年代比定は下記に基づき記述する。
九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年 - 九州近世陶磁学会 10 周年記念-』

註３　これ以降の考察における古代出土土器の年代比定は、以下一連の秋田城跡出土土器編年成果に基づき記述する。
小松正夫 1992 「秋田城とその周辺地域の土器様相（試案）―第 54 次調査の木簡・漆紙文書伴出土器を中心にして―」『第 18 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』pp. 139-144
伊藤武士 1997 「出羽における 10・11 世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』７ pp. 32-44
小松正夫・日野久・西谷隆・伊藤武士 1997 「秋田城跡出土土器と周辺窯の須恵器編年（試案）」『日本考古学協会 1997 年度秋田大会蝦夷・律令国家・日本海―シンポジウムⅡ・資料集―』pp. 18-30
秋田市 2001 「第７章 秋田城跡の発掘調査 九 秋田城跡出土の土器編年」『秋田市史 第７巻 古代 史料編』pp. 383-390
秋田市教育委員会 2007 「秋田城跡の土器編年」『秋田城跡Ⅱ－鵜ノ木地区－』pp. 340-345
神田和彦 2010 「ケズリのある赤い坏－古代秋田郡域の赤褐色土器坏Ｂ－」『北方世界の考古学』すいれん舎 pp. 187-210

註４　赤褐色土器の呼称と坏Ａ・Ｂの分類については、酸化炎焼成、非内黒、ロクロからの切り離しが回転、静止糸切りのものを赤褐色土器とし、坏類の底部から体部下端および下半にかけてケズリ調整を施すものを坏Ｂ、無調整のものを坏Ａとしている。

註５　秋田城出土瓦については表 15 に基づき分類した。
秋田市教育委員会 2009 『秋田城跡　秋田城跡調査事務所年報 2008』

表15　秋田城出土瓦の分類

分類	細分	色　調	焼成	質	備　考	時期区分	年　代
１群	１－１群	灰白	良好・やや不良	軟質	・丸瓦は無段タイプのみ	政庁Ⅰ期（外郭Ⅰ期）	8世紀第2四半期
	１－２群	灰色					
	１－３群	黒色（いぶし焼成）					
２群		青灰・灰・暗灰	良好・堅緻	硬質	・砂粒が多い ・平瓦では特に凸面に砂粒が目立つ ・補修瓦か	政庁Ⅱ期（外郭Ⅱ期）	8世紀後半
３群	３－１群	暗灰～灰	良好・堅緻	硬質	・丸瓦は有段タイプ ・平瓦は板状工具で撫で調整 ・成形時に粘土板を重ねた痕跡 ・古城廻窯跡産か	政庁Ⅲ期以降（外郭Ⅲ期以降）	8世紀末・9世紀初以降
	３－２群	灰・灰黄・黄灰					
４群	４－１群	橙色系を主体	やや不良	軟質	・丸瓦は有段タイプ	政庁Ⅲ期以降（外郭Ⅲ期以降）	8世紀末・9世紀初以降
	４－２群	黄灰・にぶい黄灰～褐灰色					

※秋田市教育委員会2009「Ⅳ 考察　⑤外郭西門跡および周辺出土の瓦について」をもとに作成

註６　秋田市教育委員会　2011　『秋田城跡　秋田城跡調査事務所年報 2010』

註７　中世陶磁器の年代比定は下記の論考に基づき記述する。

吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館

註８　秋田市教育委員会　1981　『後城遺跡発掘調査報告書』

註９　秋田市教育委員会　2016　『秋田城跡　秋田城跡調査事務所年報 2015』

Ⅵ　秋田城跡環境整備事業

平成 29 年度の整備

今年度は、これまで整備を進めてきた外郭東門地区や政庁地区、水洗厠舎を復元した鵜ノ木地区を面的に結ぶため、平成 22 年度から進めている城内東大路復元を行った。舗装材については、当初一次材を主体とした土系セメントを使用していたが、経年劣化による傷みが激しいことから、見学者に対する説明を十分におこなうことを前提に、現在は透水性の樹脂舗装としている。なお、復元は大路周辺の調査が全て終了していないことから、大路部分のみの復元にとどめている。

工事の概要は次のとおりである。

実施地区　　大畑地区

整備面積　　349 ㎡

工　　種	細　　目	数　　量	金額(千円)	備　　考
敷地造成工	盛土工	1 式	746	山砂盛土
	法面工	1 式	73	機械築立整形、人工芝張芝
施設整備工	遺跡表示工	1 式	3,752	大路表示(透水性樹脂舗装　t＝3cm)
直接工事費計			4,571	

城内東大路完成(東から)

Ⅶ　秋田城跡保存活用整備事業

史跡秋田城跡を、市民の郷土学習の場として有効活用を図るために、平成29年度は下記の事業を実施し、全体で6,895名の参加者があった。

１　学習講座（春期：５月25日～27日、冬期：２月13・14日）

秋田城跡全般について発掘調査成果、文献史料、環境整備事業等を学んでもらう市民講座を開催した。郷土学習の機会として秋田城跡の周知を図るとともに、ボランティアガイド養成講座も兼ねる。参加者60名。

２　史跡探訪会（６月24日）

市街地内にありながら、良好に保存された自然環境の観察を通じ、史跡指定による環境保全の側面も理解してもらうことを目的とし、史跡内を散策、動植物観察を行った。参加者16名。

３　発掘体験教室（７月22日）

小中学校を対象に発掘調査を実際に体験することを通じ、地域の歴史や秋田城跡への理解と関心を深めてもらうことを目的として体験教室を開催した。参加者12名。

４　史跡秋田城跡パネル展（８月１日～８月31日・秋田市ポートタワーセリオン、９月16日～10月22日・秋田市民俗芸能伝承館旧金子家住宅、11月25日～11月30日・秋田市役所１階市民ホール）

市内の観光施設および商業施設の展示会場３箇所で、一般市民、小中学生を対象に、秋田城についてわかりやすく解説したパネル展を開催した。また、パネル展のテーマに合わせた「秋麻呂くん通信」を発行し、会場で配布している。平成29年度のテーマは「秋田城跡－古代の道－」で行った。見学者は、ポートタワーセリオン597名、民俗芸能伝承館1,386名、秋田市役所１階市民ホール453名。

５　史跡散策会（９月16日）

一般市民を対象に、ボランティアガイドの説明による史跡内の散策会を開催した。参加者８名。

６　東門ふれあいデー（10月１日）

秋田城跡外郭東門周辺を会場として、史跡の保護と活用を推進するために、地域住民と共同で各種イベントを開催した。ボランティアガイドの会等関係団体、地域住民による支援団体、地元町内会からなる実行委員会の主催、運営で行われ、歴史資料館としては情報発信のためのパネル展示、のぼりの製作・活用、リーフレットの配布等を行った。参加者2,410名。

７　史跡めぐり（10月28日）

秋田城周辺を講師の解説を聞きながら歩いてもらい、史跡公園以外の史跡指定地域の魅力を伝えることを目的としている。参加者15名。

８　第108次発掘調査現地説明会（８月19日）

寺内焼山地区の発掘調査成果を公開した。参加者107名。

９　出前講座（御所野学院中学校１年生、高清水小学校６年生、上新城小学校３～６年生）

秋田城跡について出土遺物や遺構の画像等を用い解説する講座を実施した。生徒に秋田城跡への関心や理解を深めてもらう機会とするため、郷土学習の授業の一環として歴史資料館職員が講師となり授業を担当した。参加生徒数164名。

10　歴史資料館企画展（前期７月22日～８月23日、後期12月23日～２月４日）

秋田城跡や周辺遺跡から出土した資料から、古代の秋田について興味や関心を深めてもらうことを目的とし開催した。夏と冬の２回行った。見学者は前期1,283名、後期384名。

学習講座

史跡探訪会

発掘体験教室

第 108 次調査現地説明会

東門ふれあいデー

史跡めぐり

パネル展（市役所市民ホール）

後期企画展「秋田城と古代の窯」

Ⅷ　秋田城跡現状変更

秋田城跡歴史資料館では、秋田城跡の発掘調査や環境整備事業、史跡の管理・活用の他に、現状変更に伴う調査を実施して、史跡内の遺構や歴史的景観の保護に努めている。しかし、史跡内は歴史的・自然的環境を活かすと同時に、居住地であることから住民のより良い住環境の整備も必要であり、現状変更の必要性も生じてくる。そこで、やむなく史跡内の現状を変更する場合は、秋田市教育委員会が窓口となって申請者および関係機関と史跡保護のための協議を慎重に行い、史跡への影響がない最小限の範囲で変更を行っている。

平成29年の現状変更申請は18件であったが、掘削が最小限で、現状変更が軽微なものについては工事の際に立会調査を、その他については発掘調査を行って対応した。その内容は下記のとおりである。

①民間工事15件…住宅新築・解体工事（１・３・６・７・８・14・17)、埋設ガス管取替（５・15・16)、電気設備撤去（９)、工作物の設置（10・18)、水道管の埋設（11)、倉庫解体（12)

②史跡の保護や保存に係わるもの３件…発掘調査（４・13)、環境整備（２）

表16　現状変更一覧

番号	申請者	申請地	変更事項	申請年月日	許可年月日・番号	対応
1	個人	秋田市寺内児桜一丁目107番１、107番３、107番５	住宅解体	平成29年１月16日	平成29年１月18日 秋市教指令第７号	立会調査
2	秋田市教育委員会教育長	秋田市寺内大畑152番地内、153番１地内、153番２地内	史跡公園整備	平成29年２月３日	平成29年３月10日 28受庁財第４号の1867	立会調査
3	個人	秋田市寺内児桜一丁目107番１、107番３、107番５	住宅新築	平成29年２月３日	平成29年２月６日 秋市教指令第14号	立会調査
4	秋田市教育委員会教育長	秋田市寺内焼山56番、秋田市寺内焼山89番、227番、228番、232番、234番１	発掘調査	平成29年２月16日	平成29年３月10日 28受庁財第４号の1974	発掘調査
5	東部瓦斯株式会社	秋田市寺内鵜ノ木７番20～秋田市寺内児桜二丁目16番33地先	埋設ガス管取替	平成29年２月20日	平成29年２月21日 秋市教指令第56号	立会調査
6	個人	秋田市寺内焼山23番18、秋田市寺内大小路150番16	住宅新築	平成29年５月11日	平成29年５月15日 秋市教指令第275号	立会調査
7	個人	秋田市寺内大畑314番３、314番４	住宅新築	平成29年５月19日	平成29年５月26日 秋市教指令第277号	立会調査
8	個人	秋田市寺内大畑319番２、320番、321番１	住宅新築	平成29年６月６日	平成29年６月13日 秋市教指令第285号	立会調査
9	東北電力株式会社	秋田市寺内大畑353	電気設備撤去	平成29年６月６日	平成29年６月９日 秋市教指令第282号	立会調査
10	個人	秋田市寺内鵜ノ木103	塀の建て替え	平成29年６月22日	平成29年６月23日 秋市教指令第286号	立会調査
11	個人	秋田市寺内大畑120番１	水道管の埋設	平成29年６月27日	平成29年７月７日 秋市教指令第288号	立会調査
12	個人	秋田市寺内大畑３番５、秋田市寺内大小路４	倉庫解体	平成29年７月３日	平成29年７月５日 秋市教指令第287号	立会調査
13	秋田市教育委員会教育長	秋田市寺内焼山51番、秋田市寺内大畑65番５	発掘調査	平成29年７月18日	平成29年８月28日 29受庁財第４号の759	発掘調査
14	個人	秋田市寺内鵜ノ木１番	住宅新築	平成29年７月20日	平成29年７月25日 秋市教指令第291号	立会調査
15	東部瓦斯株式会社	秋田市将軍野南一丁目１番９～秋田市寺内大畑４地先	埋設ガス管の取替	平成29年８月25日	平成29年８月29日 秋市教指令第294号	立会調査
16	東部瓦斯株式会社	秋田市寺内鵜ノ木110地内	埋設ガス管の取替	平成29年10月11日	平成29年10月17日 秋市教指令第303号	立会調査
17	個人	秋田市寺内焼山23番２、131番１、131番３	住宅解体・集合住宅新築	平成29年10月20日	平成29年10月26日 秋市教指令第304号	立会調査
18	個人	秋田市寺内大畑351番２	カーポート設置工事	平成29年11月６日	平成29年11月８日 秋市教指令第305号	立会調査

古代秋田城の築地塀を構成する白色および褐色粘土の互層構造について（その２）

秋田大学国際資源学部　教授 今井忠男、講師 西川治、学芸員 千田恵吾、准教授 木崎彰久
秋田大学工学資源学部　元学生 栗崎笑、柴田いずみ

１．はじめに

これまでの発掘調査から､秋田城の築地塀は､写真１に示すように白色と褐色の縞模様（互層）になっていることが知られているが、互層の機能や力学的性能についてはあまり知られていない。一般に、古代城の築地塀は、土を突き固めて層状に重ねていく版築と呼ばれる建築法がとられており、秋田城の築地塀も同様の版築構造である[1)]。しかし、版築の構造は、建築方法から層状となるが、同一の粘土を用いる限り、色彩的に明瞭な縞模様になることはない。つまり、秋田城の築地塀には、色の異なる２種類の粘土が用いられ、意図的にこれらを互層とする版築法が行われたと考えられる。

前回の研究（その１）では[2)]、この築地塀の白色部について、その成因を調べた。この結果、白色部の粘土は、褐色部および築地塀の原料採取場所（土取場）の粘土と比較し、鉱物組成にほとんど差が見られないことがわかった。また、政庁内の白壁がクリストバライトの白粉で化粧されていることが明らかとなり[2)]、このことから、版築の白色部粘土も、土取場の粘土にクリストバライトを主成分とする白色粘土が混ぜられ、白くしたものと推定した。

本研究では、クリストバライトを主成分とする白色原料として、秋田県横手市大森町で産する八沢木粘土を用い、これと土取場粘土と混ぜ合わせて白色混合粘土を作成した。この白色混合粘土と土取場粘土とで版築構造と同様な互層の粘土試料を作成し、これらの強度特性を調べることで、秋田城の築地塀に関する機能や力学的性能を明らかとした。

写真１　秋田城築地塀の断面における白色・褐色粘土の互層

表１　試料粘土の採取場所[1)]

試料番号	試料名称	試料の色	採取場所および地層
A−３	土取場粘土	赤褐色	第106次調査地　C区、第四紀潟西層
C−１	八沢木粘土	灰白色	横手市大森町八沢木地区、新第三紀大森層

(1) 混合比 0%（土取場粘土）　(2) 混合比 10%　(3) 混合比 20%　(4) 混合比 50%　(5) 混合比 100%（八沢木粘土）

写真２　土取場粘土に八沢木粘土を混合した試験片

表２　混合粘土の配合条件

試料名称	最適含水比 w（%）	混合粘土の混合比 w（%）
土取場粘土	30.5	95，90，80，50
八沢木粘土	48.5	5，10，20，50

表３　圧縮試験片の作製条件

試験片サイズ（mm）	φ50×100
突固め回数（回）	50（重り550g、20cm落下）
突固め層数（層）	6（層厚 17mm）
養生日数　（日）	4（乾燥度36%±5%）

２．実験方法

粘土試料には、表１に示す土取場粘土と八沢木粘土を用いた。これら粘土の組成については、前報に示した[2)]。これら現地で採取した粘土は、乾燥させて粉砕した後に篩にかけて精製した。これら乾燥試料は、表２に示すように、あらかじめ測定した最適含水比（締固め密度が最大）となるような水量を含ませて、手で十分にこねた。また、両者を混ぜた混合粘土は、八沢木粘土の混合比が乾燥重量で５～50%になるよう試料を配合した。

このような手順により、最適含水比でこねられた粘土試料から、表３に示すような条件で、圧縮試験用の試験片を作製した。具体的には、直径50mm、高さ10cmのモールド内に粘土を少量づつ入れ、550gの円柱状の重りを20cmの高さから50回落下させ、１層を突き固めた。突き固めた１層の厚さは約17mmで、高さ10cmの円柱試験片が６層となる様に調整した。作製した試験片はモールドから取り出し、室内中で４日間養生し、乾燥度を36%±5%とした。粘土試料は、乾燥度（含水比）によって強度が大きく変化するため、乾燥度の調整が重要となる。

写真２に作製した試験片を示す。写真２（1）～（5）は、八沢木粘土の混合比を０～100%とした試験片である。写真より、八沢木粘土の混合比を上げていくと、土取場粘土の粘土はだんだんと白くなり、混合比50%では、かなり白色な粘土に見える。また、写真３には、突き固め層が、それぞれ３層づつの互層となるように作製した、土取場粘土と混合粘土の試験片を示す。写真より、混合粘土における八沢木粘土の混合比が上がるにしたがい、明確な縞模様が見られる。写真１に示した秋田城築地塀のイメージに近い縞模様は、混合比が20%程度と思われる。

これら試験片は、材料試験機によって一軸圧縮試験を行い、それぞれの試験片の圧縮強度を求めた。また試験後には試験片の含水比を測定し、最適含水比との比から乾燥度を求めた。

（1）混合比 10%　（2）混合比 20%　（3）混合比 50%

写真３　土取場粘土と混合粘土を互層にした試験片

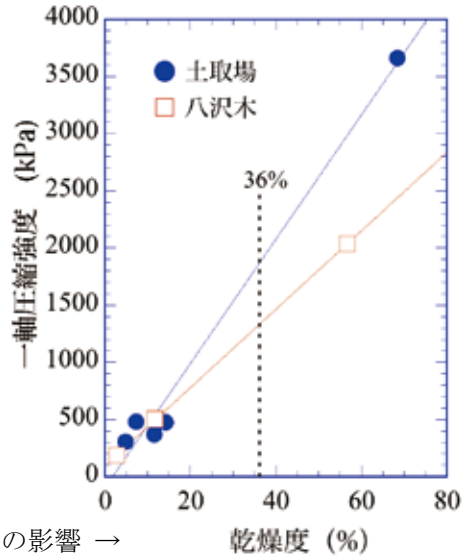


図１　単一粘土の圧縮強度に及ぼす乾燥度の影響 →

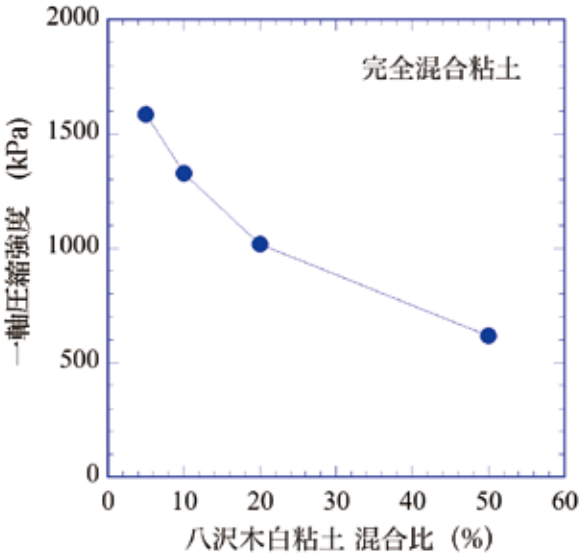


図２　混合粘土の圧縮強度に及ぼす混合比の影響

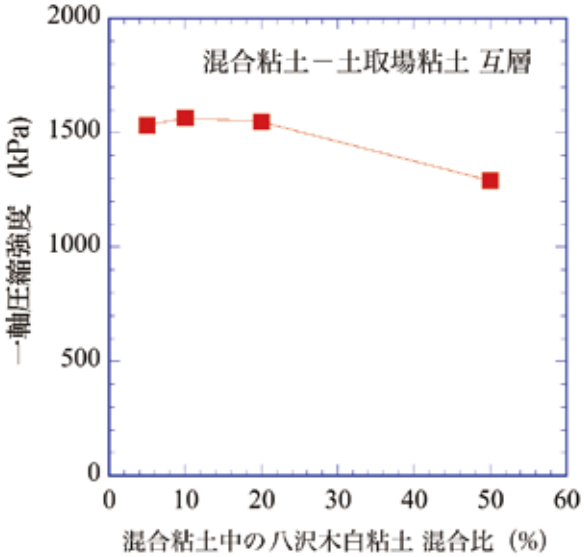


図３　互層粘土の圧縮強度に及ぼす混合比の影響

３．実験結果

はじめに、単一粘土において圧縮強度と乾燥度との関係を調べた。その結果を図１に示す。図より、乾燥度が低いときは、土取場と八沢木の粘土の強度にあまり違いは現れないが、乾燥度が進むにしたがい強度差が広がることがわかる。同程度の乾燥度なら、土取場粘土の強度は八沢木の1.4倍程度になり、秋田城築地塀に用いられた粘土は、強度性能が高いことがわかった。

次に、図２に混合粘土の圧縮試験の結果を示す。図より、混合粘土において八沢木粘土の混合比を増加させると、強度が急激に低下する傾向がわかる。土取場粘土の強度は、八沢木の1.4倍程度であることから、単純には、八沢木粘土を多く混ぜても、混合粘土の強度は2/3程度（1000kPa）までしか低下しないと考えられるが、混合比50%では、それ以上に低下していることがわかる。この原因の１つとして、最適含水比の大きい八沢木粘土を混ぜ合わせたことで、全体の乾燥度が進んでも土取場粘土の乾燥が進まず、強度が上がらなくなったことが考えられる。

これに対し、図３に、混合粘土と土取場粘土とを互層とした試験片の圧縮試験結果を示す。図より、

八沢木粘土を多く混合した低強度の混合粘土を用いても、互層にすれば、試験片の圧縮強度は、あまり低下しないことがわかった。このことから、版築構造は、弱い層を強い層で挟む互層とするため、全体の強度は、概ね強い層の値に近くなると考えられる。この原因として、圧縮による破壊（割れ）は、せん断方向（斜め）に進むため、圧縮方向に垂直な方向に弱面が存在しても、強度への影響は小さいためと考えられる。

４．考察

最後に、秋田城の築地塀が、白色の鉱物を用いた縞模様として造られた要因について考える。そもそも、この築地塀には、土質を硬くするための石灰は用いられておらず[2)]、白色の主鉱物はクリストバライトの白粉であると推定したことから、固化作用を期待して添加したとは考えられない。本実験結果より、クリストバライトを主成分とする白色の粘土を築地塀の原料粘土に混合すると、その強度は低下するため、強度的には混合しない方が良いことが明らかとなった。したがって、築地塀の原料粘土に白色粘土を混合させる意味は、力学機能が多少低下し、製造に手間がかかっても、築地塀の色合いを白色あるいは白の縞模様にしたいという、色彩的な装飾性（デザイン）にあると思われる。

秋田城を造った古代人は、粘土という建築材料の力学的特性をできるだけ低下させずに、材料そのものに色彩的な装飾を試みていることが明らかとなった。このことが、現代的な材料試験の結果から、実証できたと考えられる。

５．まとめ

本研究では、秋田城の築地塀が、白色の鉱物を用いて縞模様として造られた要因およびその力学特性について、実験によって明らかにした。本研究の結果をまとめると、次のようである。

1）土取場粘土に白色の八沢木粘土を混合すると強度は低下する

2）土取場粘土に八沢木粘土を混合した混合粘土と土取場粘土とを交互層にすると強度の低下は少ない

3）築地塀の縞模様を再現するには、白色の八沢木粘土を20％以上混合しなければならない

4）築地塀の色合いを白色あるいは白の縞模様にした理由は、色彩的な価値（装飾）を高めるため

引用文献

1）伊藤武士（2006）: 秋田城跡 最北の古代城柵（日本の遺跡）、同成社.

2）今井ほか（2015）: 古代秋田城の築地塀を構成する白色および褐色粘土の互層構造について（その１）、秋田城跡、秋田城跡調査事務所、pp. 78-81.

①第108次調査地Ａ区第Ⅳ層面全景（西から）

②第108次調査地Ｂ区第Ⅳ層面全景（南から）

図版 1

① SX2494 焼土遺構掘り下げ状況（東から）

②第 109 次調査地全景（南から）

図版２

①調査前状況（東から）

②第Ⅲ層面遺構全景（西から）

③第Ⅲ層面遺構全景（西から）

第 108 次調査地

図版３

① SD2450 溝跡掘り下げ状況（南から）

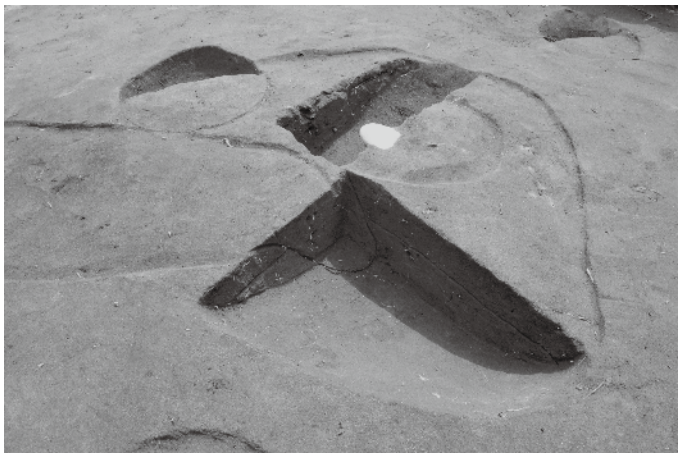
② SB2065 掘立柱建物跡検出状況（南から）

③ SB2065 掘立柱建物跡半裁状況（南から）

④ SB2065 掘立柱建物跡 P1 柱掘り方半裁状況（南東から）

⑤ SB2065 掘立柱建物跡 P4 柱掘り方半裁状況（北から）

⑥ SB2065 掘立柱建物跡 P5 柱掘り方半裁状況（西から）



⑦ SB2065 掘立柱建物跡 P6 柱掘り方半裁状況（北西から）

⑧ SB2065 掘立柱建物跡 P6 柱掘り方半裁状況（南東から）

図版４　　第 108 次調査地

① SB2454 掘立柱建物跡検出状況（北から）

② SA2149 材木塀跡半裁状況（南から）

③ SA2455 柱列跡半裁状況（南西から）

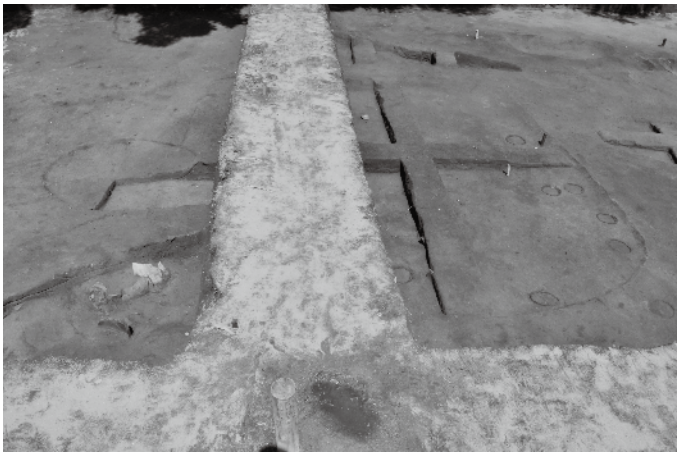
第 108 次調査地

図版５

① SD2456 溝跡掘り下げ状況（東から）

② SI2463 竪穴建物跡掘り下げ状況（南から）

③ SI2463 竪穴建物跡カマド断ち割り状況（南から）



④ SI2459 竪穴建物跡掘り下げ状況（南から）

⑤ SI2459 竪穴建物跡遺物出土状況（西から）

⑥ SI2459 竪穴建物跡カマド検出状況（東から）

⑦ SI2459 竪穴建物跡カマド（南西から）

⑧ SI2459 竪穴建物跡カマド断ち割り状況（北東から）

図版６　　第 108 次調査地

① SI2459 竪穴建物跡カマド断ち割り状況（西から）

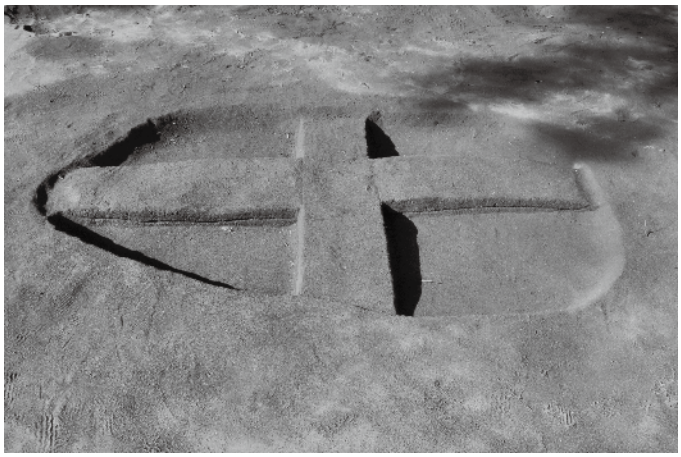
② SI2460 竪穴建物跡掘り下げ状況（西から）

③ SI2460 竪穴建物跡 P10 柱穴半裁状況（南から）

④ SI2460 竪穴建物跡 P1 柱穴半裁状況（南から）

⑤ SI2461 竪穴建物跡掘り下げ状況粘土除去後（西から）

⑥ SI2462 竪穴建物跡掘り下げ状況（東から）



⑦ SK2465 土坑半裁状況（南から）

⑧ SK2479 土坑半裁状況（南西から）

第 108 次調査地

図版７

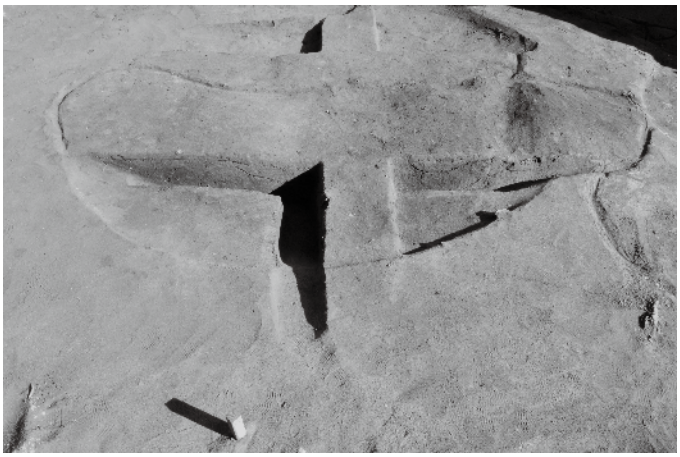
① SK2468 土坑掘り下げ状況（南東から）

② SK2480 土坑検出状況（南から）

③ SK2481 土坑半裁状況（西から）

④ SX2169 焼土遺構断ち割り状況（南から）

⑤ SX2169 焼土遺構断ち割り状況（南から）



⑥ SX2490 焼土遺構掘り下げ状況（北西から）

⑦ SX2491 焼土遺構掘り下げ状況（北西から）

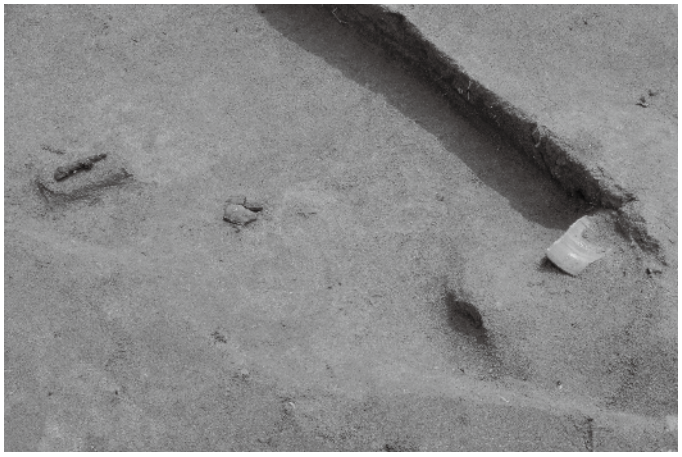
⑧ SX2492 焼土遺構掘り下げ状況（南西から）

図版８　第 108 次調査地

① SX2492 焼土遺構遺物出土状況（南から）

② SX2495 焼土遺構半裁状況（南東から）

③ SX2496 焼土遺構半裁状況（南東から）



④ SX2496 焼土遺構遺物出土状況（北西から）

⑤ SX2494 焼土遺構掘り下げ状況（北東から）

⑥ SX2497 焼土遺構掘り下げ状況（東から）

⑦ SD2498 溝跡土層断面（西から）

⑧ SD2499 溝跡土層断面（東から）

第 108 次調査地

図版９

①第Ⅱ層面検出遺構全景（南西から）

②第 109 次調査地調査前状況（南から）

③ SA2500・SA2501 材木塀跡半裁状況（西から）

④ SA2500 材木塀跡半裁状況（南から）

図版10

第 109 次調査地

① SA2501 半裁状況（北から）

② SA2502・SA2503 材木塀跡半裁状況（東から）

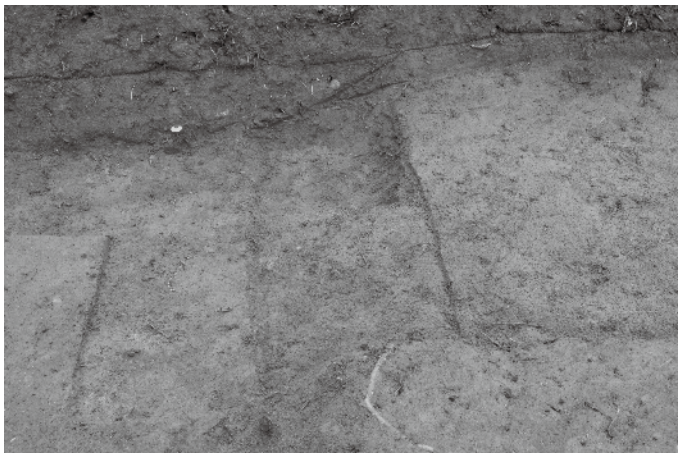
③ SA2502 材木塀跡半裁状況（南から）

④ SA2503 材木塀跡半裁状況（北から）

⑤ SKP2504 柱掘り方検出状況（東から）

⑥ SKP2505 柱掘り方検出状況（東から）

⑦ SD2507 溝跡半裁状況（東から）



⑧ SD2508 溝跡半裁状況（東から）

第 109 次調査地

図版11

①第Ⅲ層面検出遺構全景（北東から）

②第Ⅳ層面検出遺構全景（北から）

③ SD2510 溝跡半裁状況（東から）

④第 109 次調査地北側西壁土層断面（北東から）

⑤第 109 次調査地南側西壁土層断面（北東から）

図版12　　第 109 次調査地

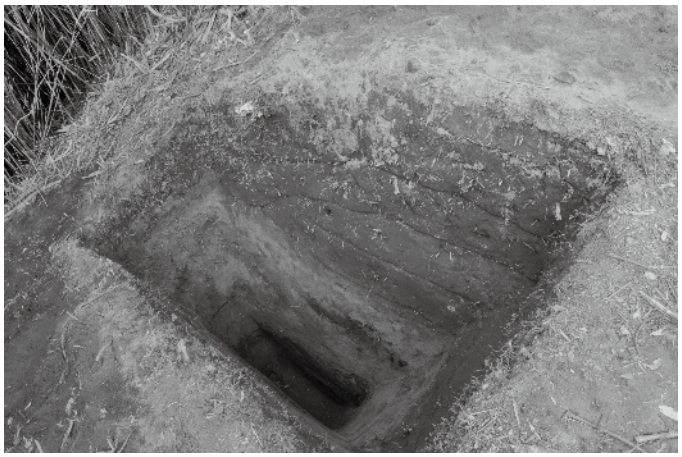
①Ａ区調査前状況（西から）

②Ｂ・Ｃ区調査前状況（北から）

③Ａ区第Ⅲ・Ⅳ層面検出状況全景（西から）

④Ａ区南壁土層断面（北から）

⑤Ｂ区第Ⅴ層検出状況全景（東から）



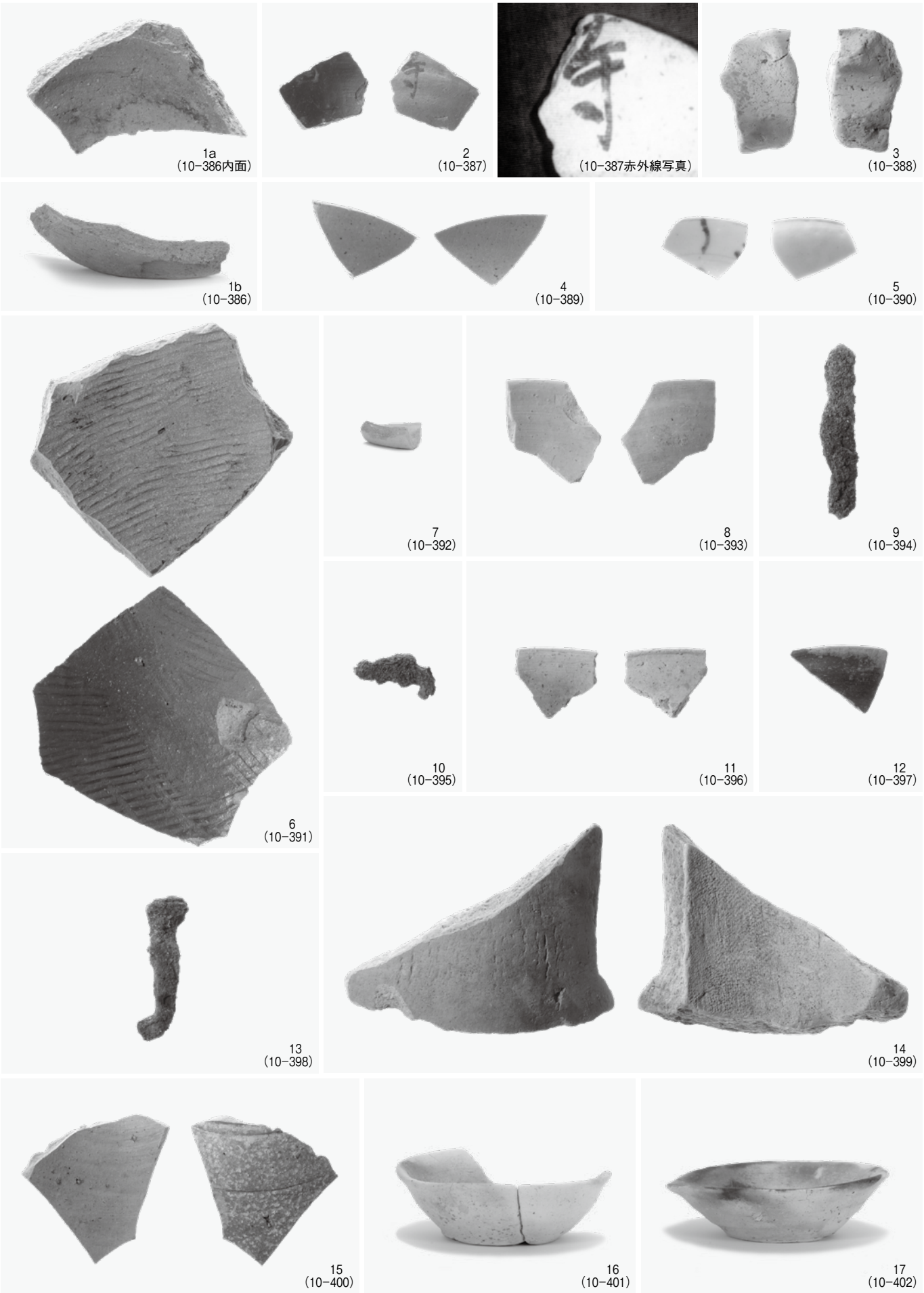
⑥Ｂ区北壁土層断面（南東から）

⑦Ｃ区第Ⅴ層検出状況全景（東から）

⑧Ｃ区第南壁土層断面（北東から）

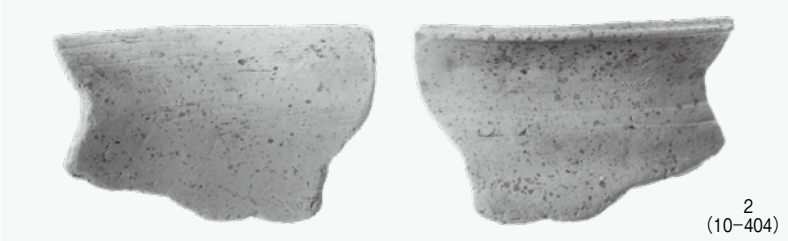
第 110 次調査地

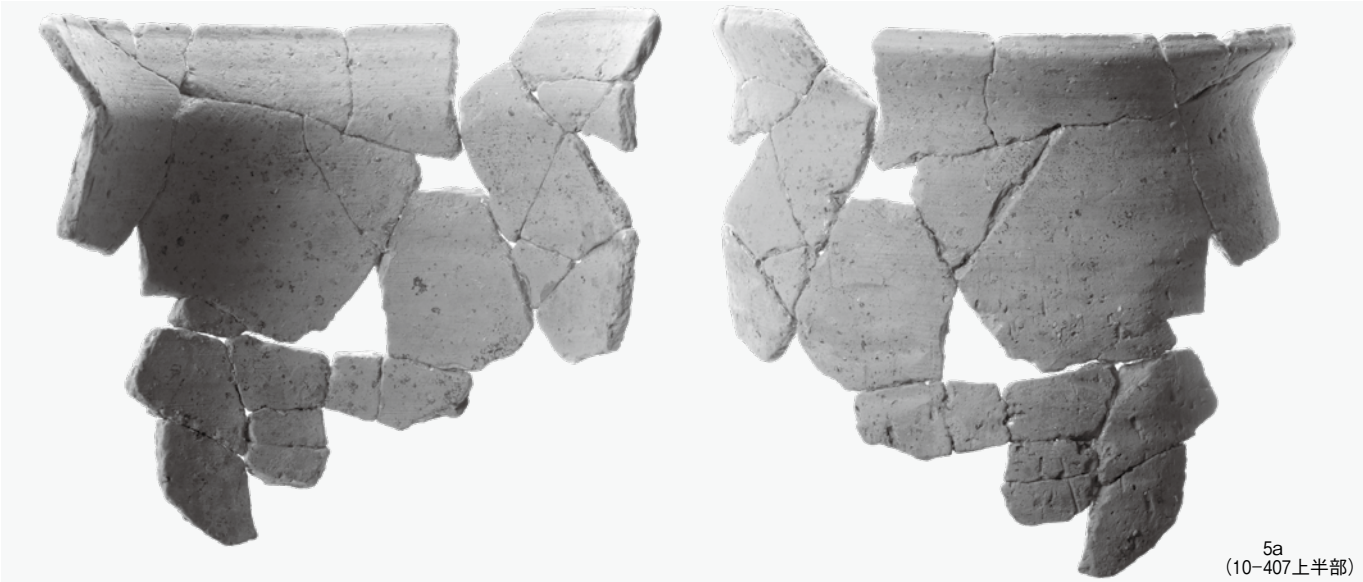
図版13



1～5　SD2450、　6　SK2452、　7～9　SB2065、　10　SB2454、　11　SA2455、　12・14　SD2456
13　　SD2458、　15～17　SI2459　（9・10・13はS＝1／2、14はS＝1/4、その他はS＝1／3）

図版14　　第 108 次調査地出土遺物（遺構内）



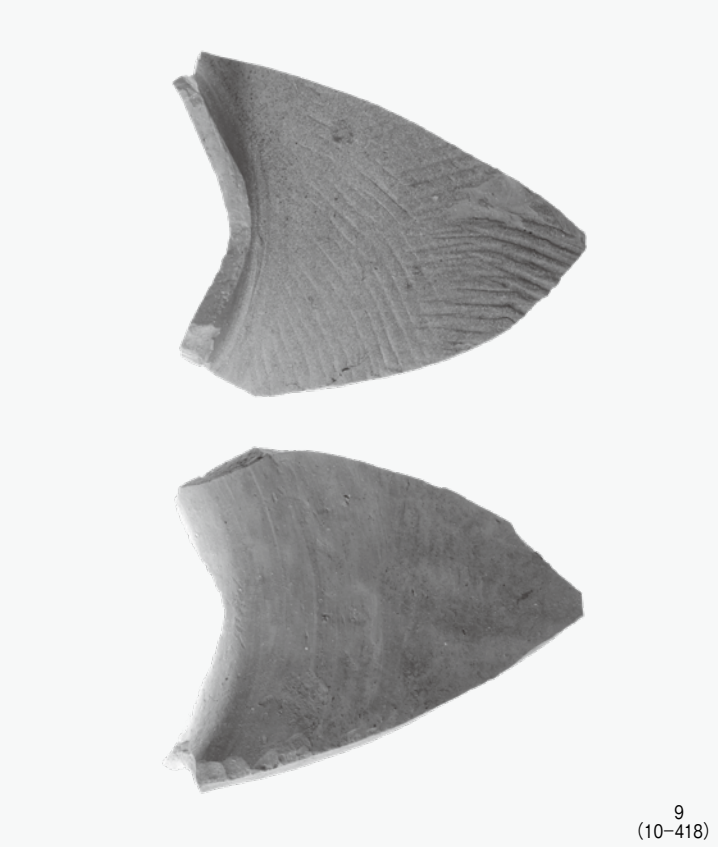


1～5　SI2459　（すべてS＝1／3）

第 108 次調査地出土遺物（遺構内）　**図版15**

1a
(10-408上半部)

1b
(10-408下半部)


9
(10-418)

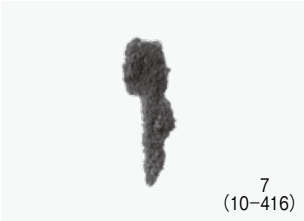
2
(10-411)

3
(10-412)

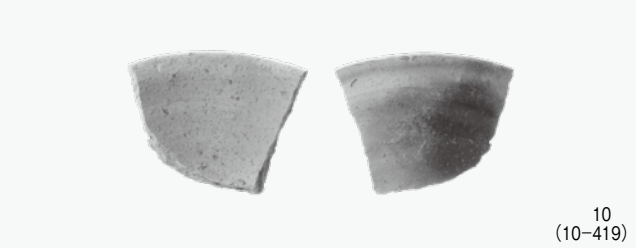
4
(10-413)

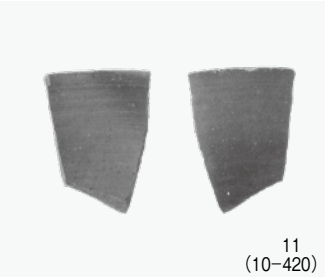
5
(10-414)

6
(10-415)


7
(10-416)

8
(10-417)


10
(10-419)


11
(10-420)

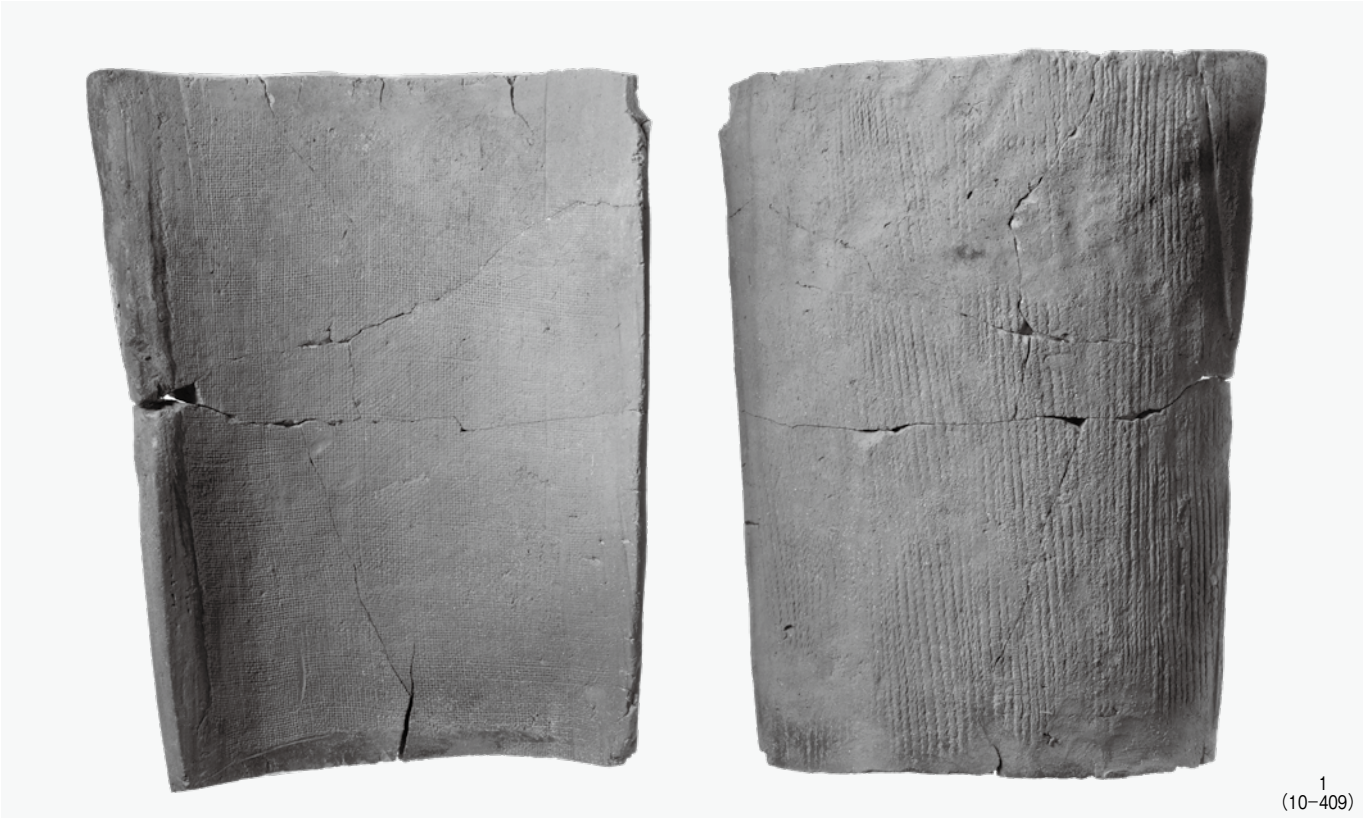
12
(10-421)

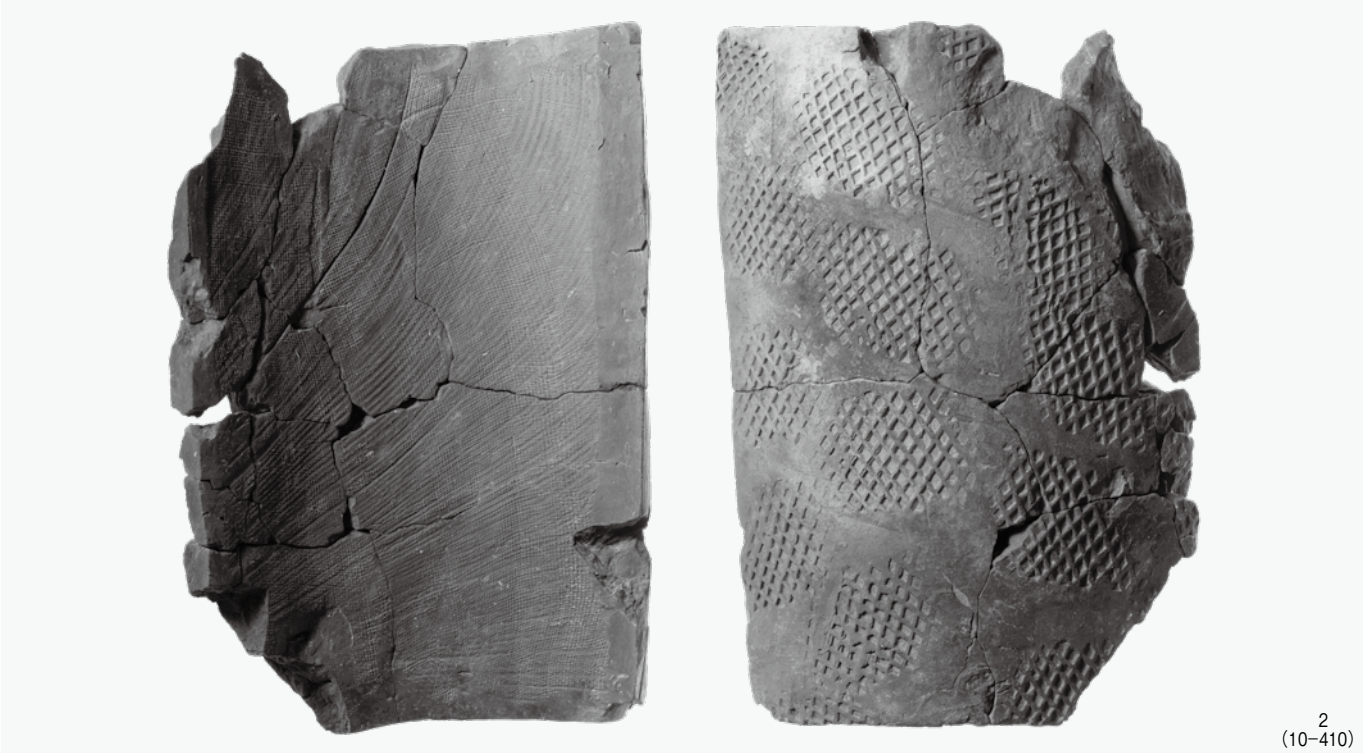
13
(10-422)

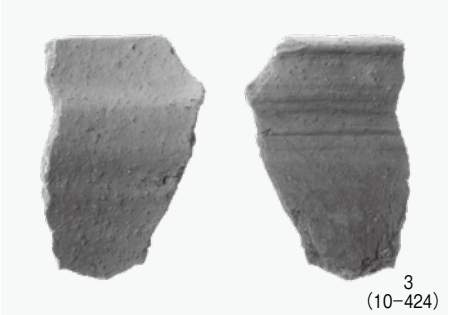
14
(10-423)

1　SI2459、　2～8　SI2460、　9・10　SI2461、　11～13　SI2462、　14　SI2463（7・13はS＝1／2、その他はS＝1／3）

図版16　　第108次調査地出土遺物（遺構内）

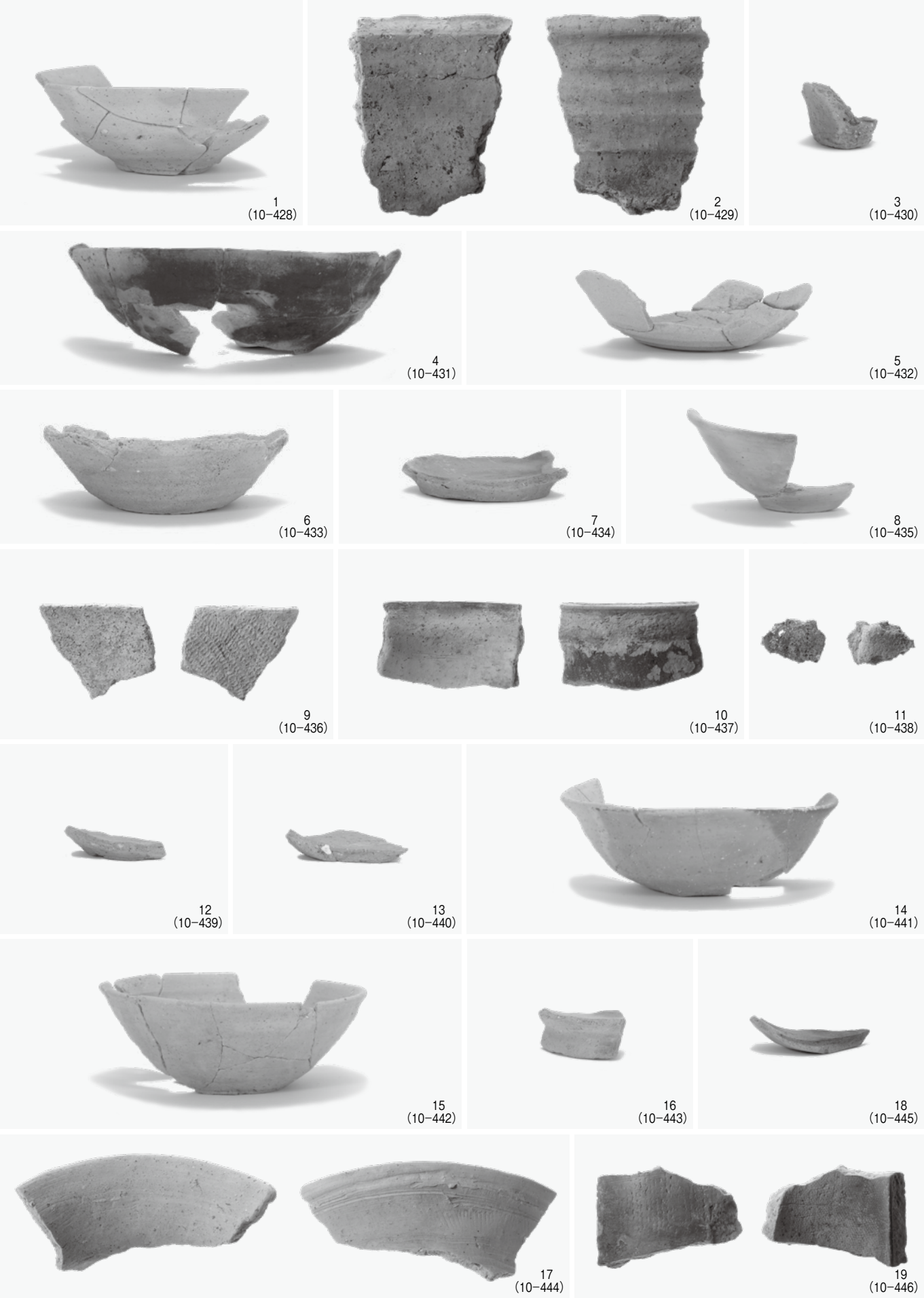






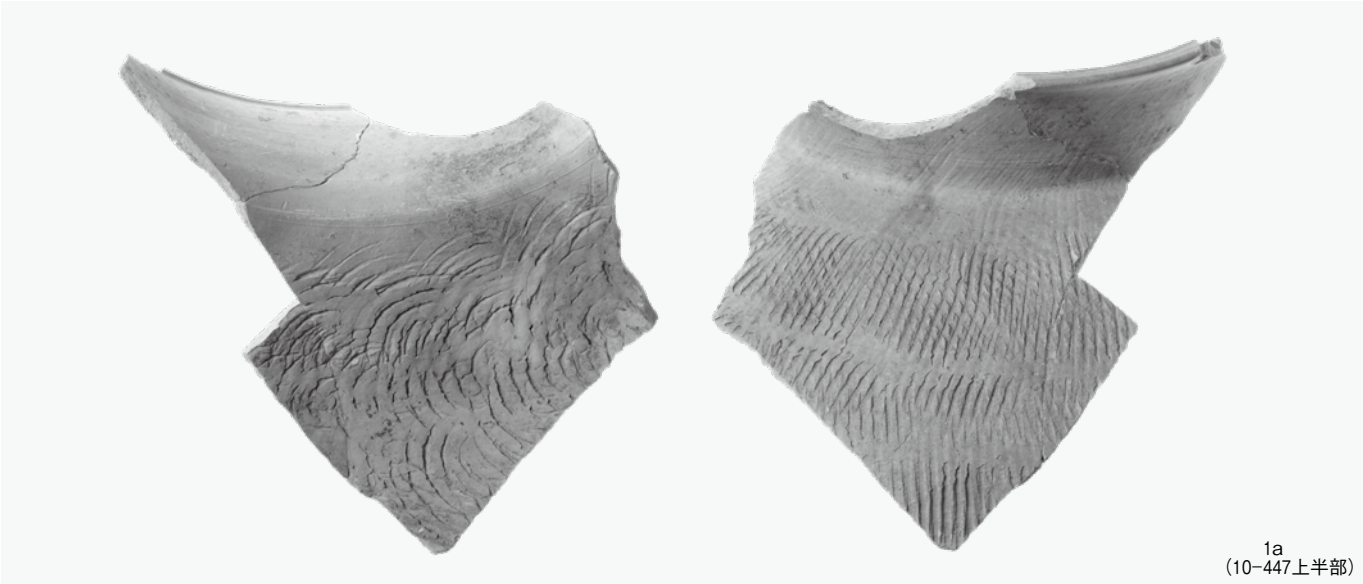
１・２　SI2459、　３～６　SI2463　（１・２はS＝1／2、３～６はS＝1／3）

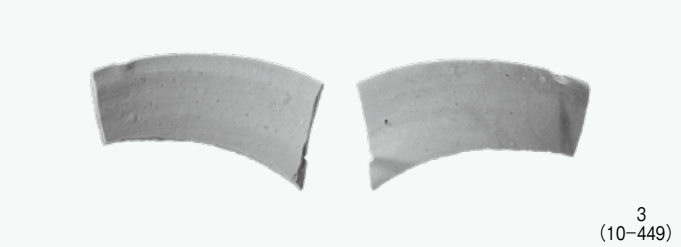
第 108 次調査地出土遺物（遺構内）　**図版17**

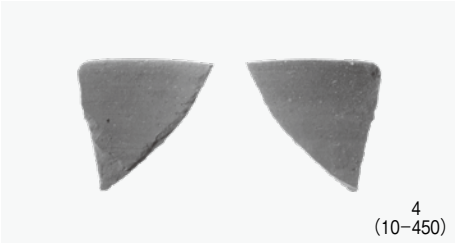


１～３　SI2463、　４～７　SK2464、　８・９　SK2465、　10　SK2468、　11　SK2471、　12　SK2475、
13　SK2478、　14・15　SK2480、　16　SK2481、　17・18　SK2484、　19　SK2468　（11はS＝1／2、その他はS＝1／3）

図版18　第 108 次調査地出土遺物（遺構内）

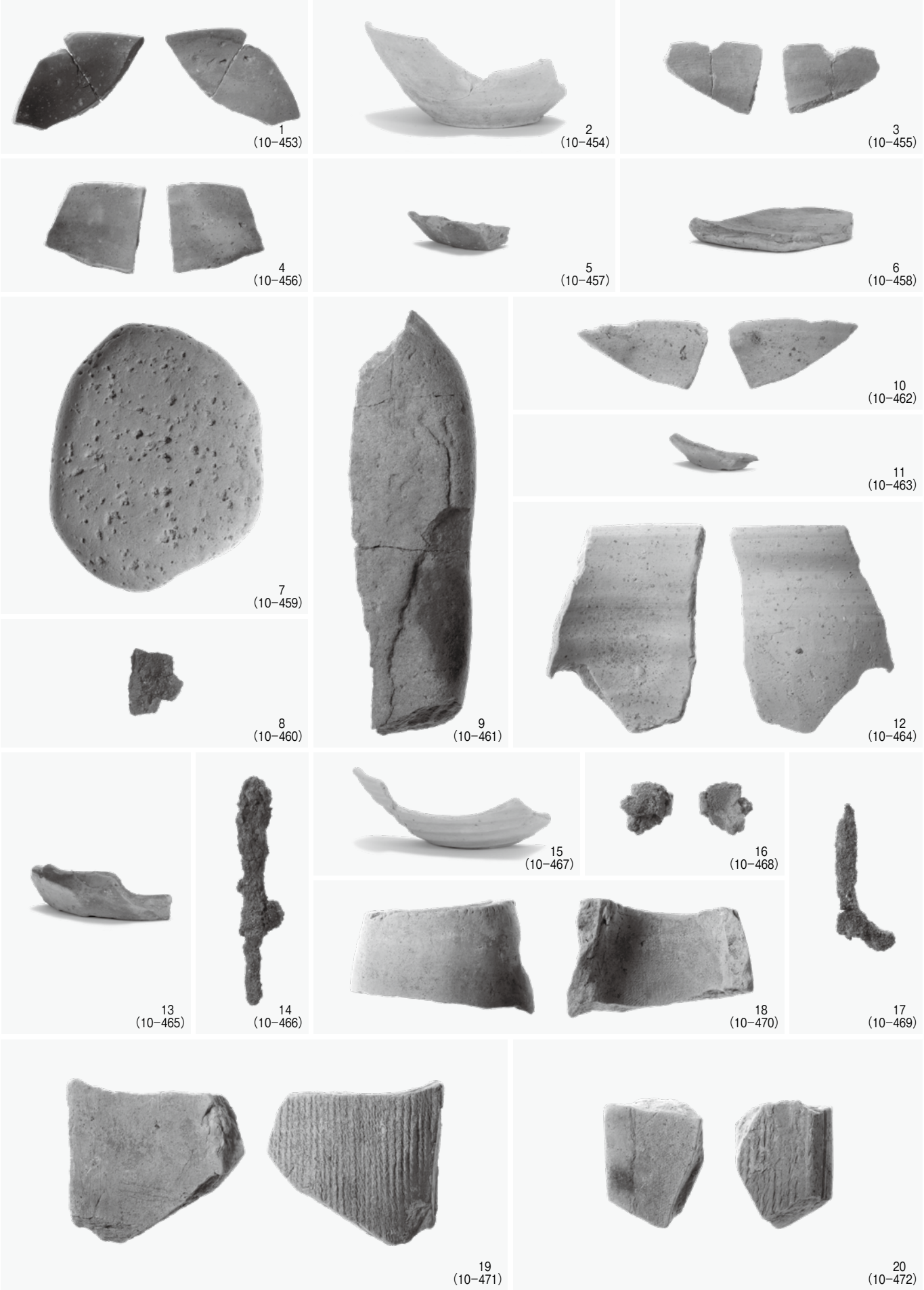






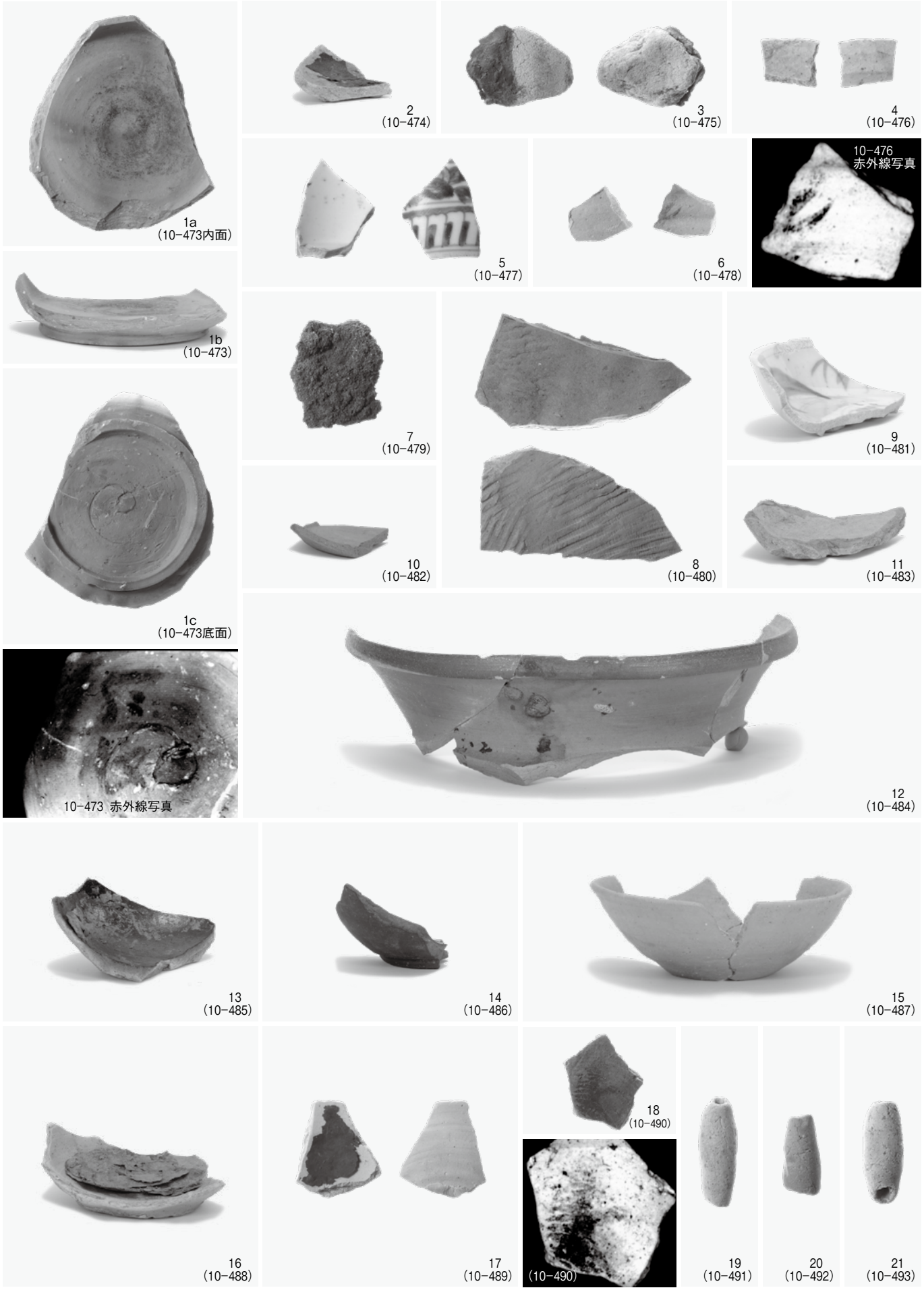
１・２　SX2169、　３　SX2490、　４～６　SX2491　（６はS＝1／2、その他はS＝1／3）

第 108 次調査地出土遺物（遺構内）　**図版19**



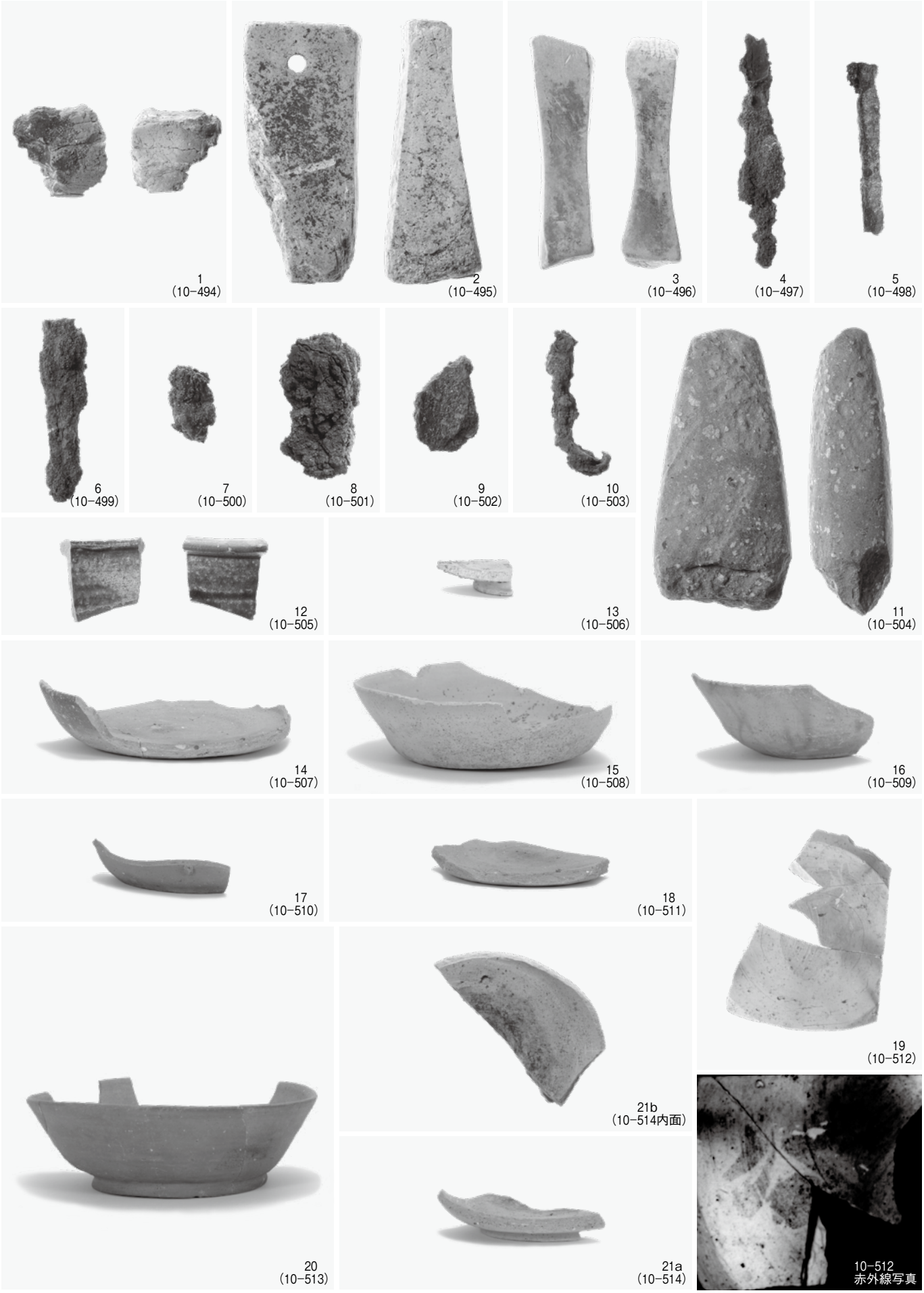
1・2　SX2492、　3～8、19・20　SX2494、　9　SX2495、　10～14　SX2496、　15～17　SX2497、　18　SX2490
（8・14・16・17はS＝1／2、19・20はS＝1／4、その他はS＝1／3）

図版20　第108次調査地出土遺物（遺構内）



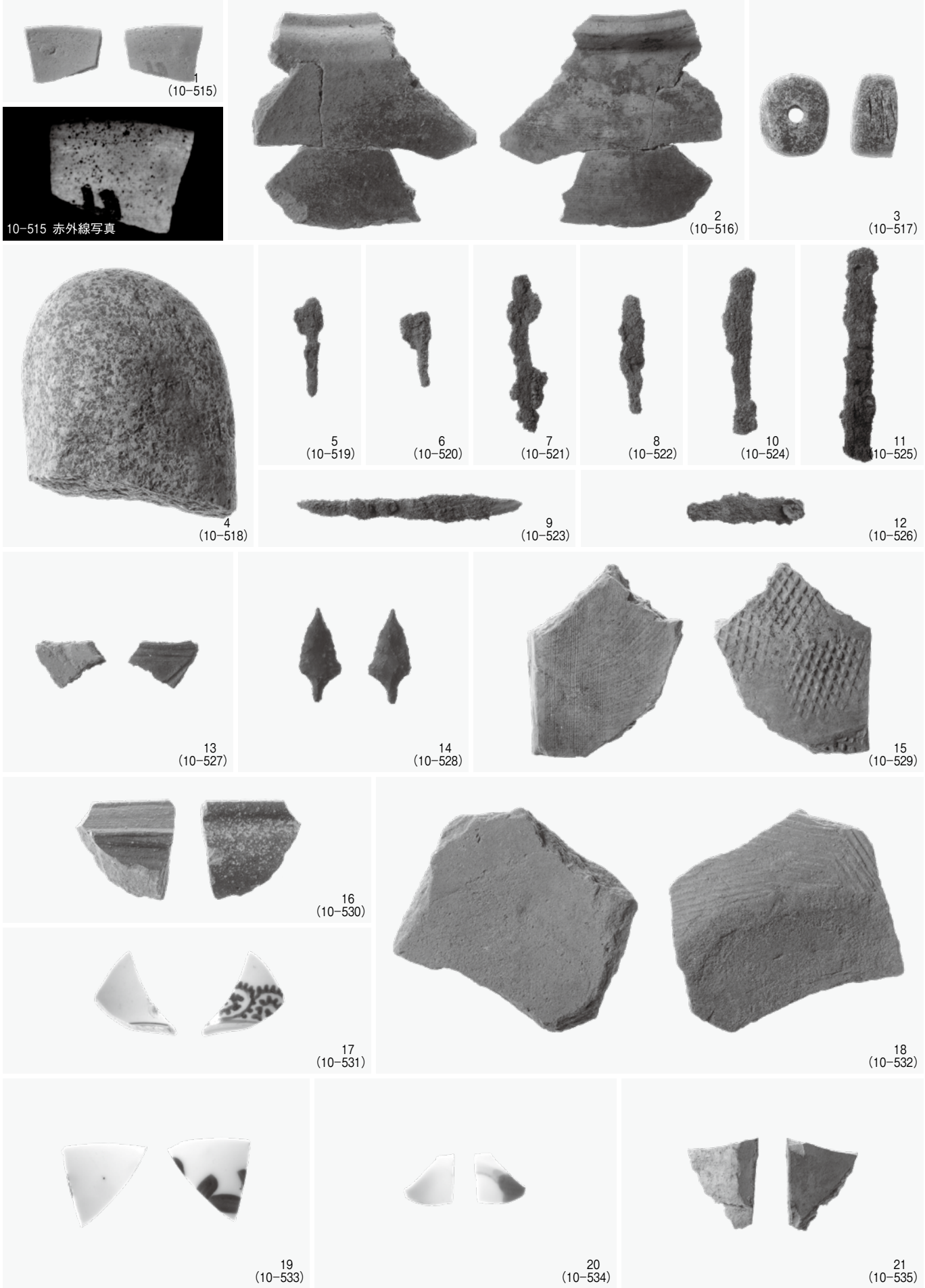
1～7　第Ⅰ層、　8・9　第Ⅱ層、　10～21　第Ⅲ層　（すべてS＝1／3）

第 108 次調査地出土遺物（第Ⅰ～Ⅲ層）　**図版21**



１～13　第Ⅲ層、　14～21　第Ⅳ層　（１～11はS＝1／2、12～21はS＝1／3）

図版22　　第 108 次調査地出土遺物（第Ⅲ・Ⅳ層）



1～15　第108次第Ⅳ層、　16　第109次SKP2504、　17　第109次第Ⅰ層、　18　第109次第Ⅱ層、　19　第110次A区第Ⅱ層、
20　第110次B区第Ⅲ-２層、　21　第110次C区第Ⅲ-３層　（３～12・14はS＝1／2、15・21はS＝1／4、その他はS＝1／3）

第 108 次（第Ⅳ層）・109 次・110 次調査地出土遺物　**図版23**

報　告　書　抄　録

ふりがな	あきたじょうあと
書名	秋田城跡
副書名	秋田城跡歴史資料館年報2017
巻次	2017
シリーズ名	秋田城跡歴史資料館年報
シリーズ番号	
編著者名	神田和彦、児玉駿介、松下秀博、阿部美穂
編集機関	秋田市立秋田城跡歴史資料館
所在地	〒011-0907　秋田県秋田市寺内焼山９番６号　TEL：018-845-1837　FAX：018-845-1318
発行年月日	2018年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
あきたじょうあと 秋田城跡	あきたし　てらうち 秋田市寺内	05201	186	39度 44分 20秒	140度 05分 00秒	第108次 20170509～ 20170920	534	保護管理
						第109次～ 20170921～ 20171006	41	保護管理
						第110次 20171011～ 20171031	45	現状変更

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
秋田城跡 第108次調査	城柵官衙 遺跡	奈良 ～平安	〔古代〕 掘立柱建物跡２棟、柱列跡１条、材木塀跡１条、溝跡５条、竪穴建物跡５軒、土坑26基、焼土遺構９基 〔近世以降〕 溝跡２条、土坑３基	須恵器、土師器、赤褐色土器、陶磁器、瓦、石製品（砥石、金床石ヵ）、石器、鉄製品、鉄滓	城内区画施設の調査
秋田城跡 第109次調査	城柵官衙 遺跡	奈良 ～平安 中世	材木塀跡４条、柱掘り方２基、溝跡３条、土塁１基、道路遺構２面	陶磁器、珠洲系中世陶器	外郭西門周辺の中世における利用状況および、古代秋田城の城外西大路の調査
秋田城跡 第110次調査	城柵官衙 遺跡	奈良 ～平安		近世磁器、瓦	城内西大路の調査

要約

第108次調査では、城内区画施設と廃絶時期および方位規制が対応すると考えられる焼土遺構群と、その廃絶後に方位規制を真北方向とした竪穴建物遺構群を検出し、焼山地区南西部の変遷と実態の一部を把握した。

第109次調査では、周辺の調査で確認している平安・奈良期道路遺構および中世後期材木塀遺構の延長を検出した。

第110次調査では焼山地区東部および大畑地区において、政庁から外郭西門に至る城内西大路の検出に努めたが、既に削平を受けており、古代遺構は発見できなかった。

秋田城跡歴史資料館要項

Ⅰ　組織規定

秋田市立秋田城跡歴史資料館条例　抜粋（平成 27 年 12 月 21 日　条例第 62 号）

第１条

史跡秋田城の保護および管理、調査研究、整備、公開ならびに活用を通じ、市民の教育と文化の向上に資するため、秋田市立秋田城跡歴史資料館（以下「歴史資料館」という。）を秋田市寺内焼山９番６号に設置する。

第２条

歴史資料館において行う事業は、次に掲げるものとする。

(1) 史跡秋田城跡の保護および管理に関すること。

(2) 史跡秋田城および関連遺跡の調査研究に関すること。

(3) 史跡秋田城の整備および公開に関すること。

(4) 史跡秋田城跡および関連遺跡の出土品および調査成果の展示および普及に関すること。

(5) 史跡秋田城跡についての学習活動の支援等に関すること。

(6) 関係機関および関係団体等との連携に関すること。

(7) 前各号に掲げるもののほか、歴史資料館の設置の目的を達成するために必要と認める事業。

Ⅱ　発掘調査体制

１　調査体制

秋田市

秋田市長	穂　積　　志
観光文化スポーツ部長	秋　山　尚　子

調査機関

秋田市立秋田城跡歴史資料館

館長	松　木　　仁
事務長	斎　藤　和　敏

調査・普及担当

主査	神　田　和　彦
主事	児　玉　駿　介
嘱託	阿　部　美　穂

管理運営担当

主席主査	山　上　桐　子
主査	三　浦　　龍
主査	松　下　秀　博
技能員	佐　藤　奈緒子
嘱託	佐々木　アツ子

２　調査指導機関

宮城県多賀城跡調査研究所

秋田城跡（秋田城跡歴史資料館年報 2017）

印刷・発行　平成 30 年３月
発　　行　秋田市教育委員会
編　　集　秋田市立秋田城跡歴史資料館
〒011－0907 秋田市寺内焼山９番６号
TEL 018－845－1837　FAX 018－845－1318
印　　刷　秋田協同印刷株式会社

III